

平成7年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査

—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査—

概要報告書

寺田遺跡 (第40・41・47・52・55・57地点)

芦屋廃寺遺跡 (W地点・第29・38地点)

月若遺跡 (第20・25・28・30・33地点)

打出岸造り遺跡 (第1地点)

打出小樋遺跡 (第17地点)

金津山古墳 (第9地点)

久保遺跡 (第15地点)

山芦屋遺跡 (S8地点)

1996年3月

芦屋市教育委員会

平成7年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査

—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査—

概要報告書

寺田遺跡 (第40・41・47・52・55・57地点)

芦屋廃寺遺跡 (W地点・第29・38地点)

月若遺跡 (第20・25・28・30・33地点)

打出岸造り遺跡 (第1地点)

打出小槌遺跡 (第17地点)

金津山古墳 (第9地点)

久保遺跡 (第15地点)

山芦屋遺跡 (S8地点)

1996年3月

芦屋市教育委員会

刊行にあたって

本書は、市内の各所に分布する埋蔵文化財の確認調査を国庫補助金を得て実施し、その結果をまとめたものです。この数年、個人住宅の建替や新築に伴い、遺跡の保護とその取扱いを定めることを目的に行っているもので、住宅都市である本市にとっては、市民生活とも直結する重要な行政施策の一つです。

平成6年度までは、本調査の件数も年間2～6件程度を対象とし、ある程度軌道に乗ってまいりましたが、平成7年度は、試掘だけの件数も80余件となり、本書では、そのうち補助金により実施し、主要な成果のあった8遺跡19地点分の調査結果を一挙に報告せざるを得なくなりました。

言うまでもなく、昨年度は、年明けの平成7年1月17日未明に兵庫県南部地震が発生しました。その結果、文化財保護事業も真向からこの予期しなかった未曾有の災害に直面することになりました。阪神・淡路大震災の復旧・復興事業は、被災地の芦屋にとりまして、平常の市民生活を取り戻す緊急の重要施策となりましたが、これに伴う遺跡調査が文化庁で策定された「基本方針」に基づき、弾力的に実施される運びとなりました。今年度はその最初の年度に該当し、とくに早期復興の個人専用住宅や中・小企業の共同住宅の建設事業の円滑化を目指して行われたものです。発掘調査並びに出土品の整理事業には、市教育委員会の社会教育部文化財課があたりました。

各報告を通覧してわかるとおり、芦屋川流域の縄文・弥生時代の集落から金津山古墳の周濠の実態など、また、翠ヶ丘丘陵の中・近世の耕作地を中心とする生産遺跡など、多彩な埋蔵文化財の一端が明らかとなり、本年度のうちに緊急発掘調査を実施したり、平成8年度に向けてその取扱いなどを早急に定めるところとなりました。

最後になりましたが、炎天下や寒風が吹きすさぶ中、本市の震災復興を目的とした遺跡調査と取り組まれた調査員や補助員の方々、災害という非常の事態に直面しても、埋蔵文化財の保護のためにご協力いただいた地権者各位に對し厚くお礼申し上げます。

1996年3月31日

芦屋市教育長

三 浦 清

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成7年度国庫補助事業として実施してきた埋蔵文化財緊急発掘調査の実績報告書である。調査費および遺物整理・報告書刊行に要した経費は、総額570万円で、国1/2、県1/4、市1/4の補助率である。

2. 調査対象は、補助金を適用した市内遺跡に係る8遺跡19地点分の緊急調査で、本書で報告するのは、寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点）・月若遺跡（第20・25・28・30・33地点）・芦屋庵寺遺跡（W地点・第29・38地点）・山芦屋遺跡（S8地点）・打出小穂遺跡（第17地点）・打出岸造り遺跡（第1地点）・久保遺跡（第15地点）・金津山古墳（第9地点）である。

3. 発掘調査は、森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課文化財係長）・木南アツ子（同課嘱託）両名が担当した。国庫補助金に係わる事務は、森岡秀人・岡田きよみ（同課庶務担当職員）が担当し、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の榎本誠一（課長補佐）・長谷川誠・村上賢治・山本誠の諸氏、同県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班の山本三郎（班長）・水口富夫（主査）両氏から種々ご指導を賜った。

発掘調査の実測に使用した基準点は、地震直後の調査であったため、芦屋市下水道台帳図記載の下水マンホール基準点標高（T.P.）によった。

4. 発掘調査および遺物・資料整理作業は、森岡・木南が担当し、その指導の下、下記の芦屋市臨時的任用職員（調査員・調査補助員・整理員・整理補助員）が従事した。

相澤敦子・石野照代・伊勢かほる・梅村木綿子・梅本素子・奥谷由香・奥出淑子・久保ふく子・河野千裕・小島静子・竹村忠洋・戸塚由美子・中井みどり・仲谷由利子・南由起・深野信之

5. 報告文の作成は、森岡秀人・木南アツ子両名が行い、目次と文中に氏名を掲げて、その分担と責を明らかにした。資料整理・報告書作成作業は森岡・木南の指導の下、遺物洗浄・注記を相澤・奥出・久保・中井・小島が主として行い、遺物復元は石野が中心となり、梅本・奥出が一部を担った。土器実測は木南・戸塚・竹村・河野・奥谷・深野・南が、石器実測は森岡が行い、遺構製図は木南・戸塚・奥谷が、遺物製図は笹山美津子が行い、森岡が部分補正と加筆をそれぞれ分担した。写真図版並びに縮図作業は森岡・木南・仲谷・中西邦子が主担し、臨機に協力し合って進捗させ、竹村が一部援助した。現地写真撮影は森岡・木南と一部竹村・深野が担当し、遺物撮影は木南・中西邦子・戸塚由美子の助手を得て、森岡が行った。

なお、現地調査並びに遺物調査に際し、浅岡俊夫・古川久雄・松田和義・西村歩・藤本史子諸氏の援助や助言を受けた。記して感謝の意を表する。また、市内で並行して震災復興調査〔本格調査〕に従事された兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班支援職員の矢口裕之（群馬県）・北原治（滋賀県）・長屋幸二（岐阜県）・岡本泰典（岡山県）・森正（京都府）・佐藤康二（埼玉県）・神野信（千葉県）・沖憲明（広島県）の8氏には、小規模・客細な本市教育委員会の確認調査について、適宜器材提供や貸出など常に暖かいご協力とご配慮をいただいた。記して感謝と敬意を表する。

6. 本書の執筆・編集は、森岡秀人・木南アツ子が担当した。

本文目次

刊行にあたって	芦屋市教育長 三 浦 清	i
例 言		ii
本文目次 挿図目次 図版目次		iii～xii

I. 平成7年度埋蔵文化財発掘調査の経過

1. 阪神・淡路大震災と本年度発掘調査の概況	(森岡秀人)	1
2. 国庫補助事業発掘調査の計画と着手	(森岡)	4

II. 発掘調査概要報告

1. 寺田遺跡

(1) 調査地の位置と環境	(森岡)	5
(2) 第40地点の調査	(森岡・木南アツ子)	6
(3) 第41地点の調査	(森岡・木南)	10
(4) 第47地点の調査	(森岡・木南)	12
(5) 第52地点の調査	(森岡・木南)	18
(6) 第55地点の調査	(森岡・木南)	20
(7) 第57地点の調査	(森岡・木南)	27
(8) 小 結	(森岡)	30

2. 芦屋廃寺遺跡

(1) 調査地の位置と環境	(森岡)	31
(2) W地点の調査	(森岡・木南)	31
(3) 第29地点の調査	(森岡・木南)	40
(4) 第38地点の調査	(森岡・木南)	43
(5) 小 結	(森岡)	46

3. 月若遺跡

(1) 調査地の位置と環境	(森岡)	47
(2) 第20地点の調査	(森岡・木南)	47
(3) 第25地点の調査	(森岡・木南)	52
(4) 第28地点の調査	(森岡・木南)	68
(5) 第30地点の調査	(森岡・木南)	72
(6) 第33地点の調査	(森岡・木南)	76
(7) 小 結	(森岡)	82

4. 打出岸造り遺跡

- (1) 調査地の位置と環境 (森岡) 83
- (2) 第1地点の調査 (森岡) 83
- (3) 小結 (森岡) 91

5. 打出小槌遺跡

- (1) 調査地の位置と環境 (森岡) 92
- (2) 第17地点の調査 (森岡・木南) 92
- (3) 小結 (森岡) 94

6. 金津山古墳

- (1) 調査地の位置と環境 (森岡) 95
- (2) 第9地点の調査 (森岡・木南) 95
- (3) 小結 (森岡) 102

7. 久保遺跡

- (1) 調査地の位置と環境 (森岡) 103
- (2) 第15地点の調査 (森岡・木南) 103
- (3) 小結 (森岡) 106

8. 山芦屋遺跡

- (1) 調査地の位置と環境 (森岡) 107
- (2) S 8 地点の調査 (森岡) 108
- (3) 小結 (森岡) 117

Ⅲ. 総 括

1. 芦屋川右岸遺跡群における寺田遺跡・芦屋庵寺遺跡・月若遺跡の相対

- 関係と様相の変化について (森岡) 118

2. 打出岸造り遺跡発見地の再調査とその成果 (森岡) 120

3. 金津山古墳後円部を巡る周濠と出土埴輪について (森岡) 121

4. 縄文時代堅穴住居跡の初見と山芦屋遺跡の範囲をめぐって (森岡) 122

5. 山芦屋遺跡 S 8 地点における縄文中期末～後期初頭の土器様相の推移 (森岡) 123

6. 平成7年度の震災復興調査(初年度)を終えて (森岡) 123

引用・参考文献目録 124

報告書抄録 130

あとがき (森岡)

插图目次

第1图	芦屋市内遺跡分布图 1/50,000	3
第2图	寺田遺跡調査地点分布图 1/5000	5
第3图	調査風景	6
第4图	調査区配置图 1/600	6
第5图	土層断面実測图 (1) 1/50	7
第6图	土層断面実測图 (2) 1/50	8
第7图	寺田遺跡第40地点出土遺物実測图 1/4	9
第8图	調査地風景	10
第9图	調査区配置图 1/200	11
第10图	土層断面実測图・柱状图 1/40	12
第11图	寺田遺跡第41地点出土遺物実測图 1/4	12
第12图	調査風景	13
第13图	調査区配置图 1/200	13
第14图	3層上面遺構平面実測图 1/100	14
第15图	土層断面実測图 1/40	15
第16图	寺田遺跡第47地点出土遺物実測图 1/4	16
第17图	調査風景	18
第18图	調査区配置图 1/500	19
第19图	5層上面遺構平面実測图 1/40	20
第20图	土層断面実測图 1/40	21
第21图	寺田遺跡第52地点出土遺物実測图 1/4	21
第22图	調査風景	22
第23图	調査区配置图 1/400	23
第24图	土層断面実測图 1/60	24
第25图	寺田遺跡第55地点出土遺物実測图 (1) 1/4	25
第26图	寺田遺跡第55地点出土遺物実測图 (2) 1/4	26
第27图	調査風景	27
第28图	調査区配置图 1/100	28
第29图	土層断面実測图 1/40	28
第30图	4層上面遺構平面・断面実測图 1/40	29
第31图	寺田遺跡第57地点出土遺物実測图 1/4	29
第32图	芦屋廃寺遺跡調査地点分布图 1/5000	31
第33图	調査風景	31
第34图	調査区配置图 1/500	32
第35图	土層断面実測图 1/40	34
第36图	芦屋廃寺遺跡W地点出土遺物実測图 (1) 1/4	36
第37图	芦屋廃寺遺跡W地点出土遺物実測图 (2) 1/4	37
第38图	芦屋廃寺遺跡W地点出土遺物実測图・拓影 (3) 1/4	38
第39图	調査風景	40
第40图	調査区配置图 1/250	41
第41图	土層断面実測图・柱状图 1/40	42
第42图	芦屋廃寺遺跡第29地点出土遺物実測图 1/4	43
第43图	調査風景	43
第44图	調査区配置图 1/400	44
第45图	土層断面実測图 1/40	45
第46图	芦屋廃寺遺跡第38地点出土遺物実測图 1/4	46

第47図	月若遺跡調査地点分布図 1/5000	47
第48図	調査風景	47
第49図	調査区配置図 1/400	48
第50図	土層断面実測図 1/40	49
第51図	月若遺跡第20地点出土遺物実測図 1/4	51
第52図	調査風景	52
第53図	調査区配置図 1/200	53
第54図	遺構配置図 1/100	54
第55図	土層断面実測図 1/40	55
第56図	A区竈遺構平面・断面実測図 1/20	57
第57図	S B 1 平面・断面実測図 1/20	59
第58図	S K 1 平面・断面実測図 1/10	60
第59図	S D 1 平面実測図 1/50	60
第60図	月若遺跡第25地点出土遺物実測図 (1) [確認調査分] 1/4	61
第61図	月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影 (2) 1/4	63
第62図	月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影 (3) 1/4	64
第63図	月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影 (4) 1/3・1/4	65
第64図	月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影 (5) 1/4	66
第65図	調査風景	68
第66図	調査区配置図 1/400	69
第67図	土層断面実測図・柱状図 1/40	70
第68図	月若遺跡第28地点出土遺物実測図 1/4	71
第69図	調査風景	72
第70図	トレンチ配置図 1/200	73
第71図	土層断面実測図 1/40	74
第72図	月若遺跡第30地点出土遺物実測図 1/4	75
第73図	調査風景	76
第74図	調査区配置図・遺構平面実測図 1/100	77
第75図	土層断面実測図 (1) 1/40	78
第76図	土層断面実測図 (2) 1/40	79
第77図	遺構平面・断面実測図 1/40	80
第78図	S B 1 平面実測図 1/20	80
第79図	月若遺跡第33地点出土遺物実測図 土器・土製品 1/4, 銭貨 1/3	81
第80図	打出岸造り遺跡調査地点分布図 1/5000	83
第81図	工事進行状況	84
第82図	調査区配置図 1/300	84
第83図	土層断面実測図 (1) 1/40	86
第84図	土層断面実測図 (2) 1/40	88
第85図	打出岸造り遺跡第1地点出土遺物実測図 1/4	90
第86図	打出小楯遺跡調査地点分布図 1/5000	92
第87図	調査風景	92
第88図	調査区配置図 1/200	93
第89図	東壁土層断面実測図 1/40	94
第90図	金津山古墳周辺調査地点分布図 1/5000	95
第91図	調査区配置図 1/1000	96
第92図	調査風景	96
第93図	土層断面実測図 1/40	97
第94図	遺構平面・断面実測図 1/50	99
第95図	埴輪出土状況 1/20	100
第96図	金津山古墳第9地点出土遺物実測図 1/4	101

第97図	第5層出土石包丁実測図 1/2	102
第98図	久保遺跡調査地点分布図 1/5000	103
第99図	調査風景	103
第100図	調査区配置図 1/400	104
第101図	土層断面実測図 1/40	105
第102図	久保遺跡第15地点出土遺物実測図 1/4	106
第103図	山芦屋遺跡調査地点分布図 1/5000	107
第104図	調査風景	108
第105図	調査区配置図 1/400	108
第106図	土層断面柱状略測図・出土遺物実測図 1/3	109
第107図	第4トレンチ北壁土層断面実測図 1/40	110
第108図	第3トレンチ壁穴住居跡平面実測図(上)・東壁土層断面実測図(下) 1/40	111
第109図	山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(1) 1/3	112
第110図	山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(2) 1/3	113
第111図	山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(3) 1/3	114
第112図	山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(4) 1/3	115
第113図	山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(5) 1/3	116
第114図	石版実測図 2/3	117

図 版 目 次

図版1 兵庫県南部地震直後のようす

阪神・淡路大震災による阪神高速道路倒壊状況(平成7年1月17日撮影・アジア航測株式会社提供)
 阪神・淡路大震災による阪神高速道路倒壊状況(平成7年1月17日撮影・アジア航測株式会社提供)

図版2 寺田遺跡(第40地点) 現地調査

調査地の現状(南地区)(北東から)

調査地の現状(北地区)(南東から)

図版3 寺田遺跡(第40地点) 現地調査

南地区第5トレンチ掘削状況

第5トレンチ西壁土層断面

第6トレンチ南壁SK-1・2確認状況

第6トレンチ南壁SK-1遺物出土状態

第6トレンチ南壁SK-2遺物出土状態

南地区第7トレンチ重複掘削状況(南東から)

第7トレンチ東壁土層断面(西から)

図版4 寺田遺跡(第41地点) 現地調査

調査地の現状(南東から)

Aトレンチ調査風景(東から)

Bトレンチ完掘状況(南から)

図版5 寺田遺跡(第47地点) 現地調査

調査地の現状(北から)

確認調査風景(北から)

第2トレンチ試掘作業風景(北東から)

第1トレンチ溝状遺構検出状態(北から)

第2トレンチ完掘状態(北から)

図版6 寺田遺跡(第47地点) 現地調査

調査地近景(北西から)

試掘調査T-2東壁土層断面(西から)

試掘調査T-2西壁土層断面(東から)

図版7 寺田遺跡(第47地点) 現地調査

本調査A区遺構確認状況(北西から)

本調査A区遺構検出状態(南から)

本調査B区3層上面遺構検出状態(南から)

本調査B区4層完掘状態(北から)

本調査A区発掘風景(北西から)

図版8 寺田遺跡(第47地点) 現地調査

	本調査A区溝SD-1完掘状態（西から） 試掘調査T-1 SD-1検出状態（西から） 本調査A区西壁セクション（東から）	本調査A区溝SD-1検出状態（西から） 本調査A区溝SD-1セクション（東から） 本調査B区東壁セクション（西から）
図版9	寺田遺跡（第52地点） 現地調査 調査地近景（南東から） 西壁土層断面（東から）	調査区完掘状態（南から） 西壁土層断面（東から） 調査風景（北西から）
図版10	寺田遺跡（第52地点） 現地調査 遺構検出状態（北から） 遺構完掘状態（東から） 掘立柱SK-2, SP-1・2完掘状態（東から）	遺構検出状態（南から） 遺構検出状態（北から） 掘立柱SK-1完掘状態（東から） 土坑SK-3完掘状態（南から）
図版11	寺田遺跡（第55地点） 現地調査 調査地近景（南西から）	調査地の現状（南から）
図版12	寺田遺跡（第55地点） 現地調査 第1トレンチ試掘状況（南東から）	第2トレンチ試掘状況（北西から）
図版13	寺田遺跡（第55地点） 現地調査 第3トレンチ試掘状況（南東から） 第1トレンチ調査風景（北西から） 第2トレンチ東壁土層断面（西から） 第3トレンチ北壁土層断面（南から）	第1～3トレンチ完掘状況（北から） 第1トレンチ第5層遺物出土状態（西から） 第3トレンチ分層発掘状況（南西から） 各トレンチ埋め戻し状況（北西から）
図版14	寺田遺跡（第57地点） 現地調査 調査地近景（南から）	調査地の現状（南から） 確認調査風景（南西から）
図版15	寺田遺跡（第57地点） 現地調査 重機掘削状況（北東から） 第4層上面検出遺構（南から） 遺構上面検出状況（東から） SD-1完掘状態（南東から）	発掘区西壁土層断面（東から） 第4層上面検出遺構（北から） SK-1・2, SD-1完掘状態 SK-2東西土層断面（南から）
図版16	戸屋庵寺遺跡（W地点） 現地調査 調査地近景（南西から）	調査地の現状（北東から）
図版17	戸屋庵寺遺跡（W地点） 現地調査 東区トレンチ掘削状況（北西から） 東区トレンチ須臾器平積出土状態（南から） 中央区トレンチ北壁土層断面（西側） 東区トレンチ巨石検出状態（西から）	東区トレンチ掘削状況（南西から） 同・平積出土状態近景（西から） 東区トレンチ西壁土層断面（東から） 西区トレンチ南壁土層断面（北から）
図版18	戸屋庵寺遺跡（第29地点） 現地調査 調査地近景（西側駐車場部分）（北西から）	調査地東側の現状（北西から）
図版19	戸屋庵寺遺跡（第29地点） 現地調査 第1トレンチ完掘状況（南東から） 第2トレンチ完掘状況（北東から）	第1トレンチ北壁土層断面（南から）
図版20	戸屋庵寺遺跡（第30地点） 現地調査 調査地近景 第1トレンチ掘削状況（南西から） 調査地近景 第2トレンチ掘削状況（南東から）	
図版21	戸屋庵寺遺跡（第38地点） 現地調査 第1トレンチ南壁土層断面（北から） 第1トレンチ第5層上面遺構（SK-1, SP-1・2）（東から） 第2トレンチ設定状況（北東から） 第2トレンチ東壁土層断面（西から）	第2トレンチ掘削状況（南東から）
図版22	月若遺跡（第20地点） 現地調査 調査地の現状（南から） 第1トレンチ調査風景（北東から） 第1トレンチ大溝内土器出土状態（南東から）	第1トレンチ掘削状況（南東から） 第1トレンチ北壁土層断面（南から）

図版23	月若道跡(第20地点)	現地調査		
	調査地および第2トレンチ掘削状況(南東から)		第2トレンチ分層発掘第5層上面検出状況	
	同・分層第7層上面検出状況(S P-1~3)(北から)			
	第2トレンチ第5層上面土器出土状態(北から)		第2トレンチ調査風景(北西から)	
図版24	月若道跡(第25地点)	現地調査		
	調査地近景(南西から)		調査地の現状(南東から)	
図版25	月若道跡(第25地点)	現地調査		
	トレンチ掘削状況(南西から)	調査風景(南西から)	試掘坑東壁土層断面(西から)	
図版26	月若道跡(第25地点)	現地調査		
	全面調査 A区遺構検出状況全景(北から)		全面調査 B区遺構検出状況(南から)	
図版27	月若道跡(第25地点)	現地調査		
	B区壁穴住居跡S B 1完掘状態全景(東から)		B区ビット群完掘状態, S B 1検出状態(北から)	
	B区ビット群完掘状態, S B 1検出状態(西から)		B区壁穴住居跡S B 1完掘状態全景(西から)	
	B区S B 1床面S P 21~25, S K 1検出状態(東から)			
図版28	月若道跡(第25地点)	現地調査		
	B区S B 1床面S K 1土器出土状態(南から)		B区流路内土器出土状態(南東から)	
	A区S P 31内古銭出土状態(西から)		B区流路完掘状態と土器出土状態(西から)	
	A区流路完掘状態(北から)		A区竈検出状況(南東から)	
	A区竈十字セクション設定状況(南東から)		A区竈完掘状態(手前作業室, 奥燃焼室)(南東から)	
図版29	月若道跡(第28地点)	現地調査		
	調査地近景(南東から)		調査地近景(南西から)	
図版30	月若道跡(第28地点)	現地調査		
	第2トレンチ掘削状況(南西から)		第1トレンチ掘削状況(南から)	
	第1トレンチ北壁土層断面(南から)			
図版31	月若道跡(第30地点)	現地調査		
	調査区設定状況(南西から)	調査地全景(南から)	調査地発掘完了状況(南から)	
	大溝S D-1断面検出状況(東から)		調査風景(南西から)	
図版32	月若道跡(第30地点)	現地調査		
	大溝S D-1掘削過程(北から)		S D-1南端上面検出状況(西から)	
	S D-1土器出土状態(北から)		調査区西壁2層中須臾器出土状態(東から)	
	建物基礎検出状況(北から)			
図版33	月若道跡(第33地点)	現地調査		
	調査地近景(北西から)	調査地近景(西から)	調査地の現状(南東から)	
	試掘坑掘削状況(北から)		試掘坑完掘状態(南から)	
	第10層上面遺構検出状況[S B 1, S P 1](東から)		調査風景(南から)	
図版34	月若道跡(第33地点)	現地調査		
	全面調査第5層 上面遺構検出状況(北から)		全面調査第5層 遺構S P・S K完掘状況(南から)	
図版35	月若道跡(第33地点)	現地調査		
	第5層上面(北半)遺構検出状況(南から)		同・壁穴住居跡S B-2・3検出状況(東から)	
	第5層上面(北半)遺構検出状況(西から)		同・壁穴住居跡S B 2, S X 1検出状況(西から)	
	西壁南端部土層断面(東から)		S P 5内近世染付磁器出土状態(西から)	
	調査風景(北から)		調査風景(北西から)	
図版36	打出岸造り道跡(第1地点)	現地調査		
	調査地近景(南東から)	調査地近景(南西から)	調査風景(南から)	
図版37	打出岸造り道跡(第1地点)	現地調査		
	調査区I設定・発掘状況(西から)	調査区I断面精査状況(南東から)	調査区I北壁土層断面(南から)	
	調査区I西壁土層断面(東から)		調査区I西壁土器出土状態(第5層)	
図版38	打出岸造り道跡(第1地点)	現地調査		
	調査区II流路N R-2土層断面(北東から)		調査区II流路N R-2土層断面(細部拡大)	
図版39	打出小径道跡(第17地点)	現地調査		

- 調査地近景（北西から） 試掘坑土層断面 調査風景（南から）
第2-3トレンチ間第4層上面足跡検出状態（西から）
同・ヒトの足跡（拡大）（西から）
- 図版40 金津山古墳（第9地点） 現地調査
調査地近景（北から） 調査地の現状（北東から） トレンチ設定・掘削状況
- 図版41 金津山古墳（第9地点） 現地調査
トレンチ西壁土層断面・周壕上面検出状態（北東から）
トレンチ西壁土層断面・周壕掘削状況（北東から）
- 図版42 金津山古墳（第9地点） 現地調査
周壕内埴輪片・葺石出土状態（東から） トレンチ西壁土層断面（南東から）
S K 1 掘削状況（東から） 周壕堆積土内石包丁出土状態（南東から）
- 図版43 金津山古墳（第9地点） 現地調査
周壕内埴輪片出土状態（西から） 周壕内埴輪片出土状態（西から）
- 図版44 久保遺跡（第15地点） 現地調査
調査地の現状（東から） 第1トレンチ掘削状況（南東から）
- 図版45 久保遺跡（第15地点） 現地調査
第1トレンチ（ア・イ層）完掘状況 第1トレンチ北壁土層断面（南から）
第2トレンチ北壁土層断面（南から） 第2トレンチ第3層上面遺構検出状態（東上方向から）
- 図版46 山戸屋遺跡（S 6 地点） 現地調査
調査地近景（南から） 調査地近景（北から）
- 図版47 山戸屋遺跡（S 8 地点） 現地調査
第3トレンチ内竪穴住居跡調査風景（北西から） 調査風景（北から）
第4トレンチ竪穴掘削状況（北西から） 第3トレンチ掘削状況（北から）
第3トレンチ竪穴住居跡 上面・断面検出状態（西から）
- 図版48 山戸屋遺跡（S 8 地点） 現地調査
第3トレンチ竪穴住居跡覆土土層断面（南半部分）（西から）
第3トレンチ竪穴住居跡覆土土層断面（北半部分）（西から）
第3トレンチ竪穴住居跡床面ピットなど完掘状態（西から）
- 図版49 山戸屋遺跡（S 8 地点） 現地調査
第3トレンチ竪穴住居跡覆土C層中の縄文土器出土状態
竪穴住居跡床面ピット群 S P 2 ~ 4 検出状態 第3トレンチ S K - 2 完掘状況（南から）
第3トレンチ S K - 1 完掘状況（南西から） D層縄文土器出土状態
D層中 石蔵出土状態
- 図版50 寺田遺跡（第40地点） 寺田遺跡（第41地点） 遺物
弥生土器（長頸壺） 弥生土器（甕）
弥生土器（2 ~ 12, 壺・甕・鉢・高杯）須恵器（13 ~ 15, 杯身・高杯・甕）
須恵器（高杯）
- 図版51 寺田遺跡（第47地点） [上段]・寺田遺跡（第52地点） [下段] 遺物
弥生土器（1・3 ~ 5, 壺・甕・鉢）須恵器（6 ~ 16, 杯蓋・杯身・壺・高杯・平皿）土師器（17・18・21・22, 埴・皿）瓦器（19・20, 埴）染付磁器（23, 埴）瓦（24, 平瓦・25, 丸瓦）
弥生土器（1・2）土師器（3）須恵器（5 ~ 14）土師器（4・15 ~ 17）瓦器（18）
- 図版52 寺田遺跡（第55地点） [1] 遺物
弥生土器・土師器（1・4・5・9・10）須恵器（2・3・6 ~ 8・11・12・15）緑釉陶器（16）土師器小皿・
瓦器・土埴・羽釜・東播磨系こね鉢（13 ~ 15・17 ~ 28）
瓦器（31, 埴）瓦質土器（29・30・32・33・35・36・38・39 ~ 41, 羽釜）須恵質土器（37, こね鉢）平瓦（34）
- 図版53 寺田遺跡（第55地点） [2] [上三段]・寺田遺跡（第57地点） [下二段] 遺物
土師器（皿） 土師器（皿） 土師質土器（土埴）
須恵質土器（こね鉢） 土師質土器（土埴） 瓦質土器（土埴）
弥生土器（甕） 弥生土器（壺） 須恵器（壺）
弥生土器（1, 甕）須恵器（4 ~ 9, 杯・皿）染付磁器（11）棒状有孔土器（12）鉄釘（13）

- 図版54 芦屋庵寺遺跡 (W地点) [1] 遺物
弥生土器 (1・2, 煮飯部) 須恵器 (3~26, 杯・高杯)
須恵器 (28~34, 壺・甕・甗・厨台部)
須恵器 (平瓶) 須恵器 (高杯)
- 図版55 芦屋庵寺遺跡 (W地点) [2] [上段]・芦屋庵寺遺跡 (第29地点) [中段]・芦屋庵寺遺跡 (第38地点) [1] [下段] 遺物
土師器 (41・42) 黒色土器 (36・38~40) 瀬戸天目茶碗 (43) 瓦 (44~46) 石器 (47) [以上, W地点]
土師器 (1, 甕) 須恵器 (2~4, 杯・高杯) 瓦器 (5, 碗) 須恵質土器 (6) 磁器 (7・8, 碗) [以上, 第29地点]
土師器 (1) 須恵器 (2・3・6, 杯・台付壺・碗) 土師器 (7, 杯) 陶磁器 (11・12)
土師器 (小皿) 土師器 (杯) [以上, 第38地点]
- 図版56 芦屋庵寺遺跡 (第38地点) [2] [上段]・月若遺跡 (第20地点) [中段]・月若遺跡 (第25地点) [1] [下段] 遺物
瓦質羽釜 (8) 丸瓦 (9・10) [以上, 第38地点]
弥生土器 (甕) 弥生土器 (1~4) 須恵器 (5) 肥前磁器 (8) 土師器 (9)
唐津 (平碗) 肥前磁器 (染付碗)
弥生土器・土師器 (1~7) 須恵器 (8~16) 土師器 (17) 丹波焼 (18) 瀬津焼 (19)
- 図版57 月若遺跡 (第25地点) [2] 遺物
弥生土器・土師器 (20~24, 壺・甕) 須恵器 (25~42, 杯・高杯)
須恵器 (43~62, 杯・高杯・壺・甕)
- 図版58 月若遺跡 (第25地点) [3] 遺物
弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢) 土師器 (杯・肥手) 須恵器 (杯・甕) 陶器 (振鉢) 磁器
弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢・高杯) 須恵器 (杯・甕) 灰釉陶器 (唐津)
- 図版59 月若遺跡 (第25地点) [4] 遺物
弥生土器 (甕) 弥生土器 (鉢) 硝子彩土器 須恵器 (杯身) 須恵器 (杯身)
古式土師器 (直口壺) 須恵器 (甕体部片) 寛永通宝銭 (表面) 寛永通宝銭 (裏面)
須恵器 (甕体部片)
- 図版60 月若遺跡 (第28地点) [上段]・月若遺跡 (第30地点) [中・下段] 遺物
須恵器 (1~5, 杯・短頸壺) 平瓦 (6・7) 土師器 (8~10, 碗・小皿・中皿) 青磁碗 (11)
弥生土器・古式土師器 (1~14) 須恵器 (15~24) 磁器 (25・26) 染付磁器碗 (27)
須恵器 (杯蓋) 須恵器 (杯身)
- 図版61 月若遺跡 (第33地点) 遺物
弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢・製塩土器)
須恵器 (杯・平瓶・高杯) 土師器 (肥手) 瓦器 (小皿) 棒状有孔土器
染付磁器碗 北宋銭「治平元寶」
- 図版62 打出岸遺跡 (第1地点) 遺物
弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢・高杯)
壺ないし鉢 甕 壺 鉢 甕
- 図版63 金津山古墳 (第9地点)・久保遺跡 (第15地点) 遺物
朝鮮形円筒埴輪 (口縁部・頸部) 同 (体部)
円筒埴輪 (口縁部) 円筒埴輪 (体部) 円筒埴輪 (体部)
形象埴輪 (基底部) 石包丁 (A面) 石包丁 (B面)
中世土器・陶磁器類 (青磁碗・土師器皿・瓦質羽釜) 久保遺跡 (第15地点)
- 図版64 山戸塚遺跡 (S8地点) 遺物
縄文土器 (1) 縄文土器 (2)
- 図版65 山戸塚遺跡 (S8地点) 遺物
縄文土器 (3) 縄文土器 (4)
- 図版66 山戸塚遺跡 (S8地点) 遺物
打製石鏃 (A面) [サヌカイト製] 打製石鏃 (B面) [サヌカイト製]

表 目 次

第1表	周知遺跡の面積と被災面積・被災率.....	2
第2表	各層位における出土遺物の遺存状況(年代別)	18



I. 平成7年度埋蔵文化財発掘調査の経過

1. 阪神・淡路大震災と本年度発掘調査の概況

平成7年1月17日に発生した淡路島北部を震源域とするマグニチュード7.2の規模の兵庫県南部地震は、本市域にも壊滅的な被害をもたらした。気象庁地域機動観測班の現地調査によると、三条町・山手町の一部、国道2号線付近、JR芦屋駅周辺では、震度7が測定された。

芦屋市内での地震による死亡者は429人を数え、被災建物は全壊4,722棟、半壊4,060棟にのぼり、実に56.9%の建築物が著しい被害を受けるところとなった。全壊率が70%を超えた地域は、清水町・前田町・津知町・大樹町が該当し、全半壊率70%を加えると、栗平町・川西町・茶屋之町・宮塚町・平田北町・精道町・竹園町・若宮町・打出町・潮見町など、市街地中央から西部地域を中心に多数の建物が損壊の憂き目に会った。自宅を奪われた避難者の数は、ピーク時20,960人に達し、最高53か所の避難所が開設され、同年6月18日にそのすべてが閉鎖されるまで、数多くの市民が不自由かつ多難な日常生活を強いられることになった。被災直後からライフラインの復旧工事が進められたが、地震直後は市内全域で断水、ガスの供給停止、停電、電話回線の不通・混乱の事態が生じて、完全復旧は水道の給水が3月31日、ガスの供給が4月10日といった悲惨な経過をたどった。

こうした非常事態の最中、埋蔵文化財の保護、取扱いについても、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の指導・助言の下、当面は被害状況の掌握と対策に追われることになったが、平成7年2月6日には文化庁文化財保護部記念物課の調査官・企画官が神戸市・芦屋市など被災の顕著な地区を現地視察され、県・市町と災害下の保護行政の今後の進め方について真剣に協議した。市教育委員会が2月末までにまとめた周知の埋蔵文化財包蔵地における被災状況は第1表のとおりであり、被災面積は実に11ヘクタールを超えることが判明した。その大きさは近畿地方の弥生時代の巨大な環濠集落一つ分を全面発掘することに相当する莫大な広さをもつことが試算され、本市文化財課の専門職員1名(係長)、嘱託1名の貧困な調査体制では、如何ともなし難いものであった。

文化庁は震災下にある地元の現状と推移に鑑み、同年2月23日の庁保記第144号による文化庁次長通知「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて」により、方向性を出し、文化財保護法(昭和25年法律第214号)第57条の2、第57条の3、第57条の5及び第57条の6の規定による届出及び通知について、平成7年5月末までに着工する震災復旧工事を広範囲にわたって不要とする取扱いを定めた。ここに言う復旧工事の具体的な内容は、「①電気、ガス、上下水道、電話、道路、河川、橋梁、鉄道等の復旧。②仮設住宅の建設。③損壊又は焼失した建物その他の工作物の撤去又は整地。④その他緊急を要する復旧工事。」であり、取扱いの期限延長についても配慮されている。

その後、平成7年3月29日、滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県の教育委員会教

第1表 周知遺跡の面積と被災面積・被災率

都市基本図 区分	遺 跡 名	占有面積 (㎡)	被災面積 (㎡)	被災率 (%)
六蔵荘地区	八十塚古墳群	455,788	11,238	2%
	岩園天神社西遺跡	9,100	0	0%
	岩園天神社東遺跡	2,875	0	0%
	芦屋病院西遺跡	5,510	0	0%
	朝日ヶ丘北遺跡	6,675	425	6%
	朝日ヶ丘遺跡	16,495	1,220	7%
	城山・三条古墳群	224,775	6,590	3%
	山芦屋遺跡	25,395	1,710	7%
	山手中学校グラウンド遺跡	4,995	0	0%
	会下山遺跡	17,800	0	0%
芦屋駅地区	藤ヶ谷遺跡	28,375	3,813	13%
	三条町50番地遺跡	8,150	0	0%
	冠遺跡	11,075	3,638	33%
	三条岡山遺跡	31,025	0	0%
	三条九ノ坪遺跡	21,465	1,555	7%
	芦屋庵寺遺跡	55,265	6,088	11%
	月若遺跡	58,120	4,455	8%
	寺田遺跡	62,240	19,758	32%
	西山町遺跡	5,225	900	17%
	六条遺跡	7,313	2,508	34%
	船戸遺跡	12,325	838	7%
	兼平遺跡	40,615	8,945	22%
	茶屋之町遺跡	7,975	3,228	40%
	大原遺跡	55,175	9,750	18%
	山口遺跡	15,258	2,263	15%
	打出岸造り遺跡	30,800	7,160	23%
香炉園地区	打出地造り遺跡	8,470	0	0%
	久保遺跡	22,008	7,673	35%
	金華山古墳	5,625	300	5%
	阿保親王塚古墳	17,650	2,813	16%
芦屋浜地区	打出小松遺跡	35,638	5,270	15%
	小松原遺跡	4,880	1,515	31%
	津知遺跡	9,500	3,675	39%
	呉川遺跡	13,325	0	0%
市 域 全 区	周知遺跡内全体推計	1,294,540	115,618	9%

育長宛に「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」と題する文化庁次長通知が出され、同年6月1日以降における保護に関する基本原則が定められるに至った。その要点は、被災地の早急な復興が急務であるとの認識に立ち、関連事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護との整合性を図ることをねらいとし、具体的にはこの基本方針を基礎として、関係府県が市町村の実情を聴取して「適用要領」を定めて、取扱い上のことがらに遺漏ない措置が講じられることが謳われたもので、適用範囲・適用期間を前提として、(1) 確認調査・発掘調査などの取扱い・方法、

(2) 「適用要領」の策定及び運用に際しての留意事項、(3) 発掘調査等の体制などのアウトラインが記載されている。

この基本方針を受け、平成7年度に入ってから適用要領の策定に向けての意見交換会がもたれ(4月13日、4月21日)、平成7年4月28日付、教社文第191号により、兵庫県教育長から適用要領は関係自治体に通知された。それに基づくより具体的な取扱いに関しては、各地方公共団体間の不統一、不均衡が発生する可能性も考えられたため、県教育委員会は被災地の埋蔵文化財実務担当者を参集させ、調査方法の選択などの討議・調整を目的とした連絡会を密に開催し(5月10日・19日・24日)、真摯な議論を経て、取扱いマニュアルの作成へと向かった。このマニュアルは、とりあえず暫定版として、平成7年5月29日に該当各市町に送付され、以後窓口業務で必携の役割を果たしている。

以上の経緯により、本年度の審査・指導は、平成7年6月1日から一応平常に戻り、前述した基本

方針・適用要領・マニュアルに基づき、復興住宅などに対する軽減措置を配慮して弾力的に進められた。具体的な軽減方法としては、①事前審査期間の短縮②早期の確認調査③既存データの活用④発掘調査期間の短縮⑤発掘調査方法の省力化⑥発掘面積の縮小、などをあげることができるが、①②の努力を行いながら、③を駆使して確認調査を工事立会の扱いへ、さらに工事立会を慎重工事の扱いへとワンランク軽い措置に移行させた。本調査についても、専用住宅の再建にあたっては、④～⑥の軽減措置を極力適応させ、オーナーの早期再建意思を可能な限り尊重し、個人を中心とする零細な事業を少しでも救済すべくさまざまな手立てを講じた。

埋蔵文化財の審査・指導データについては、報告書の編集時期の関係から、今年度は平成8年3月10日までのデータを集計したが、市都市計画部開発指導課開発指導担当及び建築確認担当からの審査書類合議に基づき、総数158件の事前協議を受け、埋蔵文化財指導書を添付して行政指導を行った。その内訳は、芦屋市宅地開発等指導要綱第6条に基づく事前協議が68件、芦屋市住みよいまちづくりに関する指導要綱第11条の規定に基づく建築物建築（変更）届が190件を数える。

このうち本市埋蔵文化財包蔵地分布地図〔森岡ほか編1993〕に記載された周知遺跡の範囲・隣接地区に該当した物件について、試掘調査81件、立会調査87件、慎重工事13件、条件なし9件の種別で指導を行い、試掘調査した81件中19件について本調査が必要と判断された。本調査のうち、工事着工にやや余裕があり、開発面積が大きい共同住宅については、本市教育委員会が主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に支援を依頼し、国庫補助事業による震災復興調査として全面調査の計画を進めた。工事着手までに時間的ゆとりが全くない零細な個人住宅については、本市教育委員会が主体となり、森岡秀人・木南アツ子両名が発掘担当者となって通常分の国庫補助事業として確認調査



第1図 芦屋市内遺跡分布図 1/50,000

および本調査を行い、速やかに取扱いと調査の遂行を進めていった。

前者については、合計7か所の発掘調査現場に対し、全国から埋蔵文化財専門職員の支援を得ることができ、平成7年10月以降、A. 芦屋廃寺遺跡（第29地点）B. 打出岸造り遺跡（第9地点）C. 芦屋廃寺遺跡（W地点）D. 月若遺跡（第28地点）E. 久保遺跡（第15地点）F. 月若遺跡（第20地点）G. 寺田遺跡（第55地点第Ⅰ調査区）の調査を実施し、年度末に無事完了した。その成果に関しては、各担当者に執筆の手を煩わせ、平成8年度末に市文報第28集〔森岡・木南編1996〕として概要報告書を公刊の予定である。

本書で報告を行うのは、森岡・木南が発掘調査を担当した後者に係る8遺跡19地点分である（第1図）。

（森岡秀人）

2. 国庫補助事業発掘調査の計画と着手

平成7年度の国庫補助事業（通常分）は、総額570万円（市負担285万円）を計上、補助金交付の申請に係る事業及び補助事業に係る文化財の名称は、「市内遺跡発掘調査」で、今年度の対象遺跡・所在地・調査原因・開発面積・調査面積・発掘担当者・調査期間は、第二章並びに「報告書抄録」に調査地点ごとに記載したとおりである。確認調査の対象地の調査原因の圧倒的多数は個人住宅新築であり、一部共同住宅建設が加わる。いずれも阪神・淡路大震災による被災住宅の再建が急がれたものであり、結果として通常枠とはいえ、震災復旧に係わる補助事業となった。

事業実施期間は、平成7年4月1日～平成8年3月31日で、現地調査は平成8年2月末日まで実施した。出土資料の応急整理は、各調査の終了後、随時進めてきたが、10月以降、外業現場作業が過密化し、本書執筆の平成8年2月段階にあっても、なお洗浄・註記・復元・実測などの室内作業と発掘調査の進行が錯綜し、事業の縫れが慢性化するに至った。

以下に、本市の国庫補助事業の事業体制を記す。

（森岡）

調査主体 芦屋市教育委員会

教 育 長 三浦 清（調査責任者）

事業担当 芦屋市教育委員会社会教育部文化財課文化財係

社会教育部長 堀口 良平（事業総括）

文化財課長 山本 英明（事業統括）

文化財係長 森岡 秀人（発掘調査担当・調査主任・調査調整担当・調査事務担当・整理作業担当・報告書執筆編集担当）

庶 務 担 当 岡田きよみ（経理担当）

嘱 託 木南アツ子（発掘調査担当・調査員・整理作業担当・報告書執筆編集担当）

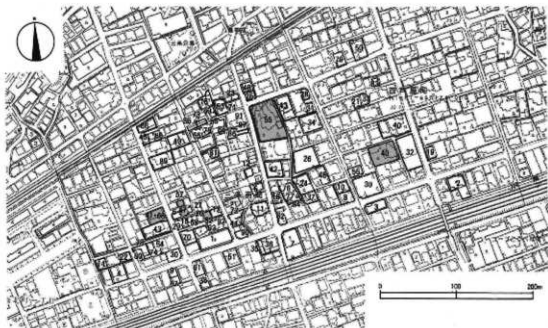
II. 発掘調査概要報告

1. 寺田遺跡

(1) 調査地の位置と環境

寺田遺跡は、芦屋川扇状地の西側に生成された東川扇状地上に立地する縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡である（第1図）。発見は昭和36年に遡るが、本格的な発掘調査は昭和59年度から実施されている。三条南町・西芦屋町を中心に東西350m、南北250m、総面積62,000㎡を測る規模を有し、南西部を中心に弥生前期の遺構・遺物が認められ（第1・16・20・27地点）、その南側、第1地点を中心に平安時代前期の掘立柱建物群が検出されている。また、遺跡の北部では中世以降の遺構が増加し、第15地点では庄内式〜布留式期併行の土器が大量に出土するなど、その態様は一様ではない。

今年度の確認調査実施地点は東端部の40地点、北西部の55地点を除けば、数地点が第1地点の北方至近地に偏った（第41・47・52・57地点）。このほか46・51地点についても個人住宅建設に伴い確認調査が実施されたが、工事範囲では遺構・遺物の出土をみていない（第2図）。なお、寺田遺跡における被災面積は約19,700㎡で、遺跡全体の32%を占めている。（森岡）



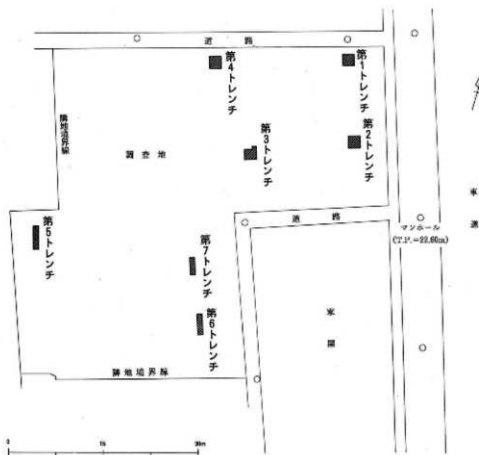
第2図 寺田遺跡調査地点分布図 1/5000

(2) 第40地点の調査

調査動機 市内西芦屋町28番地、48番地に所在する当該地（敷地面積2,229.76㎡）において、鉄筋コンクリート造共同住宅（地下1階、地上4階）の建築計画の届出があり、土地所有者中本チサヲ・中本繁子と協議して、平成6年11月8・9日、敷地の北側半分についてのみ確認調査を実施した（第3図）。4ヶ所を試掘した結果、現地表下200cmに至るまでに数枚の遺物包含層が確認され、西に近接する第34地点の様相がさらに東に広がることが確かめられた（第4図）。その後、開発計画はしばらく凍結状況にあったが、今般、地下1階、地上5階に計画変更された建築面積866.17㎡の共同住宅建設計画が再浮上し（地権者中本チサヲ・中本大三郎）、未調査となっていた敷地南部分を含めての取扱いを決定するため、平成8年1月24・25日に再び確認調査を実施した。この時点では、事業地の所在地番が西芦屋町28番地・



第3図 調査風景



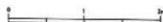
第4図 調査区配置図 1/600

第5トレンチ 西壁

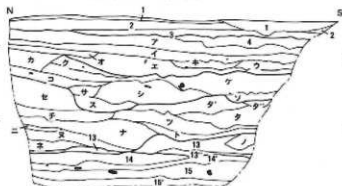


- A層 灰褐色粘性砂質土層
B層 淡茶灰色小礫混じり粘性砂質土層
C層 灰褐色粘性砂質土層
D層 灰白色粗砂層

- 第1層 暗茶褐色互層混じり粘性砂質土層
第2層 暗灰色粘性砂質土層
第3層 暗黄色粘性砂質土層
第4層 褐色小礫混じり粘性砂質土層
第5層 灰茶褐色礫混じり粘性砂質土層
第6層 淡茶褐色小礫混じり砂質土層
第7層 淡黄緑色砂質土層
第8層 淡黄緑色シルト質土層
第9層 暗灰色礫混じり粘性砂質土層
第10層 暗灰色粘性砂質土層
第11層 暗茶褐色礫混じり土層
第12層 暗茶褐色礫混じりシルト層
第13層 黄茶色シルト層
第14層 暗茶褐色砂質土層
第15層 黒褐色礫混じり粘質土層
第16層 暗黄灰色砂礫層



第6トレンチ 東壁



- 第2層 淡灰色粘性砂質土層
第13層 赤灰色シルト層
第14層 14層より黄色調強い土層
第15層 暗灰色小礫混じり粘性砂質土層
A層 灰褐色粘性砂質土層
イ層 灰褐色粘性砂質土層
ウ層 灰褐色礫混じり粘性砂質土層
エ層 暗灰色小礫混じり粘性砂質土層
オ層 褐色粘性砂質土層
カ層 灰褐色礫混じり粗砂層

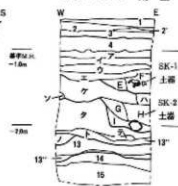
- キ層 褐色礫混じりシルト層
ク層 淡灰色粘性砂質土層
ケ層 灰褐色小礫混じり粘性砂質土層
コ層 茶褐色粗砂層
サ層 灰褐色粘性砂質土層
シ層 灰白色砂礫層
ス層 茶褐色粘性砂質土層
セ層 淡茶褐色粘性砂質土層
ソ層 黒灰色砂礫層

- タ層 淡黄褐色粘性砂質土層
チ層 灰褐色粘性砂質土層
ツ層 暗茶褐色礫混じり粗砂層
テ層 暗茶褐色礫混じり砂層
ト層 灰白色粗砂層
ナ層 灰褐色粘性砂質土層
ニ層 白褐色小礫混じり粗砂層
白色砂層

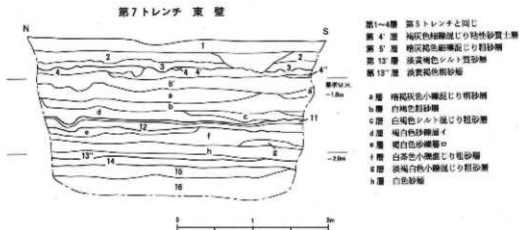
- ヌ層 灰白色砂層
ネ層 赤灰色砂層
ノ層 淡茶褐色礫混じり粘性砂質土層
ハ層 灰白色粗砂層
ヘ層 淡灰色粘性砂質土層 (SK-1)
F層 暗茶褐色粘性砂質土層 (SK-1)
G層 黄茶褐色粘性砂質土層 (SK-2)
H層 暗灰色粘性砂質土層 (SK-2)
I層 暗茶褐色粘性砂質土層 (SK-2)



第6トレンチ 南壁



第5図 土層断面実測図(1) 1/50



第6図 土層断面実測図(2) 1/50

28番地4・48番地(敷地面積2215.85㎡)と変更のみられる発掘層が再度提出された(図版2)。基礎掘削の平均深度が、現地表下500cmになることも明らかとなった。(森岡・木南)

調査の方法と経過 前回の確認調査の結果を踏まえ、南側敷地にトレンチ3ヶ所を設定して行った。トレンチ番号は前回の確認調査既掘分4ヶ所を踏襲し、敷地北西隅の試掘坑を第5トレンチ、東側2ヶ所の試掘坑を南からそれぞれ第6・7トレンチと呼称する(第4図、図版2)。測量基準点はT.P. 22.60mを計測する。土層断面図では、それをM.H.と表わしている。(木南)

基本土層 第5トレンチ(幅1.2m、長さ3.8m)は現地表下2.1mまで掘削し、暗黄灰色の砂礫層に達した。その上に黒褐色の粘質土が35cm前後堆積し、さらにその上をシルト系の流土(約30cm)、混雑の流土(平均20cm)が厚く覆う。この上に堆積する第7・8層は遺物包含層になる公算が高く、6層は遺構内の埋土のようである。宅地になるまでに供されていた近代水田は、現地表下20～45cmの所に遺存している。基本となる層位の堆積はほぼ水平である(第5図上、図版3の1段目)。

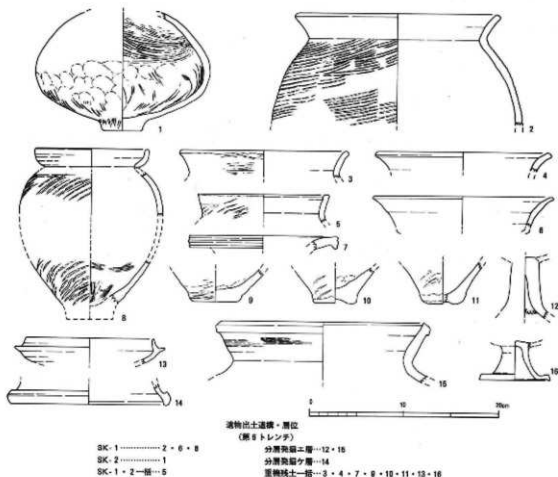
第6トレンチ(幅1.3m、長さ4.35m)は現地表下2.3mまで試掘した。黒色系の粘質土は1.8mの所に水平に遺存する。1.05m以下は砂と礫を主成とする洪水性の流下堆積物がこれを覆う。近代水田耕作土は表土直下に存在する(第5図下、図版3の2・3段目)。

第7トレンチ(幅1.6m、長さ3.95m)は、現地表下2.05mまで試掘した。第1～4層までは第5トレンチとほぼ同様である。現地表下0.5mから1.6mまでは厚い流下堆積物によって水平に覆われ、粗砂・砂礫で構成され、ラミナの発達をみる。ほぼ中間に位置する現地表下1.1mの位置には、第5トレンチでも認められた暗灰紫色シルト質粘性砂質土層(11層)と淡黄褐色細礫混じりシルト層(12層)とが対になってみられ、鍵層の役割を果たすとともに、一時期水流が弱まって安定する時期があったことを教えている。第13～15層も第5トレンチとほぼ同じ土質のベースとしてとらえられる(第6図、図版3の4段目)。(森岡・木南)

遺構 第5トレンチにおいては、顕著な遺物の出土がなかったが、少なくとも2面の遺構面が認識

された。現地表下50~70cmにある鉄分やマンガンの含浸をみる第4・5層掘削時の精査が必要となろう。第6トレンチでは、時期の判明した明確な遺構面2枚が現地表下0.8m以下の深さにある。いずれも土坑状の落ち込みと完形に近い土器を伴い、下側の遺構は竪穴住居跡になる要素も持っている。遺構面に至る深度は、上が0.8m、下が1.05mを計測する。断面観察になるが、遺構自体の残存長・深さは、上の土坑が68cmと25cm、下の土坑が68cmと35cmを測る。それぞれSK-1・2と呼ぶ。SK-1からは第V様式系の甕形土器2個体分以上(第7図2・8)と甕形土器の体部破片が、SK-2下層(1層)からは弥生後期終末の長頸壺の体部が1個体分出土した(第7図1)。SK-1の埋土及びベース(ケ層)から須恵器片が検出されている点に疑問もあるが、土器からみて、SK-2→SK-1の推移は承認できる(第5図、図版3の2・3段目)。(森岡・木南)

遺物 1は口頸部を欠くが、長頸壺の体部で、やや下ぶくれ状の重心位置を示す。淡黄灰色を呈し、黒斑をみる。突出する小さな平底を有し、体部下半はタテヘラミガキを施す。2は復元口径21.1cmを測る大型の甕で、外面のタタキメは細かい。口唇部は端面をなす。色調は明黄褐色。3~5・8~11



第7図 寺田遺跡第40地点出土遺物実測図 1/4

も壺の口縁部や底部で、5など口縁叩き出し手法によって粗製に作られる。内湾する口縁部をもつ壺8は、復元口径11.8cm、復元器高17.8cmを計測する。黄灰色を呈し、胎土は精良。10・11はいずれもドーナツ状の上げ底である。6・12は高杯。杯部6は庄内式期に入るので、外反度が著しい。7は壺の口縁部で、端面に凹線文2条が施される。器台になる可能性も高く、凹線文も退化していることから、第V様式の範疇でとらえたい。

13～16は須恵器片。杯身13、高杯脚台部14・16、壺口縁部15などがみられる。14は大型の有蓋高杯で5世紀代、器内部分は暗いセピア色。16は低脚の無蓋高杯で、淡い灰色を呈する。7世紀に下る資料である。15も部分的にカキメによる調整がなされる。色調は淡灰白色（第7図）。（森岡）

まとめ 本地点の基本土層は、より西方の寺田遺跡中心部とやや異なり、扇状地の影響度の高い厚い砂礫堆積物によって覆われている。今年度の調査地では、隔たっている第56地点と近似したあり方を示しており、ここでは扇状地縁部という共通の立地条件に基づくものと理解しておきたい。濃淡はあれ、設定した第5・6・7の3トレンチには包含層や遺構が密度高く遺存しており、事業地全体の事前調査が必要と判断した。とくに弥生後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡が周辺一帯に広がっていることが確かめられた。（森岡）

（3）第41地点の調査

調査動機 本地点は、市内三条南町78番地に所在する。震災による住宅の半壊のため、地権者（向井正夫）が当該地（敷地面積363.3㎡）に軽鉄骨2階建個人住宅の再建計画を提出され、寺田遺跡の範囲に入る関係から、確認調査を実施した。（森岡・木南）

調査の方法と経過 家屋の解体がまだ行われていなかったため、庭地に試掘坑2ヶ所を設定し、家屋南側の調査区をAトレンチ、東側の調査区をBトレンチと呼ぶことにした（第1・2・8・9図）。規模はいず

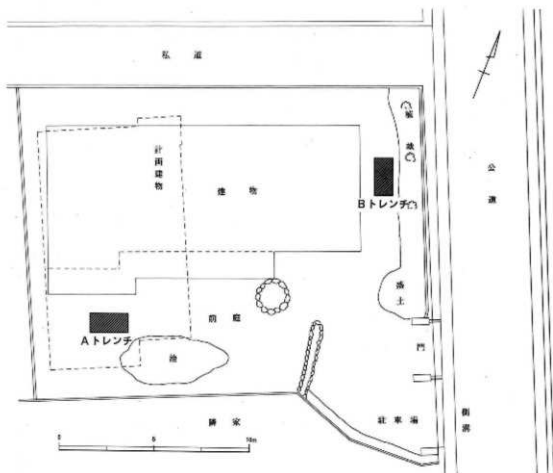
れも幅1m、長さ2mを測る。基礎掘削の底深度が37.5cmと浅いため、調査は建築部分を避けたトレンチ発掘による確認にとどめた。確認調査は、平成7年4月11・12・13日の3日間行った。（木南）

基本土層 Aトレンチは現地表面下145cmまで掘り下げた。7層まで確認したが、地山には至らなかった。Bトレンチは北半約3分の2にコンクリート排水管の残存が確認され、南半分は管除去時の攪乱坑が見い出された。この部分は過去に道路面になった時期があったものと思われる。プライマリーな層序は北壁西側で観察され、現地表面下160cmまで掘り下げた結果、第11層目で黒褐色シルト質粘性砂土の地山に到達した。この層は、寺田遺跡通有のものより白色礫の混じりが少ない。第7層は水田耕作土で、これ以下の層位は南方へ低く傾斜堆積している（第10図、図版4）。（森岡・木南）

遺構 Aトレンチでは第3層の落ち込みを検出したにすぎず、第4・5層から土師器・須恵器の細片が出土した。これらの層は、調査地周辺の水田土壌を埋土として利用したものであり、出土遺物も



第8図 調査地風景



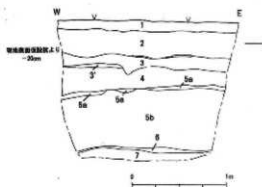
第9図 調査区配置図 1/200

混入してきたものと思われる。Bトレンチにおいても、明瞭な遺構の出土はなかった。（森岡）

遺物 細片が多く、3点のみ図化し得た（第11図）。Aトレンチ5b層より出土した1は土師器の碗で、奈良時代後期から平安時代初期に比定できる。高台の復元径は11.7cmを計測する。Bトレンチ盛土層より出土した2は、有溝土埴。両側面に溝を有するタイプで、溝幅は5mm前後を計測する。奈良時代から平安時代に遡るものであろう。一部欠損しているが、完形であったとしても軽量である。Bトレンチ第9層から出土した3は、堺・明石系摺鉢で、白神典之編年のI型式に属し、18世紀中頃ぐらいの年代のものとみられる。（森岡・木南）

まとめ 今回の調査地点では、明確な遺構や濃厚な遺物包含層は確認されなかった。しかし、何分攪乱や盛土が著しかったため、それらの可能性は皆無とは言えない。2ヶ所のトレンチの層位並びに層相には、かなりの格差がみられるが、寺田遺跡の遺物包含層のオーソドックスな特徴も二、三抽出でき、本遺跡の中心時期である奈良時代後期～平安時代前期を裏づける遺物の断片も検出し得た。また、古墳時代後期の遺物も散見された。

Aトレンチ 北壁



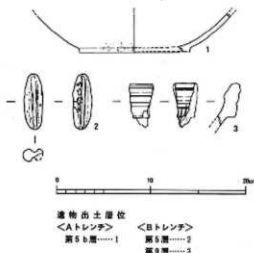
- 第1層 黒褐色腐食土層（表土）
- 第2層 暗黄色砂層
- 第3層 黒褐色腐食土層（旧地表）
- 第4層 黒褐色粘質土層
- 第5層 暗黄褐色粘土ブロック混じり粘質土層
- 第5a層 黄褐色粘質土層
- 第5b層 灰褐色粘質土層
- 第6層 暗黄褐色粘質土層
- 第7層 灰褐色細砂混じり粘性シルト層

Bトレンチ 柱状図



- 第1層 黒褐色腐食土層（表土）
- 第2層 暗黄褐色砂質土層
- 第3層 黒褐色シルト質粘砂質土層
- 第4層 黄灰色粘質土層
- 第5層 灰褐色粘性砂質土層
- 第6層 暗黄褐色粘性砂質土層
- 第7層 暗灰色粘質土層（粘土）
- 第8層 暗黄褐色粘質土層
- 第9層 暗灰褐色粘質土層
- 第10層 灰褐色粘質土層
- 第11層 黒褐色シルト質粘性砂質土層（地山）

第10図 土層断面実測図・柱状図 1/40



第11図 寺田遺跡第41地点出土遺物実測図 1/4

しかし、今回の建築計画は、包含層の損傷が軽微との判断に立ち、ここまでの確認にとどめることにした。（森岡）

（4）第47地点の調査

調査動機 本地点は三条南町63番地に所在する。当該地（82.55㎡）では、震災により家屋が倒壊したため、住宅の再建が急がれ、地権者（石井紀子）により鉄骨造3階建個人住宅の新築計画が届けられた。本地点は寺田遺跡の中心部に位置し、東・西・南隣接地（それぞれ、第27・6・16地点）では表土直下から複数の遺物包含層の遺存を確認している（第2図）。今回

の新築事業では、基礎掘削深度がG.L.-85cmと深く、地盤改良が加わる。したがって、遺構の損傷があり得ると判断し、確認調査により取扱いを定めることとした（図版5）。（森岡・木南）

調査の方法と経過 確認調査は、平成7年8月7日に実施した。包含層深度が浅いため、第2層上部まで機械掘削を行い、第2トレンチ南端部のみ継続して現地地表下140cmまで深掘した。第1トレンチは敷地南東部に設定し、東西2.3m、南北1mの規模を測る。掘削約35cmで幅40cm未満の東西にのびる溝を検出した。第2トレンチは敷地南西隅より北へ4m、東へ1mの地点を南西隅とし、東西0.6m、南北3.5mの範囲を試掘した。地山まで重機掘削したトレンチ南半部西壁において土層図を作成した(第12・13図、図版5・6)。



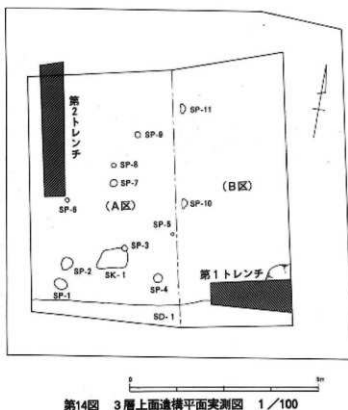
第12図 調査風景

確認調査の結果、遺構・包含層の損傷が上半分において起こると判断されたため、平成7年9月27日～10月5日の6日間にわたって、全面調査を実施した。調査は排土場所を確保するため、東西2地区に分割して行い、西半24.7㎡を先に掘り(A区)、続いて東半21.0㎡(B区)を対象とした(第14図)。発掘面積は合計45.7㎡である。掘削は第3層上面までを重機により行い、建築物の基礎底に見合う現地地表下60cmまで完掘した。以下の包含層掘削については、震災調査の適用基準にしたがい、全面的に割愛した。測量に用いた基準高は、T.P.18.70mである。

9月27日、晴れ。施工業者立会の下、A区を設定・掘削。第3層上面を精査して、杭痕群や溝SD-



第13図 調査区配置図 1/200



基本土層 第8層の黒褐色礫混じり粘性砂質土層が本遺跡の基本ベースで、これ以下は無遺物層である。第2～4層は近世・近代水田関連の土層、第5～7層が濃密な包含層で、層位ごとの時期的推移を調べる目的で遺物の取り上げを行った。第7層には径10cm以下の円礫を含む。(木南)

遺構 確認調査で開いた第1トレンチでは、南端において3層上面で配石溝(SD-1)を検出した。東西方向に走る北肩を確認したが、南肩は調査区外になる。幅は60cm以上になるであろう。上層12cmは小礫混じりの粘砂、下層は径15cm以上の大きな石を頭肩に充填させている。深さは36cmまで確認できた。第2トレンチでは土層断面で遺構を確認したにとどまる(図版6・7・8)。

全面調査で検出された遺構は、次のとおりである(第14・15図)。(森岡・木南)

SD-1 調査区A・B南側において検出。確認調査で確認された暗渠の連続部分で、検出長約6.9m、確認幅15～40cmを測る配石溝である。埋土下層(12層)には5～25cmの花崗岩片が充填されており、上層(11層)は4層近似の土質である。東西方向に走行しており、支線的な排水路ないし導水路とみられる(図版8上段・中段)。(森岡・木南)

SP-1～9 A区で検出された柱痕群。径6～31cm、深さ2～12cmを測る。陥入する土は、2層の耕作土に近いもので、近代水田に伴うものであろう(第14図)。(木南)

遺物 確認調査では、コンテナ1箱分程の遺物が出土した(第16図)。弥生前期から近世までの時期幅をもつ。1は畿内第1様式(新)段階の甕の口縁部で、縁外端に粘土紐を貼り付け、断面逆「L」

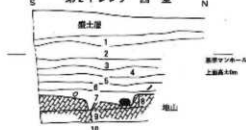
1を検出。平板測量を行った。9月28日、晴れ。杭痕群の観察表及びSD-1のプラン図・セクション図を作成する。また、西壁と南壁の土層断面図を作成。県教育委員会の水口圭主査来臨。10月2日には、第3層を人力によって除去。第4層上面では遺構が全く認められず、A区の調査を完了する。10月3日、B区設定後、機械掘削開始。施工者と協議の上、排土は施工業者と協議の上、場外処分。第3層上面の精査結果は、ビット2基とSD-1の東への連続を確認。平板図作成の後、遺構掘削・実測。10月4・5日は第3層の除去作業を行い、東壁・南壁の土層図を作り、調査の終了を迎える。天候は曇り時々雨であった。(木南)

第1トレンチ 東壁



(試掘)

第2トレンチ 西壁



(全面調査区)

南壁



南壁



- 第1層 灰土層
- 第2層 灰土層
- 第3層 灰土層
- 第4層 灰土層
- 第5層 灰土層
- 第6層 灰土層
- 第7層 灰土層
- 第8層 灰土層
- 第9層 灰土層
- 第10層 灰土層
- 第11層 灰土層
- 第12層 灰土層
- 第13層 灰土層

西壁



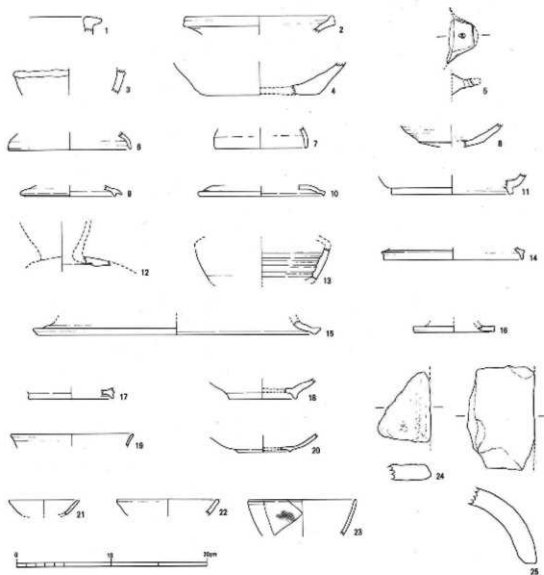
西壁



- 第6層 灰土層
- 第7層 灰土層
- 第8層 灰土層
- 第9層 灰土層
- 第10層 灰土層
- 第11層 灰土層
- 第12層 灰土層
- 第13層 灰土層

第15図 土層断面実測図 1/40

字状を呈する。口径は不詳。胎土には石粒を多く含む。3も第I様式に比定される小型の壺で、体部中位には1条の貼付突帯が施される。突帯の調整は波打ちぎみで粗雑。刻目などなし。1~2mmの石英・長石を含み、淡白橙色を呈する。2は庄内式併行期の壺の口縁部。やや拡張をみる端面は凹む。壺の底部4は、推定底径12.6cmを測る。石粒を多く含み、淡黄茶~淡明茶色を免する。5は、鉢の把手である。扁平なつくりで、外下方に向かって直径5mmの穿孔がなされる。多くの石粒を胎土に含む。色調は黄白色~赤白色。1・3~5はすべて弥生前期に比定され、後半の様相をもつ。



遺物出土層位

<第1トレンチ>

- 第4層.....17
- 第5層.....2
- 第8層.....7
- 第11層.....3
- 第12層.....23

<第2トレンチ>

- 第2層.....11・14
- 第3・4層.....5・8・16・21
- 第5層.....18・19・22
- 第8層.....6・5・9・18・20・24
- 第7層.....1・10・12

第16図 寺田遺跡第47地点出土遺物実測図 1/4

6～16は須恵器。6・7・9・10は、杯蓋である。6は口縁部付近に弱い屈曲をみせる。端部の丸い7は小型品。8は杯身で、6・7と前後する時期のものであろう。9はカエリを有し、口縁端部より下方にのび、接地する。10は天井部がほぼ水平な面を形成したのち、下方へ緩やかに段を形成し、

口縁部に至るものである。9は中村浩氏編年のⅢ-1段階、10はⅣ-3段階に併行する。杯身の11は、端部の丸い高台を底部周縁に付している。14・16は高杯の脚裾部とみてよい。14は鋭い稜を有し、下方に屈曲する。端部は丸く仕上げられる。16の端部はやや内傾し、内周縁に突出をみる。12は平瓶の体部破片。丸みを帯びた体部で、古墳時代のものであろう。13は台付長頸壺の胴部で、内面には強いヨコナデによる調整痕が明瞭に残る。15は脚台の裾部とみられる。下方にのびのち、端部付近で外方に屈曲する。底径28cmを測る大型品であるが、器体の全容については不明。

17・18・21・22は土師器、19・20は瓦器である。17・18は椀。17は断面三角形の薄い貼付高台を伴い、器壁も薄く仕上げられるが、ヘラ削りによるものかどうかは不詳。高台復元径8.8cmを計測する。18は直立する低い貼付高台で、器壁外面はやや厚く内湾する。胎土中には石粒を多く含み、調整は不明。この2点は9世紀から10世紀代に収まるものと思われる。皿になる21・22の復元口径は、それぞれ7.4cmと10.8cmを測る。21はヘソ皿になるかもしれない。22は底部周縁から内湾ぎみにのびるもので、胎土は精緻で、調整はナデによる。瓦器椀19・20は器壁薄く、20は断面三角形の非常に低い高台を有する。底径5.6cmになる。12世紀末から13世紀前半に比定されよう。

23は肥前磁器染付碗で、推定口径11.2cmを測る。外面は呉須によって蝶文が配される。18世紀代のものであろう。平瓦24は、ヘラ切りによる面取りがなされ、凹面には模骨痕が顕著に残る。灰褐色を呈し、2mm以下の石英・長石粒を若干含む。25は丸瓦である。24同様、面取り・模骨痕が顕著であるが、5mm以下の石粒を多量含み、24よりは古色を示すものであり、古代に遡る時期を与えてよい。寺田遺跡において瓦片の散布は少ないので、注意を要する（図版51上）。

なお、全面調査で出土した遺物は、今回整理時間の関係で報告を控えることとなったが、確認調査の3～4倍の出土量があった。（森岡・木南）

まとめ 今回の確認調査では、狭隘な発掘面積にもかかわらず、豊富な遺物量を誇る数枚の遺物包含層を確認した。攪乱の痕跡もなく、比較的プライマリーな堆積を示しており、遺物の存在量と時期が各層位の中心となる年代を反映するものと考えられた。したがって、寺田遺跡の中心部の様相を再検討するため、トレンチの分層発掘結果からみた出土傾向を述べ、締めくくりとしたい。

第2層から第7層に至る遺物包含層のうち、出土量についてみれば、第5層がもっとも濃厚といえる。遺物組成も弥生前期から中世に至るまで、若干の間欠期を挟みつつも豊富に出土している。各層位の時期的出土傾向（中心時期）を第2表に則して、堆積順に下層からみると、第7層は弥生前期及び弥生後期末から古墳時代、下限は古代に下がる土器も出土している。第7層を受けるベース面は、第1地点において平安時代前期の遺構がみられるため、当該期を下限におく生活面とみて大過ない。したがって、それ以前の包含遺物については、平安時代の遺構ないし包含層に由来する可能性が強く、第1・16・17・20・24・27の諸地点では弥生前期の単純遺構や包含層も検出されている。第6層包含の遺物は、弥生後期～古墳時代後期の遺物相にやや重心を移し、古代の土器も引き続き含まれるが、中世以降の遺物は一切包含されていない。換言すれば、平安時代末までに堆積をほぼ完了したプライマリーな包含層ということができよう。第5層に至っては、瓦片を伴うようになり、このことが逆に第6・7層の堆積年代を示唆する。第5層は古代の土器片にも比重が移る。第4層以上は、遺

第2表 各層位における出土遺物の遺存状況（年代別）

年代 層位	弥生前期	弥生後期末 ～古墳	古 代	中 世	近 世
第2層		△	△	△	△
第3層		△	△	△	
第3・4層	△	○	▲	○	
第4層	△	○	○	○	
第5層	◎	◎	◎	○	
第6層	○	◎	○		
第7層	◎	◎	△		

遺存状況凡例

◎…非常に多い ○…多い
▲…やや少ない △…少ない

確認結果が得られた。また、この報告に基づき、基礎工事のおよぶ限界深度まで全面調査を実施したが、調査深度が上層位にとどまったため、本遺跡の中心時期の遺構を検出するには至らなかった。今後、今回の基礎工事以上の掘削行為があれば、再調査が必要である。（森岡・木南）

（5）第52地点の調査

調査動機 本地点は、市内三条南町61番地2に所在する。震災により家屋が倒壊した当該地（敷地面積100.29㎡）には、地権者（三木敦子）により、木造2階建個人住宅の再建が計画され、着工が急がれた。本地点は第1地点の北側に位置し（第2図）、寺田遺跡（第1図）の中心部と判断されたため、平成7年9月26日に本調査のデータを得る目的で確認調査を実施した（第17図）。その結果、現地地表20cmから2枚におよぶ遺物包含層が確認され、本遺跡の盛期である平安時代の遺構の存在が予想された。また、同時にベース面も55cmと浅い位置に存在することが判ったため、基礎施工（掘削深度40cm）によって損壊を免れない部分を中心に事前調査を実施した（第18・19図）。発掘調査は森岡係長と木南嗣託が担当した。（森岡・木南）

調査の方法と経過 調査は平成7年10月12日に開始し、10月19日までに5日間を要して終了した。調査区は設計者立会の下、建築に支障の起こらぬ場所を選び、幅2m、長さ5mのトレンチ1本を設定し、人力によって掘り下げた。設定に際しては、敷地南西隅から北へ3.5m、東へ3mの地点を発掘区南西隅とした。調査面積を限っての発掘の軽減措置である（図版9）。

その経過をたどると、器材を搬入した10月12日、盛土を除去。午後西壁に沿ってサブトレンチを掘削し、基本層序の確認を行う。10月16日、第2層及び第3層面において遺構確認を行ったが、検出さ

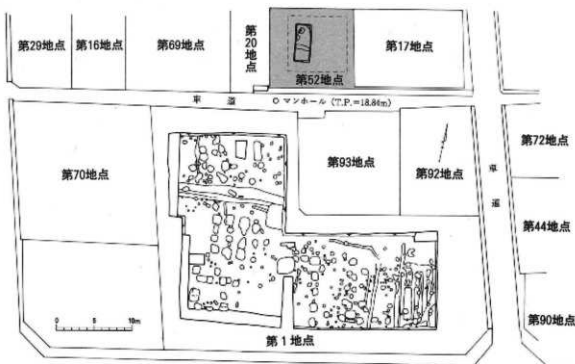
物相の中心が中世段階にウェイトを移す。近世磁器は、第2層に至って初めて加わる。

このように、当初予測したとおり、本地点の包含層は、整然とした遺物相の時代的推移を示しており、層位的に正しい結果を得た。当地点が本遺跡の中心部分に該当することをより一層裏付けるものであろう。

以上のとおり、現地地表60cmに達する基礎工事損壊箇所については、全面調査を避け難く、事前調査が必要であるとの



第17図 調査風景



第18図 調査区配置図 1/500

れず、調査区南半の掘削と水田段差を発掘。10月17日、第4層上面でも遺構未検出。10月18日に第5層上部を除去して初めて明確な遺構が検出できた。10月19日に遺構掘削及び平面図を作成し、夕刻には埋め戻しに至った。測量基準点はT.P.18.84mを計測する。基準線はその±0mを用いた。(木南)

基本土層 層位を堆積した順にみると(第20図)、遺構のベースとなる第5層、弥生前期以降、各時代の遺物を含む濃密な包含層(第3・4層)、近代の水田土層及び表土となる。遺物包含層は第3層(灰茶色粘性砂質土層)に比べ第4層(暗灰茶色粘性砂質土層)の方がマンガン粒の含有度が強まり、締まりも増す。第5層以下は無遺物層で、花崗岩の風化細粒を白斑状に散見する。(木南)

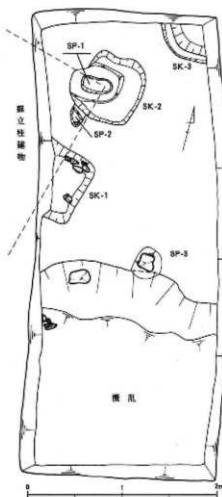
遺構 第5層上面において、土坑3基、ピット2基を検出した(第19図、図版10)。土坑中の2基は、掘立柱建物を構成する柱穴の一部と推定され、SK-1・2と呼称する。ピットについては、SP-1〜3と呼称する。SK-1・2とSP-1の所見を以下に報告する。(森岡・木南)

SK-1 南北長約75cmの略方形プランを呈する。構築面は既に削平を受けているが、深さは26cmを測る。柱痕は確認できなかった。掘立柱建物の側柱であろう。(森岡・木南)

SK-2 東西77cm、南北74cmの不整形を呈する柱穴である。深さは10.5cmと浅い。(木南)

SP-1 SK-2の西寄り近くで重複検出した楕円形プランのピットである。柱穴とみられ、東西の長さ30.4cm、南北の長さ17cmを測る。底はSK-1とほぼ同じレベルである。(木南)

遺物 図化できる遺物は、第3層に集中した(第21図、図版51下)。1・2は畿内第I様式に遡る弥生土器である。1はいわゆる逆「L」字状口縁の瀬戸内系の甕で、口縁部上面は外方に水平にのび



第19図 5層上面透視平面実測図 1/40

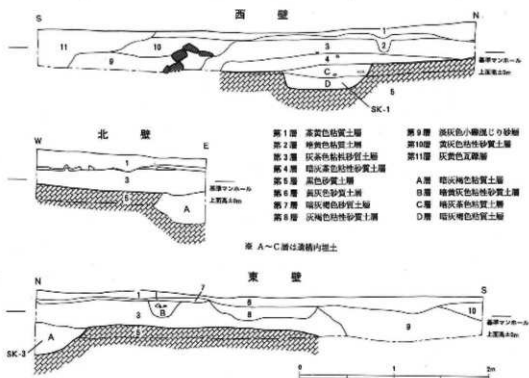
る。端部は小刻みにヘラによる刻みを施し、体部には3条+αのヘラ描沈線文が巡る。胎土には石英・長石の鉱物粒と風化雲母片が混ざっている。2は壺の体部片で、やはりヘラ描平行沈線が少なくとも3条認められる。黄褐色の焼き上がり。これらは3層でも下部に偏在する。3は棒状有孔土罐で、復元全長7.8cm。4は粗いタテハケ調整の甕で、古墳時代後期前後のもの。5～14は須恵器。杯蓋6～8、杯身9～14の他、長頸壺5などがみられる。5は肩部やや内側に入ったところに擬凹線1条を施す。焼成は堅緻。6・7は7世紀末～8世紀初頭、8は8世紀後半に下ろう。杯身は7世紀初頭頃を前後する時期のものが目立つ。15・16は口縁部に巻き込みのみられる土師器杯類の残欠片で、胎土は精良ながらややざっくりした感じ。共に暗褐色を呈する。土師器碗17は胎土良好で、明るい褐色を呈する。出土層位を異にする18は、器表の荒れた瓦器碗で、淡灰白色を呈し、口縁端部内面にはかろうじて凹線の走行が看取される。(森岡)

まとめ 狭小な発掘面積にもかかわらず、歴史時代の建物跡の一部が検出された。柱穴から出土した土器類は僅かで、時期判定が不確かであるが、遺構面の検討とその規模・プランから平安時代以前に遡る蓋然性は高い。復元される建物は、SK-2を北東の隅柱とし、SK-1を通る柱列が東端のライン(側柱列)になるものと想定している。したがって、西及び南に続く独立柱建物の一部分とみなされよう(第19図)。

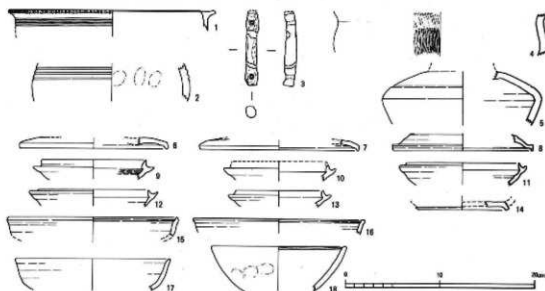
近接する第1地点では、建物の輪線が北よりやや西に振る独立柱倉庫群が見出されたが(第18図)、当該地点ではやや東に振った建物になるようである。しかし、北を志向する点に共通性がみられ、同一ベースに遺存する遺構として、有機的にとらえることのできる建物が周辺部に存在する事実を把握できた意義は大きい。おそらく官衙的建物構成の一部とみて大過なかなう。(森岡)

(6) 第55地点の調査

調査動機 本地点は、市内三条南町23番地2に所在する(第2図、図版11)。震災により家屋が全壊した当該地(敷地面積1,529.9㎡)には、再建住宅として鉄筋コンクリート造地上5階・地下1階建集合住宅の計画案が進み、事業主アーバンライフ(株)から埋蔵文化財の包蔵有無に關しての照会があった。計画建物は、基礎底までの掘削深度が5mと深く、建築面積は882.4㎡と規模も大きい。



第20図 土層断面実測図 1/40



遺物出土層位

第3層……………3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17

第3層(下層)……1・2

第10層……………18

第21図 寺田遺跡第52地点出土遺物実測図 1/4



第22図 調査風景

周知遺跡内で遺構・遺物包含層への支障が甚大であると判断されたため、とりあえず基本データをとるための確認調査を実施した。(森岡・木南)

調査の方法と経過 確認調査はトレンチ3ヶ所を設けることとし、調査期間は3日間を要した(第22図、図版12・13)。

各トレンチの配置は、北側敷地境界線及び西側敷地境界線からの距離を基準として、第1トレンチは14.8m・9.0m、第2トレンチは39.4m・12.6m、第3トレンチは28.2m・23.3mの計測点がそれぞれのトレンチ

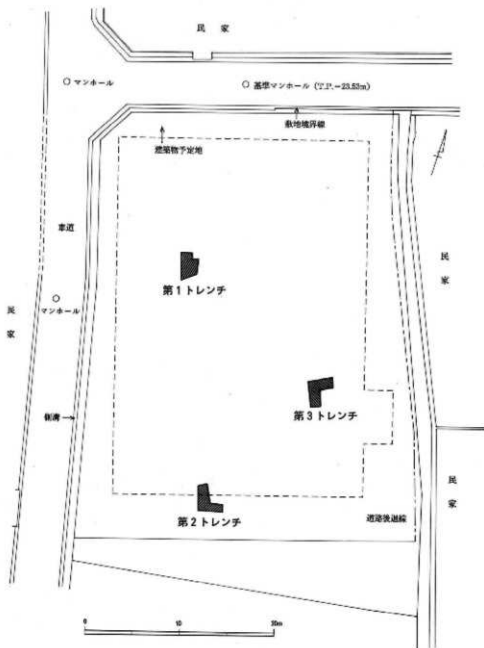
の北西隅に当たる(第23図)。各トレンチは南北2.7~3.0m、東西2.0~2.6mの範囲・規模で、掘削確認深度は現地表下それぞれ2.22m・3.16m・2.72mを測る。調査初日の平成7年11月28日、試掘をすべて終え、第1トレンチの土層断面実測図を仕上げ、東壁沿いに分層発掘を行った。11月29日、第2トレンチ及び第3トレンチの土層断面図を作成する。第1トレンチは分層発掘を続行。11月30日、第2トレンチ及び第3トレンチの分層発掘をそれぞれ東壁沿いに行い、夕刻には調査が完了し、埋め戻しを行った。なお、基準点の標高は、T.P.23.53mである。(木南)

基本土層 3トレンチで固有の態様を示すが、第1トレンチと第3トレンチの深部の層序が近似し、無遺物層となる基盤層がともに浅い位置にある。ここでは第1トレンチの東壁土層断面を基準に基本堆積をみとめる(第24図、図版13)。

厚さ20~50cmの第1層は表土・盛土層で、その下には厚さ20~30cmの水田耕作土が存在する。遺物の濃密な散布は、現地表下70cm前後から始まる第4層の灰茶色土から認められ、この包含層は厚い箇所では50cmを超え、中世土器に加え、近世瓦など豊富な遺物を含む。黒褐色粘土ブロックや拳大の花崗岩が散見され、締まりが悪い。第5層は遺構ベースとなっている土層で、締まりは第4層よりさらに悪くなる。第6・7層は遺構内埋土で、上層の褐灰色小礫混じり粘性砂質土は、人頭大以下の花崗岩を多量包含する。下層の暗灰褐色粘性砂質土は、上層と土質・包含遺物ともに同態であるが、人頭大なみの礫は含まれず、3cm以下の礫が若干含まれる程度である。

シルト質の第8層は、淡褐色~黒褐色の粘性砂質土ブロックが混入する。その下に堆積している第9層は、泥炭層と化す黒褐色粘質土で、往時には湿地性土壌の広がりがあったことを教えるものである。この層には細片ながら赤褐色の土器をみ、古墳時代前期以前の単純包含層を形成するようである。第9'層はこれに酷似するも、小礫混じりの粗砂であって、泥炭化もなく、かつ無遺物層となる。第10層は扇状地の基盤形成に関わる確認限界の層位で、砂分が強く、第1トレンチでは暗い茶色、第3トレンチでは黄茶色に呈色する。

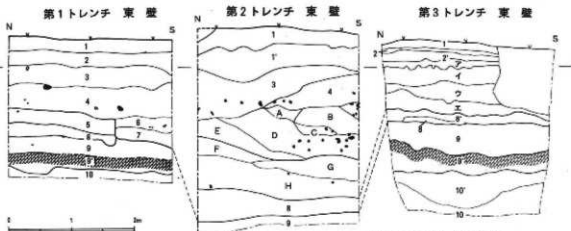
第2トレンチでは、明瞭な近代水田層は検出されなかった。逆に第4層から第8層の間に流下堆積層(A~H)が厚く挟み込まれていることが判明した。礫層・砂礫層・砂層・粗砂層から成り、全体としてはブロック状の部分もあり、もろい。これは旧河道と関連する開析谷を短時間に埋積した扇状



第23図 調査区配置図 1/400

地の最終形成と密接な関連をもつ流入土と考えられ、一見平坦地の連続に見える付近一帯の古い時期の地形がかなり起伏に富むものであることを教えてくれる。

第3トレンチは、現地表下10cmの浅い位置に薄い厚さで近代水田耕作土が広がる。8・9層の基盤的土層は、第1トレンチより高い位置にあり、旧地形の高所部分を推定することが可能である。このトレンチでは、西に隣接する谷地形の影響が顕著にあらわれており、3層目以下の堆積は他のトレン



※基準線は、基準マンホール上面高±0m

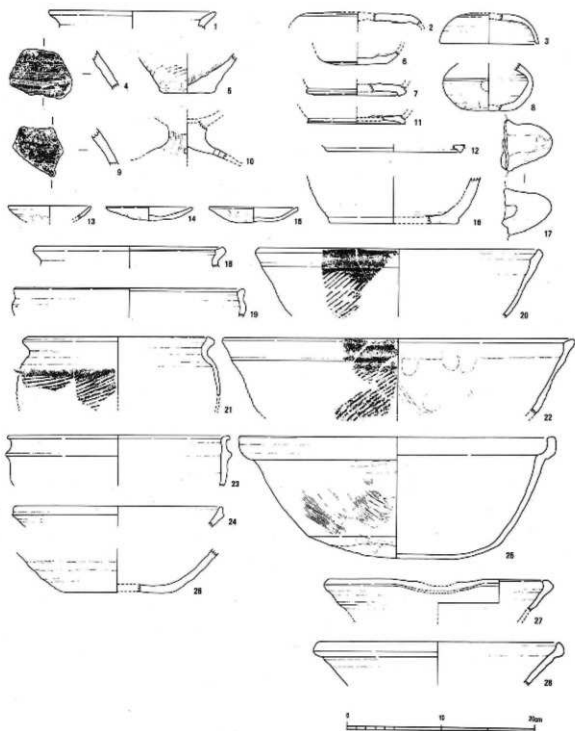
- | | |
|-------------------------|---------------|
| 第1層 淡黄褐色～暗茶色砂質土層 | A層 灰褐色礫混じり砂層 |
| 第2層 高黄褐色粘性砂質土層 | B層 淡茶灰色粘性砂質土層 |
| 第3層 淡茶灰色粘性砂質土層 | C層 灰茶褐色粘性砂質土層 |
| 第4層 灰黄色粘性シルト質土層 | D層 茶褐色砂層 |
| 第5層 淡灰茶色小礫混じり粘性砂質土層 | E層 黄褐色～黄褐色砂層 |
| 第6層 暗灰茶色～暗灰褐色礫混じり粘性砂質土層 | F層 黄褐色砂層 |
| 第7層 暗灰褐色粘性砂質土層 | G層 黄褐色砂層 |
| 第8層 灰茶褐色粘性シルト質土層 | H層 黄褐色砂層 |
| 第9層 黄褐色粘性土層 | I層 高褐色粘性砂質土層 |
| 第10層 黄褐色小礫混じり砂層 | J層 暗茶褐色粘性砂質土層 |
| 第11層 暗茶褐色粘性砂質土層～砂層 | K層 暗茶褐色粘性砂質土層 |
| 第12層 暗黄色細砂層 | |

第24図 土層断面実測図 1/60

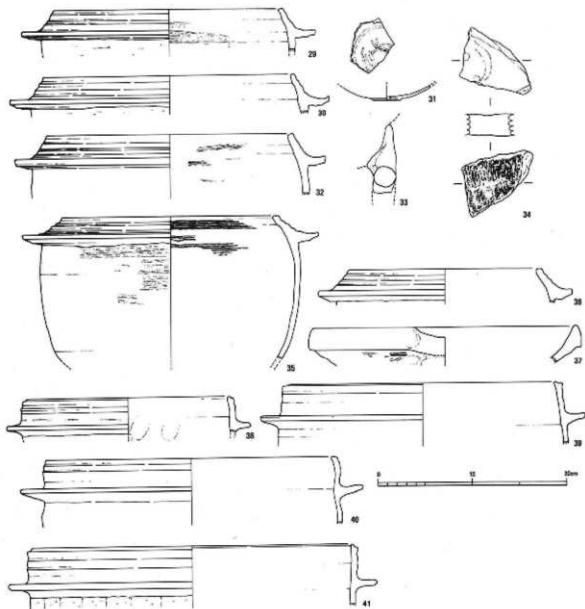
チと大きく異なる（ア～エ層）。このうちイ層は、現地地表下25cmから始まる厚さ17～30cmの厚さのマンガンを全体に含んだ濃厚な遺物包含層である。第1遺構面も浅いものと思われる。（森岡・木南）

遺構 第1トレンチでは、第5層を掘り込むようにして検出された土坑状の遺構が検出された。深さは確認最深部で50cm程度を測る。埋土上層は先述した6層で、須恵器片・土師器片・緑釉陶器片などが混入するが、中世後半期の遺物がかかなりまとまって一括出土し、完形土器を含む羽釜・土鍋・片口鉢・捏鉢・土師器皿などで構成される。近世に下る遺物は全くみられない。遺構の性格としては、煮沸形態を中心とする日常雑器の一括廃棄が考えられるが、定かではない。（森岡・木南）

遺物 41点の資料を図化した（第25・26図、図版52・53）。1は弥生土器甕の口縁部。第Ⅱ様式の兆候をもつ。4も同時期頃の無形壺の断片と思われ、櫛描直線文帯で外面を飾り、上端近くを細い竹管により密に押捺する。9も同じ個体になる可能性があり、いずれも粗い石粒を含み、第9層上面の出土である。叩き成形される5は、第Ⅴ様式の甕。10は庄内式期の低い台脚で、おそらく桃形の杯部がのるのであろう。5・10は4、5層の出土で、1・4・9とは層位・時期ともに大きく異にする。2・3・6～8・11・12・16は須恵器で、杯類の他、釵8がみられる。5～9世紀の年代幅がみられ



第25図 寺田遺跡第55地点出土遺物実測図(1) 1/4



遺物出土層位

第4層……10・18・19・21・24・29・32

第5層……5・31

第6層……2・3・8・14・15・16・17・20・22・23

35・36・38・39・34・35・37・39・40・41

第7層……6・11・13・27・36・38

第9層（最上面）……4・9

第9層（上面）……1

B・C層一括……12

D層……33

I層……7

第26図 寺田遺跡第55地点出土遺物実測図（2） 1/4

るが、主として6・7層から出土したものである。16は緑釉陶器。器質はやや軟質で淡緑色。

13～41は中世の日常雑器類で、14～15世紀を中心とするものである。土師器小皿・瓦器・土埴・羽釜・東播系埴鉢などがみられる。4～7層で須恵器や古手の土師器と混在しており、明確な中世包含層とはならないが、破片も大きいものが存在し、遺物の年代的ピークの一つが中世段階にあるとみて大過ない。埴の類は体部叩き成形のものが目立つ。これらは播磨から摂津にかけての地域性をもつものである。28は焼成が悪く土師質っぽい焼き上がりである。(森岡)

まとめ 本地点の事業面積は、60敷次に達するこれまでの寺田遺跡の調査沿革において最も大きい。確認調査の結果は、3トレンチ共に遺構ないしは包含層が確認され、地下駐車場を伴う建築物によって全壊する約980㎡については、全面調査が必要であるとの結果を得た。遺跡の実態は、不明な点が多々あるが、本遺跡の北部において、大規模な中世集落の存在が予察された意義は大きい。また、地形の急激な変換が認められたこと、それに伴って深部には古墳時代前期初頭や弥生Ⅱ様式の遺物をほぼ単純に含む包含層が遺存することなど、基礎的な試掘データを出し得たと考える。(森岡)

(7) 第57地点の調査

調査動機 本地点は、市内三条南町63番地6に所在する(第2図)。震災により家屋が倒壊した当該地(面積78.17㎡)では、再建住宅として鉄骨造3階建個人住宅の計画が進捗した。地権者(伊藤順市)代理の照会に基づき事前協議に入ったが、既往の調査が周辺一帯に密に分布しており(第6・16・27・47の各地点)、遺構・包含層の遺存は確実な地域であるが、震災対応のため建物四隅に据えられる160cm四方、深さ110cmの独立基礎の影響をみるため、確認調査を実施した(第27図、図版14)。(森岡・木南)

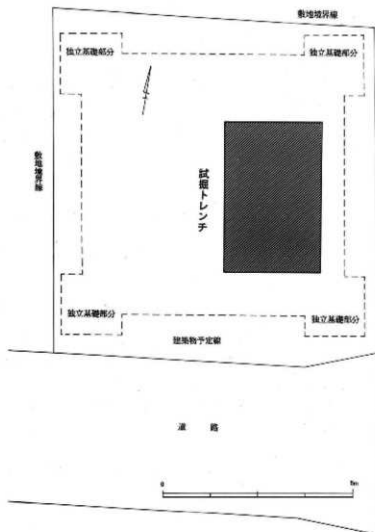


第27図 調査風景

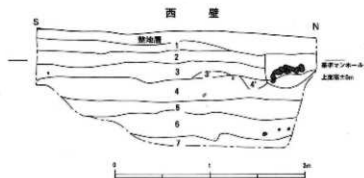
調査の方法と経過 調査は、12月11日～12月13日の3日間行った。調査区は、敷地の北東隅から南へ2.6m、西へ1.4mの地点をトレンチの北東コーナーとして設定し、幅2.6m、長さ4mの範囲を機械掘削により掘り下げた(第28図)。機械掘削は、第4層上面までとし、その後、西壁沿いに深さ1.2mの補助トレンチを設定。初日に土層断面実測図を作成した。第2日目、第4層上面において検出した遺構を掘削、平面図及び断面図を作成する。最終日は、第5・6層の分層発掘を行い、夕刻には埋め戻しに至った。測量基準点は、T.P.18.70mを用いた。(木南)

基本土層 下層より暗灰茶色小礫混じり粗砂の無遺物層、遺構ベースと考えられる黒色小礫混じり粘性砂質土層、2枚の包含層、近現代水田土壌、整地層の順に堆積する。第4層及び第5層の上面は遺構の確認面であり、第4層上面での遺存状況は良好である。第5層ではビット1基が検出できたにとどまった。第2・3層の水田土壌は、調査区の北縁を東西に走行する暗渠(SD-2)によって切られている(第29図、図版15)。(森岡・木南)

遺構 第4層上面において、土坑2基(SK-1・2)、溝2条(SD-1・2)、不明遺構(SX-



第28図 調査区配置図 1/100



第29図 土層断面実測図 1/40

1) 1基を検出。第5層上面において、ビット1基(SP-1)を検出した。以下、個別に報告する。(森岡・木南)

SK-1 近代の遺物を有する上層からの土坑で(第30図)、不整形プランを呈する。長径44cm。(木南)

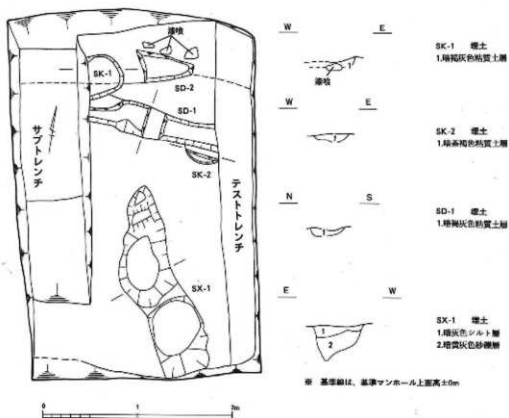
SK-2 SD-1によって切られる土坑で(第30図)、出土遺物は僅少。(木南)

SD-1 検出幅34cm程度の小溝で(第30図)、大略東西方向にのびる。深さは10cmと浅い。SK-1によって切られる。(森岡・木南)

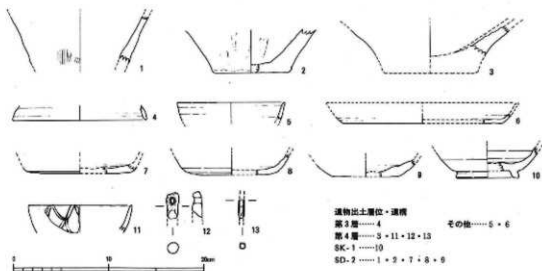
SD-2 近代水田に伴う暗渠。人頭大以下の花崗岩円礫が敷設される。検出幅56cm、深さ37cmを測る。(木南)

SX-1 不整形な産地状遺構で、暗黄灰色砂礫層及び暗灰色シルト層が堆積し、埋土下層において土師器片4点が検出された(第30図)。流

- 第1層 黄灰色粘粒性砂質土層
- 第2層 黄灰色粘粒性砂質土層
- 第3層 淡灰黄色粘粒性砂質土層
- 第3層 淡灰黄色シルト層
- 第4層 黒褐色粘質土層
- 第4層 暗灰褐色粘粒性砂質土層
- 第5層 黒色粘質土層
- 第6層 黒色小礫混じり粘粒性砂質土層
- 第7層 暗灰褐色小礫混じり重砂層



第30図 4層上面遺構平面・断面実測図 1/40



第31図 寺田遺跡第57地点出土遺物実測図 1/4

下砂礫物が一気に堆積し、埋まったものとみられるが、風倒木痕の可能性もある。検出長206cm、最大幅57cmを測る。人為的な遺構とはみなし難い。(森岡・木南)

遺物 13点を図化した(第31図、図版53)。1～3は弥生土器の底部付近の破片である。1は下地にハケ調整を施す前期の甕で、胎土中に粗い鉱物粒・花崗岩片を含む。2・3も前期の土器で、3は甕であろう。4～10は須恵器で、杯類の他、6のような皿がみられる。6は淡灰白色を呈し、胎土は精良である。8・9の中には底部底面を未調整とするものがある。11は、二重網目文を施す伊万里染付碗で、18世紀初頭頃のものと思われる。12は棒状有孔土錐の残欠、13は断面方形を呈する鉄釘片とみられる。遺物から、第Ⅰ様式期の遺構の存在も予測される。(森岡)

まとめ 小面積の確認調査であったため、遺構の時期・機能については、不明な点が多い。SD-1は、東西方向に走行するもので、第1・52地点などで見出されている平安時代前期の遺構群との併存は考えられていい。また、SD-2は、第27・47地点などで検出されている配石溝と関係し、近代水田の段差に伴う水路と考えられる。やはり略東西方向に走行する。(森岡・木南)

(8) 小 結

寺田遺跡については、遺構・遺物の出土がみられた6地点について、報告した。共同住宅建設予定地である第40・55地点については、本遺跡全体に広がる白色礫混じりの黒褐土が深部にみられ、包含層も厚い堆積を示す。55地点には有望な中世後半期の遺構群が眠っている可能性が高い。相互に近接し合う第41・47・52・57の4地点は、すべて個人住宅の再築に伴う事前調査であるため、震災の特例的取り扱い、発掘軽減の措置を採り、十分な調査は行っていない。しかし、本遺跡の中心時期ととらえられる平安時代前期の関連遺構が見出されるなど(第52・57地点)、次第に中心建物群の広がりが確認されつつある。また、第47地点で試みた層位的な遺物包含傾向は、今後、本遺跡の重層度と変遷を追認していく上で参考となろう。

また、弥生時代の寺田遺跡についても、今年度実施した震災復興に伴う確認調査でいくつかの知見が加わった。第47・52・57の3地点では畿内第Ⅰ様式(新)段階の壺・甕が散発的に出土しており、弥生前期後半の集落域に入ってくるものと思われる。既述調査では、第1・16・20・27地点で前期後半の遺物や土坑墓・土坑などの遺構が見い出されており、併せて7地点にのぼるようになった現在、寺田遺跡の前期集団がこの地域周辺に偏在する可能性はほぼ確実となった。その場合、東西60m以上、南北75m以上の規模を有することになり、おそらく径100m前後の居住域の広がりとは想定されてよいだろう。

寺田遺跡内部では、東川旧谷伏地形をはさんで東側の区域にも弥生前期のムラの存在が予測されているが、続く第Ⅱ様式期では第55地点において集落の存在が見込まれるようになった。さらに第40・47・55地点では第Ⅴ様式終末～住内式併行期の土器類や遺構も確認されており、居住範囲の拡大や、月若・芦屋庵寺・三条九ノ坪遺跡など隣接遺跡との絡みが出てくるものと思われる。(森岡)

2. 芦屋廃寺遺跡

(1) 調査地の位置と環境

白鳳期創建の古代寺院跡の存在が契機となつてたび重なる調査が行われてきた芦屋廃寺遺跡は、西山町一帯から西芦屋町・三条町にかけて所在する。芦屋川と旧高座川との合成扇状地面が段丘化してできた芦屋台地の末端から芦屋川の現扇状地面にかけて立地しており、東西350m、南北330m、総面積55,000㎡にわたる複合遺跡である(第1図)。寺院の伽藍を示す遺構は未だ見出されていないが、芦屋アーバンライフの南側を中心とする地域では古代瓦の出土分布が濃密で、寺域がある程度推測できる(第1・2・3・A・B・K・Q・R地点)。また、周辺部においては、古代末期の一括土器群のみられたG地点、外来系土器を含む古式土器が多数検出されたJ地点、谷斜面地に投棄された大量の土器器皿群が特筆されるL地点、中世の掘立柱建物跡が見出されたO地点、東限的な地形変化を顕著に示すW地点など、それぞれ色彩の異なった調査所見が加わっており、弥生時代終末期から江戸時代にわたっての複合遺跡と考えられる(第32図)。なお、本遺跡における被災面積は6,100㎡程度で、範囲全体の11%程度を占める。



第32図 芦屋廃寺遺跡調査地点分布図 1/5000

部においては、古代末期の一括土器群のみられたG地点、外来系土器を含む古式土器が多数検出されたJ地点、谷斜面地に投棄された大量の土器器皿群が特筆されるL地点、中世の掘立柱建物跡が見出されたO地点、東限的な地形変化を顕著に示すW地点など、それぞれ色彩の異なった調査所見が加わっており、弥生時代終末期から江戸時代にわたっての複合遺跡と考えられる(第32図)。なお、本遺跡における被災面積は6,100㎡程度で、範囲全体の11%程度を占める。

(森岡)

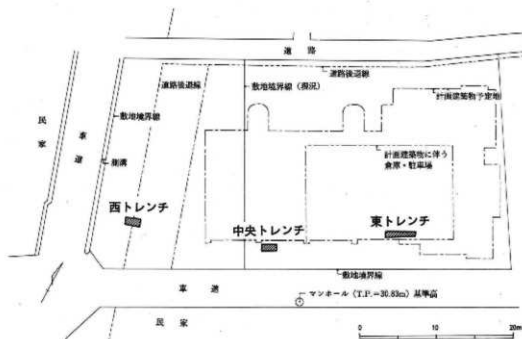
(2) W地点の調査

調査動機 震災による被害は、阪急電鉄以北の木造の旧家にも目立った。当該地(面積1430.62㎡)も被災して家屋が損壊し、居宅の建替が必至となった。敷地西半を占める宇野邸(525.31㎡)は、西端部が南北方向の都市計画道路拡幅の対象範囲となり、東半の田中邸(905.31㎡)では、住宅が半壊し、建物を解体する予定となった。この結果、地権者5名(宇野巖・宇野郁子・田中宗迪・澁智子・田中利則)は等価交換により、鉄筋コンクリート5階建集合住宅の新築を計画



第33図 調査風景

し、当該地が周知の遺跡である芦屋廃寺遺跡の範囲内に所在することから、平成7年5月30日、文化財保護法第57条の2第1項による発掘届出書を本市教育委員会に提出、平成7年6月5日・6日に森



第34図 調査区配置図 1/500

岡秀人・木南アツ子を担当者として確認調査を実施した。

(森岡・木南)

調査の方法と経過 当該調査地点は、阪急芦屋川駅より西へ250m、路線北側1筋目を東西に走る山手商店街の街路に面して北接する。確認調査は、事業地に3ヶ所の試掘坑を設定した。試掘坑は、東側田中邸敷地内南側の前庭に2ヶ所、西側宇野邸敷地内南側の前庭に1ヶ所設定し、田中邸内の試掘坑の東側を東トレンチ、西側を中央トレンチ、宇野邸内の試掘坑を西トレンチと呼称することにした。トレンチ相互の距離は15m前後とし、とくに包含層の遺存状況を比較した。

東トレンチは、母屋の東隣にある洋館前が築山であったため、これを回避し、門から母屋へと続く踏石面に設定した。敷地境界線東側から約18.1m、南側から約5.1mの地点を東トレンチの北西端とし、東へ3.88m、南へ0.83mの試掘坑を掘削した。踏石（コンクリート含）・盛土・水田耕土・床土を重機で除去し、床土の下部において遺物が出土したため、人力による掘削へと変更した。同日中に写真撮影・土層断面図を作成した。

中央トレンチでは、前庭が板塀・垣根によって仕切られており、東方からの重機の搬入が困難と考えられたため、全て人力によって掘削した。中央トレンチは敷地境界線東側から約30.6m、南側から約4mの地点を中央トレンチの北東端とし、西へ1.98m、南へ1mの範囲を掘削した。中央トレンチのある仕切り板より西側にはかなりの盛土が一面に投入されていた。

西トレンチの掘削については、中央トレンチ同様の厚い盛土がなされており、時間的な制約もあったので、ほぼ全てを重機によって掘削した。現況の建物の南西部の芝生植え込みの庭に試掘坑を設定した。敷地西側の道路境界線から東へ約3.9m、敷地境界線南側から約6.9mの地点を西トレンチの北

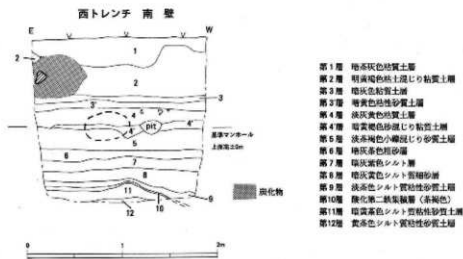
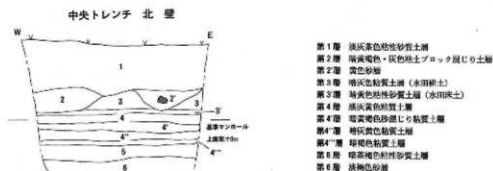
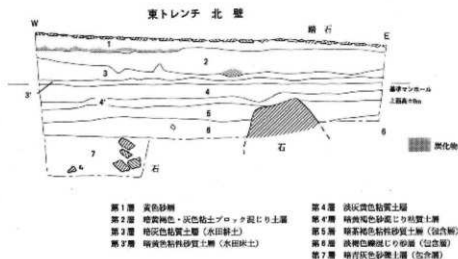
西端とし、東へ2m、南へ1mの範囲を掘削し、写真撮影・土層断面図を作成し、調査終了後に埋め戻した(第33・34図, 図版16)。(森岡・木南)

基本土層 試掘箇所ごとの基本層序は、次のようになる。各層序の番号はトレンチ個別のものであり、対応を図っていない。層序の相互関連については、所見においてふれる(第35図, 図版17)。

〔東トレンチ〕第1層…黄色砂層。盛土層。層厚約8～16cm。断片的に黒色炭化物を下部に含む。厚さ3～4cm。第2層…暗黄褐色・灰色粘土ブロック混じり土層。盛土層。現地表下約16cm。層厚10～25cmを測る。付近の水田耕土を搬入してきた客土と思われる。第3層…暗灰色粘質土層。プライマリーな水田耕土。部分的に小石を含む。現地表下約30cm。層厚4～16cmを測る。第3'層…暗黄色粘性砂質土層。水田床土。現地表下約48cm。層厚約6cmを測る。第4層…淡灰黄色粘質土層。現地表下約53cm。層厚10～20cmを測る。第4'層…暗黄褐色砂混じり粘質土層。1m南方では堆積しないことを確認。現地表下約74cm。層厚4～12cmを測る。第5層…暗茶褐色粘性砂質土層。遺物包含層。有機質味を強く帯びる。マンガンの暗茶色斑紋が認められる。現地表下約80cm。層厚18cm前後を測る。第6層…淡褐色砂混じり砂層。遺物包含層。細礫が中心で流下性がすこぶ高い。現地表下約90cm。層厚15～20cmを測る。比較的形態をとどめる須恵器平瓶がこの層より出土。第7層…暗青灰色砂礫土層。遺物包含層。河道堆積の特徴を示す水成層。拳大以上の礫も目立つ。包含礫は円磨度が高い(第35図上)。

〔中央トレンチ〕第1層…淡灰茶色粘性砂質土層。盛土層。層厚約55cmを測る。第2層…暗黄褐色・灰色粘土ブロック混じり土層。盛土層。現地表下約50cm。層厚26cm前後を測る。第2'層…黄色砂層。盛土層。第2層とほぼ同レベル。層厚20cmを測る。第3層…暗灰色粘質土層。水田耕土。上部暗灰色粘質土層を第2層・第2'層に侵食される。第2層とほぼ同レベル。層厚20cm前後を測る。第3'層…暗黄色粘性砂質土層。第3層…水田耕土の床土。現地表下約68cm。層厚5cm前後を測る。第4層…淡灰黄色粘質土層。現地表下約74cm。層厚5～10cmを測る。第4'層…暗黄褐色砂混じり粘質土層。酸化鉄が沈下集積する。現地表下約80cm。層厚10cm前後を測る。第4''層…暗灰黄色粘質土層。現地表下約90cm。層厚8cm前後を測る。第4'''層…暗褐色粘質土層。酸化鉄・マンガンが沈下集積する。現地表下約100cm。層厚5cm前後を測る。第5層…暗茶褐色粘性砂質土層。現地表下約105cmを測る。層厚14cm前後を測る。第6層…淡褐色砂層。現地表下約120cmを測り、検出面のさらに下部に及ぶものと推定される(第35図中)。

〔西トレンチ〕第1層…暗灰茶色粘質土層。表土層。層厚8～32cmを測る。第2層…明黄褐色粘土混じり粘質土層。盛土層。断面において攪乱坑(黒色炭化物混じり互層)を確認。現地表下約30cm。層厚30～58cmを測る。第3層…暗灰色粘質土層。水田耕土。現地表下約62cm。層厚6cm前後を測る。第3'層…暗黄色粘性砂質土層。第3層水田耕土の床土。現地表下約70cm。層厚4～8cmを測る。第4層…淡灰黄色粘質土層。現地表下約75cm。層厚10～20cmを測る。第4'層との境界より約50cm大の石塊を検出。第4''層…暗黄褐色砂混じり粘質土層。断面においてピットを1ヶ所確認。現地表下約90cm。層厚4～10cmを測る。第5層…淡茶褐色小礫混じり砂質土層。東・中央トレンチに比べ色調淡く、粘り気が少ない。現地表下約95cm。層厚12～20cmを測る。第6層…暗灰茶色粗砂層。湧水層。遺物の包含は認められない。現地表下約115cm。層厚6～12cmを測る。第7層…暗灰紫色シルト層。現



第35図 土層断面実測図 1/40

地表下約125cm。層厚10cm前後を測る。第8層…暗灰黄色シルト質細砂層。現地表下約140cm。層厚10～25cmを測る。第9層…淡茶色シルト質粘性砂質土層。現地表下約152cm。層厚2～8cmを測る。第10層…鬼板層。酸化第二鉄の集積層。茶褐色を呈し、硬質である。現地表下約155cm。層厚2cm前後を測る。第11層…暗黄茶色シルト質粘性砂質土層。現地表下約157cm。層厚8～14cmを測る。第12層…黄茶色シルト質粘性砂質土層。月若遺跡の遺構ベースに近似する。現地表下172cm。検出面以下に及ぶ。

(木南)

遺構 3ヶ所設定した試掘坑のうち、東トレンチ内で量的に豊富な遺物を含む流路堆積層(第6・7層)を検出した(第35図上)。時間的制約のため、その東側を確認するには至らなかったが、6層中の須恵器平瓶の出土位置並びに東トレンチ東端の第6層において小・中礫がみられないことから、東トレンチ西半域を大略南北方向に走行する自然河川の一部とみられる。流路を埋める最上部は細礫で構成され(第6層)、下部(第7層)は拳大以上の中礫が頭着で、やや角がとれた亜円礫が多く認められ、滞水痕跡のみられる青みがかった土色を呈している(図版17)。中央・西トレンチには同様の層相・構成を示す土層は認められなかった。

包含遺物は、IV型式前後の須恵器が多く、他に土師器片なども含まれる。比較的少ない7世紀以前の遺物を上方に由来するものとみなし、流路の機能した主たる時期を8世紀前半とするならば、芦屋廃寺造営以降の古瓦の年代に重複することから、流路と寺域との関連が出てくる。瓦片の大半は攪拌土内からの出土であり、その絶対量も乏しい。

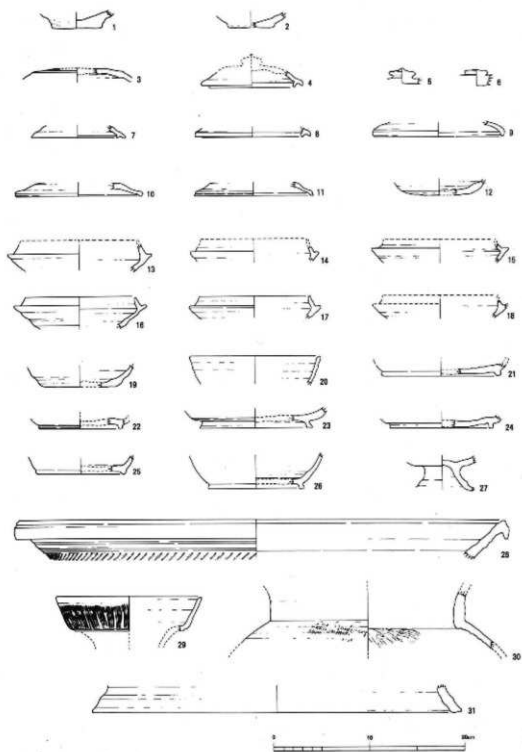
3トレンチ全体の盛土・表土層の下には、暗灰色の水田耕土及び暗黄色粘性砂質土の水田床土が認められた。コンニャク印判手の磁器片を少量ながら包含し、近世以降明治・大正期の水田と想定される。さらに下層の第4層では、淡灰黄色～暗黄褐色を呈した粘質土層が堆積。第4層より下層では、人頭大～80cm強の自然石が東・西トレンチより検出された。とくに西トレンチにおいては、密集する部分が認められた。第5層の茶褐色粘性砂質土層は、月若遺跡などと共通する有望な包含層であるが、含まれる遺物相には違いが認められる。第6層の暗灰茶色粗砂層は、芦屋川扇状地を構成する基盤土と考えられ、第5層同様、広い地域に遺存する流出堆積層で、伏流水の流下をみる。これ以下の層位は、西トレンチにおいてのみの土層断面なので比較は省略したい。

各トレンチの基本層位は類似をみるが、レベル的にみると、西トレンチと中央トレンチでは同レベルに堆積しているのに対し、東トレンチでは50～60cm下方に堆積している。これは、当該地付近が南北方向に堆積しているだけでなく、芦屋廃寺の寺域中枢付近をトップとして、東西南北へも緩傾斜していることに基因する地形変化や水田造成面の違いを反映しているのであろう。また、西トレンチにおいて、第9層以下が西へ傾斜している点については、調査区以西が不詳なため、芦屋川扇状地の形成途上における微地形を考えてみる必要がある。

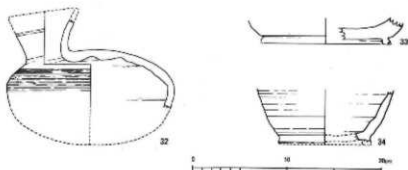
遺物包含層については、東トレンチの第6・7層が最も多いが、とくに第7層出土資料は器表のローリングが目立つ。それ以外の包含層は、土器の包含度が濃密でないものの、各トレンチで遺存していることから、当該地全体に遺物の包蔵がみられるものと判断される。

(森岡・木南)

遺物 弥生時代後期から近世に至るまでの多様な遺物が出土した。量はコンテナ2箱分。ほとんど



第36图 芦屋庵寺遺跡W地点出土遺物実測図(1) 1/4

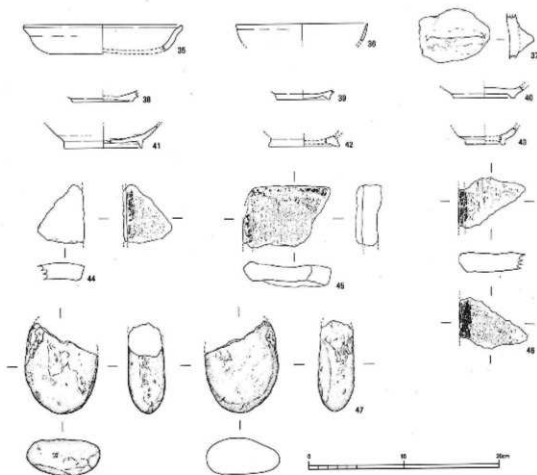


第37図 芦屋廃寺遺跡W地点出土遺物実測図(2) 1/4

が東トレンチ内第6・7層からの出土で、中央トレンチ及び西トレンチ出土の遺物はさわめて少ない。また、流出形跡をもつ砂礫層から出土したこともあって、器表の磨滅が著しく、残存状態は不良。出土傾向をみると、須恵器は擬宝珠様ツマミを有する杯蓋や高台を伴う杯身が目立ち、黒色土器や土師器も少なくないことから、遺物の中心時期は7世紀以降の古代とみられる(第36～38図)。

1は、壺の底部。器体の重心が低い位置にある。第V様式後半～末。2も壺の底部とみられる。赤色酸化粒を胎土中に含む。庄内式期に入る。これらは、2世紀後半～3世紀前半頃のもの。

須恵器は、32点を図化。杯蓋は6世紀代の古色をもつものを除くと、口縁にカエリを有するもの(4・7・8)と、カエリが消失するもの(9・10・11)に大別される。後者は、IV型式に属するもので、当調査地点出土遺物の中心時期に該当する。10・11の2点は9より後出するタイプである。5・6も後者のタイプの杯蓋に付くものと思われる。杯身は、6世紀中頃から8世紀末までの各型式が存在する。25は軟質の焼成で、かつローリングを受ける。27は短脚無蓋高杯の脚柱部で、内・外面は丁寧なヨコナデ調整が施される。7世紀前半頃のものとみられる。28は壺の口頸部。推定口径50cmの大型品で、口縁端部外面は下方に拡張され、形成をみた端面に1条の凹線が巡る。口頸部外面には2条の凹線及び斜線文が施される。30は広口壺の頸胴部である。頸部は上方に直立したのち、外上方にのびる。頸胴接合部直下から下半についての内面には同心円状の当て板痕が明瞭に残る。外面は叩き成形ののちにカキメ調整が加えられている。29は罐の口縁部。口頸部に明瞭な段を有し、やや内湾ぎみに外上方にのびる口縁部がつく。文様は口縁部が垂直方向に刷毛状工具により加飾される。復元口径15.4cm。口頸部が大きく長く発達する段階のものであろう。31は、器種不明であるが、大型器形の脚台部。高台復元径38.8cmを測る。端部の断面は四角形で内方に傾斜したのち、上方へほぼ直立する。盤の脚台部か。奈良時代後期頃に比定できよう。32は、平瓶の一部。出土状態を記録にとどめた(図版17, 2段目)。体部は全体的に丸みを帯びる形状で、肩部の張りとは全くみられない。胴部の上半は細かいカキメで調整され、口頸部は体部との接合部より外上方に比較的反り、口縁部近くに1条の凹線を施す。口頸部内面から外面は全体にわたって自然釉が付着する。提瓶の製作技法と共有する段階のものであろう。33・34は、付台長頸壺の底体部。33は低い貼付高台を伴う。34も低い高台を貼り付けるものと推定される。33は34よりやや新しくなるであろう。



第36・37・38図 遺物出土層位
 <東トレンチ>第5層……4・5・7・13・15
 第6層……1・2・6・9・13・14・16・18・19・20・22・27
 29・30・32・34・36・38・39・40・41・42・47
 第7層……3・6・11・12・17・21・23・24・25・26・31・35・44・45
 <中央トレンチ>第3層……33
 第4層……43
 第5層……46
 <西トレンチ>第4層……35・37

第38図 芦屋廃寺遺跡W地点出土遺物実測図・拓影(3) 1/4

土師器・黒色土器の類。口径16.6cmを測る35は、杯である。体部は緩やかに内弯したのち、口縁直下で外反し、屈曲する。口縁部内面の直下には、丁寧なヨコナデにより浅い凹部を形成する。平城宮式IV段階の杯A類に類例がみられ、8世紀後半の年代を与えてよいだろう。

貼付高台を有する碗形の器形の土器は、黒色土器(36・38・39・40)と、内外面ともに炭素を全く吸着させない土師器(41・42)とに弁別できる。黒色土器はすべて内黒。36は口縁部で、ゆるやかに外上方に内弯し、端部は細く丸く仕上げられる。器表外面はヘラによって削られ薄い。胎土は外面・

断面が暗褐色を呈し密である。39は高台部。36と同様、外面をヘラによって削られ、器壁は非常に薄い。高台の推定径5.5cm、外面は淡褐色を呈し、胎土は密である。36および39ともに9世紀から10世紀初頭頃のものと思われる。38・40は貼付高台を有するタイプであるが、双方とも欠損が著しい。外面はナデによる調整で、36・39にみられるヘラケズリは認められない。10世紀代に比定される。41はほぼ直立するやや高めの高台を有し、その推定径は8.2cmを測る。手づくねによる成形後、ヘラによる調整が施される。とくに、高台内はそれが顕著で、時計回りにヘラケズリ痕が認められる。底部ヘラケズリには回転台が使用されたものと考えられる。胎土は微砂粒を含み、乳褐色の色調を呈する。10世紀頃に比定される。42も高台部である。形状はベタ高台風で、中心に向かって緩やかにくぼむ。器表はマンガンの付着が著しく、調整は不明であるが、10世紀から11世紀の年代を与えておこう。37は、土埴の把手。1mm以下の石英・長石を胎土に含み、外面・断面ともに淡黄灰色を呈する。奈良時代後期のものとみてよい。

陶・磁器類。43は、瀬戸天目茶碗の高台部。高台及び高台付近は無釉で、淡乳白色の素地が露出する。内外面には鉄釉が施される。18世紀代のもの。

磁器は、肥前磁器碗の小片が1点、東トレンチ第3層（水田耕土）より出土した。小片であるため図化し得なかったが、コンニャク印判による桐紋が外面に配される。大橋康二編年の第IV期〔大橋1988〕に属し、18世紀頃のものである。

瓦・石製品類。44は、丸瓦の断片で、瓦片も若干量の出土がみられた。凹面に顕著な布目痕が認められる。側縁部はヘラ切りによって成形される。3mm以下の石英・長石粒を多量に含む。断面は茶褐色を呈する。45・46は、平瓦の断片である。45は凹面に不明瞭な布目痕を残し、上端には模骨痕が認められる。側縁部はヘラ切りが2段階加わる。凸面の調整は磨滅により不詳である。44同様、石英・長石粒を多く含む。表面は黒灰色、断面は茶灰色を呈する。46は凹面に布目痕、凸面に縄タキ痕が明瞭に残る。布目は非常に緻密で7本/cmを数える。器表・断面ともに淡灰色を呈す。胎土は2mm以下の石英・長石を若干含むが、締まりのよい粘土で堅く焼成される。

47は、敲石。硬質砂岩を石材とし、扁平で楕円形を呈した、自然縫を利用したものだが、全体の約4分の1程度を欠損。表面中央及び左側縁部には顕著な敲打痕が認められる。下端部には敲打痕は認められない。裏面右下方及び側縁周縁には弱い線条を残す擦痕が認められる。破面は被熱により、赤変する。残存長9.7cm、幅7.7cm、厚さ3.85cmを計測する。弥生時代のものか。以上、全体として遺物量はトレンチ相互間に格差が認められた（図版54・55上）。（森岡・木南）

まとめ 本遺跡は、昭和60年頃より住宅建設に伴って範囲確認調査が本格化し、現在その範囲を埋蔵文化財包蔵地分布図に明示するに至っている〔森岡編1993〕。複合遺跡としてのその規模は、東西約350m、南北約330mに及び、阪急電鉄の南側に全体の3分の1の、北側におよそ3分の2の広がりをもっている。遺跡面積は約55,000㎡である。

当該調査地点は、その東端に近いところの一角を占め、東に展開する月若遺跡の隣接地である。芦屋廃寺遺跡と月若遺跡は、6世紀以前にあっては、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の集落や古墳時代中・後期の集落として同一の遺跡になる公算が強い。しかし、7世紀後半以降の遺物は圧倒的に

前者の方がウェイト高く、芦屋川右岸域扇状地における二つの遺跡の構造・性格の違いが明確化する。

今回確認調査を実施した場所は、第1～3次調査地点やA・B・K・G地点と近い関係から、遺構・遺物包含層の遺存が予想されるところであったが、試掘結果を概述したとおり、3ヶ所設定した試掘坑すべてから包含層が認められ、東トレンチではとくに流路に伴う濃密な包含層が複数検出され、層位ごとに丁寧に取り上げたため、図化した遺物の大半を占める結果となった(第38図下表)。

遺物包含層までの深度は、現地表面から計測して東トレンチで74cm、中央トレンチで108cm、西トレンチで72cmである。包含層の形成理由は、部分的な調査であるため判然としないが、自然流路の一部にかかっているらしい東トレンチでは、包含層も最低3枚の遺存が確かめられ、既掘部分までの厚さも70cmを超える。流路内の埋積土と推定した包含層からの出土資料は、いずれも相当ローリングを受けており、二次的堆積物の可能性が高い。なお、芦屋庵寺の伽藍については、今日までの調査で未だ確証が得られていないが、瓦片の出土量を勘案すると、当該調査地点はやはり周辺の要素が強いと思われる。

しかし、調査面積に比し、東半部分における遺物量は多く、試掘対象としなかった敷地の北半域ではかなりの遺構の存在が見込まれる。当該地の取扱いについては、埋蔵文化財保護の見地から、包含層の損壊が大きく加わる建築部分を全面発掘調査して、記録保存などその保護を図る必要がある。

その実施については、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課並びに同県埋蔵文化財調査事務所後興班と協議・調整を進め、支援体制を得る予定である。(森岡)

(3) 第29地点の調査

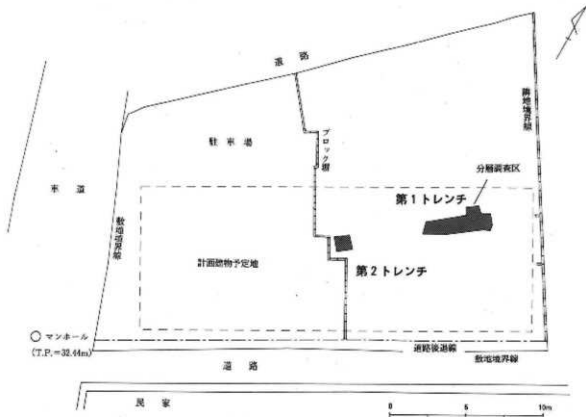
調査動機 当該地(敷地面積514.39㎡)の東半部は、震災により家屋が倒壊したため、現在駐車場として供用している敷地の西半部を含め鉄骨造2階建共同住宅の新築が再建計画として進捗した(第32図)。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である芦屋庵寺遺跡の範囲内にあり、同遺跡の中心部である第1～3次調査地点の東隣に位置することから、平成7年7月1日付、地権者(井床利之)より、文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書が、芦屋市教育委員会に提出された。本市教育委員会では、予定建築物の基礎と遺物包含層・遺構との関係を調べる目的で試掘調査を実施した(第39図・図版18)。(森岡・木南)



第39図 調査風景

調査の方法と経過 当該地は、平成7年8月末まで西半を駐車場として供用していたため、敷地の東半部において確認調査を実施した。また、予定建築物は敷地南半に施工され、北半は新設の駐車場になる予定であるため、遺跡への影響は少ないと判断し、試掘坑を南半に設定した(第40図)。

試掘坑は、敷地東端線より約3m、南端線より7mの地点に南北1m×東西4.75mの試掘坑(第1トレンチ)を設定し、重機掘削を行い、基本層序を得たのち、層位ごとに遺物の出土傾向を把握する

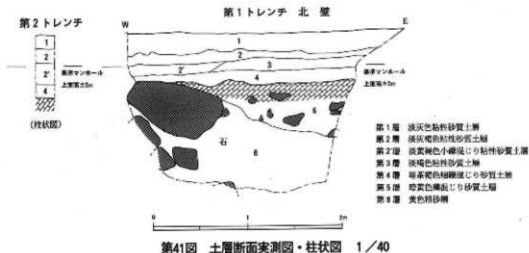


第40図 調査区配置図 1/250

ため、北東部に張り出し調査区を設け、分層試掘を行った。また、敷地中央部における層位・遺物の堆積状況を比較・検討するため、人力により1㎡の試掘坑を掘削した(第2トレンチ)。記録は第1トレンチにおいて北壁土層断面図(縮尺1/20)を作成し、第2トレンチでは、層位が水平に堆積することから、柱状土層断面図(縮尺1/20)を作成し、同日のうちに調査を完了した。(木南)

基本土層 層序は、無遺物層と確認できる地山までの深度が浅く、土層の遺存枚数が非常に少なかった。最上層より各層位の所見を記す(第41図、図版19)。

第1層…淡灰色粘性砂質土層。水田耕土Ⅰ。現表土層でもある。層厚20cm前後を測る。第2層…淡灰褐色粘性砂質土層。水田耕土Ⅱ。層厚6～20cmを測る。第2'層…淡黄褐色小礫混じり粘性砂質土層。遺物包含層。層厚10～22cmを測る。第3層…淡褐色粘性砂質土層。水田床土。遺物包含層。第2トレンチにおいては確認されない土層。層厚8～14cm。第2'層とほぼ同レベル。第4層…暗茶褐色細礫混じり砂質土層。遺物包含層。マンガンの含浸を受け、上層からの鉄分の沈着をみる。層厚12cm前後。第5層…暗黄色礫混じり砂質土層。地山であり、以下の層には遺物の含有は認められない。部分的に砂礫層を形成し、礫は拳大～20cmの角礫を中心とする。層厚56cm以下。第6層…黄色粗砂層。現表土下60～120cmで東方向に傾斜して堆積する。西向斜するラミナを有する粗い砂層。トレンチ西



半域を中心にボルダーを認め、流石塊を局所に包含する。 (森岡・木南)

遺構 包含層の確認にとどまった。遺構については、存在が予測される。 (木南)

遺物 総量は、コンテナ1箱分に満たない。遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦などであるが、いずれも小片である。そのうち8点を図化し得たので、以下に説明を加える(第42図)。

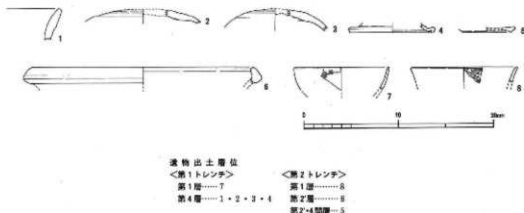
1は、土師器甕の口縁部である。小片のため、口徑をもとめるには至らなかったが、比較的大型のものと思われる。器壁は厚く直立ぎみに外反する。調整は全体にヨコナデが加わる。内面及び断面は黄白色を呈し、胎土に1mm以下の石英・長石などを含む。布留式期以降の長胴甕とみられる。2・3は、須恵器杯蓋の天井部である。2点ともに天井部を回転へう削りにより調整し、口縁部側はナデによる調整が認められる。4は、高杯の脚裾部。裾部を外方に屈曲させ、接地部分は折り込んで端部は鋭く内傾する。器壁は薄く、短脚高杯の破片とみてよい。

5は、瓦器碗の高台部。断面三角形を呈し、非常に低い。焼成はやや不良で乳白色を呈する。12世紀末から13世紀代に比定されよう。6は、東播系須恵質土器握鉢。口縁部は内傾ぎみに立ち上がり、端部は丸い。口縁下端部の拡張は強調されていない。14世紀中頃に比定できよう。

7・8は、肥前磁器である。7は染付碗であり、外面に梅枝文が描かれる。8は青磁染付碗であり、端反りタイプのものである。内面口縁直下に呉須による四方罫が施される。共に18世紀代のものであるが、8はより後出のものである。

出土遺物の内容を検討し、その包含傾向を述べると、第2層～第4層中では須恵器・土師器が各層位から出土するが、第2'層において中世遺物の出土が目立つ。近世遺物を含んでいない点を重視するなら、遺物量の少ない第2層の形成時期については、13・14世紀以降と考えられる。また、無遺物層の直上に堆積した第4層については、その中心時期を6世紀中葉から後半に比定していいように思われる。

今回の調査では、調査地点西側の第1～3次地点や南側のW地点などで確認された芦屋廃寺遺跡の中心時期に関わるような遺物が全く認められなかった。しかし、何分狭小な試掘面積でもあり、無遺



第42図 芦屋廃寺遺跡第28地点出土遺物実測図 1/4

物層までの深度が浅いことから、この時期の包含層や遺構が存在しないと断言することはできない(図版55中段)。(森岡・木南)

まとめ 2ヶ所の試掘結果を集約すると、現地地表下20数cmで遺物包含層に達し、その中心は第3・4層にあるようである。第4層は無遺物層である第5層を直接覆う層厚8～15cmを測る有機質土層で、ベースの西への緩傾斜に伴い、全体的に西への傾きをもっている公算が強い。

第5層と類似する砂礫質土層は、南に隣接するW地点においても認められたが(東トレンチ)、当トレンチの例では、ローリングを受けた多量の遺物を包含し、流路的性格を有する遺構との判断をみた〔Ⅱ-2-(2)参照〕。

当該地点第1トレンチにおける第5層の場合は、層相を異にする粗砂層(第6層)との層界面が遺構のごとく分層可能であったが、全く遺物が認められず、芦屋川に由来する少なくとも弥生時代以前の扇状地堆積物とみなされよう。

建築物による損壊を招く区域の包含層並びに遺構の精査は避けられず、工事前の発掘調査が必要である。調査については、平成7年10月1日からの県教育委員会復興調査班の支援活動を得る予定となっている。(森岡)

(4) 第38地点の調査

調査動機 本地点は、三条町130・131番地に所在する。当該地(767.98㎡)では、震災により寺院の本堂が倒壊したため、再建による復興が急がれ、地権者(水無瀬信義)から鉄骨造寺院本堂の新築計画が提出された。本地点は、芦屋廃寺遺跡の中心部にあたる第1～3地点の北西方近接地に位置し、当遺跡の北限範囲確認のための確認調査を実施した(第32・43図、図版20)。(森岡)



第43図 調査風景



第44図 調査区配置図 1/400

調査の方法と経過 確認調査は、平成8年1月16日に実施した。当日は既に本堂の新築工事が行われていたため、敷地内前庭に2ヶ所のトレンチを設定した。第1トレンチは敷地の南東隅より北へ8.85m、西へ4.65mの地点をトレンチ北西隅とする2.95×2.4mの範囲を現地表下214cmまで重機掘削した。第2トレンチは敷地南西隅より北へ13.4m、東へ6.2mの地点をトレンチ北東隅とする2.85×2.8mの範囲を現地表下209cmまで重機掘削した。第2トレンチは表土・盛土・水田層の下は、全て流入堆積土であったため、土層断面実測図(縮尺1/10)を作成、写真記録のみにとどまった。第1トレンチは遺物包含層・遺構を確認し、ト

レンチ西側を拡張して、分層発掘を試みた。第2トレンチ同様の記録を行ったのち、夕刻には埋め戻した。なお、測量に用いた基準高はT.P.34.27mである。(木南)

基本土層 比較的堆積状況の良好であった第1トレンチについての若干の説明を加える(第45図左)。層序は上層より整地層・盛土層・水田層・遺物包含層・土石流堆積物の順に堆積する。水田層は、第1・2層の耕作土・床土とに分かれる。灰褐色砂質土を呈するが、耕作土はやや暗味を増す。第3～5層は遺物・炭化物等を混じえる。第4層は、第5層をベースに垂直に掘り下げられており、遺構の可能性がある。遺物は土師器・須恵器・瓦質土器・瓦片などが出土。第6層以下の土石流堆積土の上部は水成層をなし、下部は礫を多量に含み、人頭大以上の円礫も多い。(森岡・木南)

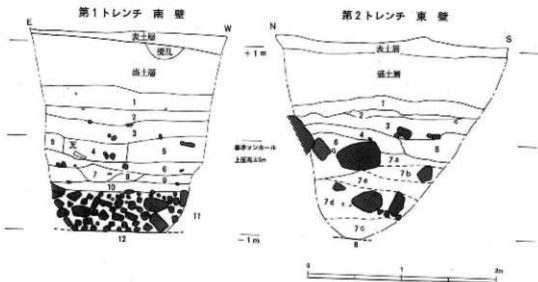
遺構 第1トレンチでは分層発掘区を設け、精査したが、第5層上面において土坑1基(SK-1)とピット2基(SP-1・2)を検出した(図版21上)。(森岡)

SK-1 不整な平面形を呈し、北側肩部はSP-1によって切られ、南側及び西側は調査区外に出る。深さは約20cmで、灰褐色砂質土の埋土中から土師器小片及び炭化物が出土した。(木南)

SP-1 多量の炭化物と焼土が含まれる。直径31cmの円形プランを呈するものと思われるが、西側は調査区外へ広がり、不詳。遺物には恵まれなかった。(木南)

SP-2 埋土は黄灰色砂質土。長径25cm、深さ4.5cmと浅い。SP-1によって切られている。出土遺物はない。(木南)

遺物 確認調査のため、出土遺物の量は少なく、コンテナ1箱に満たない。またそのほとんどが第



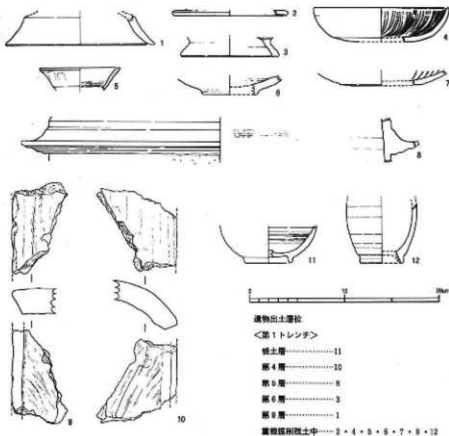
- 第1層 暗灰色砂質土層
- 第2層 灰褐色砂質土層
- 第3層 暗灰色砂質土層
- 第4層 灰褐色砂質土層
- 第5層 灰褐色砂質土層
- 第6層 暗灰色砂質土層
- 第7層 暗褐色細砂層
- 第8層 暗褐色細砂層
- 第9層 灰褐色砂質土層
- 第10層 灰褐色砂質土層
- 第11層 暗褐色細砂層
- 第12層 暗褐色細砂層

- 第1層 暗褐色細砂層にシルト質砂層
- 第2層 暗褐色細砂層にシルト質砂層
- 第3層 暗褐色砂質土層
- 第4層 暗褐色砂質土層
- 第5層 暗褐色砂質土層
- 第6層 暗褐色細砂層
- 第7a層 暗褐色細砂層
- 第7b層 暗褐色細砂層
- 第7c層 暗褐色細砂層
- 第7d層 暗褐色細砂層
- 第7e層 暗褐色細砂層
- 第8層 暗褐色細砂層

第45図 土層断面実測図 1/40

1 トレンチからの出土である。実測し得た12点について、記述する（第46図，図版55下・56上）。

1 は庄内式併行期の高杯もしくは器台などの据部片である。脚柱に至るまでに稜を有しており、なだらかに接地する。2 は、須恵器杯蓋である。口縁端部は巻き込み風に内方へややつまみ出されるタイプのものである。3 は、須恵器台付壺などの脚台部である。「ハ」の字状にしっかりふんばり、脚台径10.2cmを測る。2 は中村編年のⅣ-2型式、3 はⅢ-2型式に属するものであろう。4・7 は土師器杯である。色調・胎土は暗褐色を呈し精緻である。内面に放射状の暗文を施し、7 はその間隔が粗い。4 は口径14.2cmを測り、底部から丸みを帯びた器体を呈し、飛鳥Ⅲ型式に比定できよう。7 は弯曲度が少なく、やや扁平となり、時期も下るものであろう。6 は須恵器碗である。ベタ高台を有すると思われ、11世紀代前後の時期が与えられよう。5 は、土師質土器皿である。復元口径8.6cmを測り、口縁部は外反する。底部内面には、ハケメ状の線条痕が認められる。口縁端部の肥厚は少ない。15世紀代頃のものか。8 は、和泉型の瓦質羽釜である。灰色を呈し、鈔の復元径は41.6cmを測る。鈔



第46図 芦屋廃寺遺跡第38地点出土遺物実測図 1/4

から口縁部にかけては、内傾せず、直立するようである。体部は横方向にヘラケズリが施される。16世紀前後のものともてよい。11・12は、白磁の壺もしくは瓶の底部である。2点共に内面は無釉。9・10は瓦片である。淡橙色を呈し、同質のものである。凸面はていねいにヘラナデされ、凹面は斜め方向の緩弧線を伴う（コピキA）。中世以降の丸瓦であろう。（森岡・木南）

まとめ 遺構の存在を認めたが、工事掘削深度より深部にあり、包含層への影響も少ないと判断された。ただし、工事着手時の立会が必要と思われる。（森岡）

（5）小結

第38地点は、これまでに確認調査があまり試みられなかった地域で、包含層の存否を第一の確認目的としたが、遺物を含む層位はこれまでの芦屋廃寺跡における様相とはかなり異なり、同調査地点内のトレンチ間においてもかなり違いがみられるものであった。

以上、3地点の確認調査の結果、W地点は全面調査、第29地点は第2次確認調査実施の取扱いを決定し、第38地点に関しては、立会を断念し、慎重工事で保護措置を講ずることとなった。（森岡）

3. 月若遺跡

(1) 調査地の位置と環境

芦屋川の右岸域、標高25～32mの傾斜地形の変換部に立地する複合遺跡で、東西250m、南北350m、総面積58,000㎡の規模を誇る。昭和60年度から発掘調査のメスが入った〔森岡1986i・88b・1〕。縄文時代早期末から江戸時代後期に及ぶ時代幅がみられるが、盛行情を取り上げれば、環濠を伴う集落が想定される古墳時代前期初頭（第1・3・4・13・15・17地点）、石製模造品などの祭祀具を保有する古墳時代中・後期の集落（第1・10・12・13・18・19地点）、竈や建物など近世の遺構・遺物が主体をなす芦屋川寄りの地域（第2・8地点）など、少しずつ遺構の分布域を異にした様相の差がみられる。

今年度の調査地点は、第25地点を除く4地点がたまたま径70mに収まる範囲で近接した（第47図）。阪急電鉄神戸線との関係では、第33地点のみがそれ以北に位置し、他の地点はすべて沿線に南接する場所である。芦屋川の扇状地性堆積物を基盤面として中心時期の遺構が立地する地域で、基本層序は互いに関連するものと思われる。なお、本遺跡における被災率は8%と試算され、約4,400㎡の面積を占める。

（森岡）



第47図 月若遺跡調査地点分布図 1/5000

(2) 第20地点の調査

調査動機 兵庫県芦屋市月若町38番地14に位置する当該地（敷地面積264.7㎡）は、阪神・淡路大震災により、家屋が倒壊し、居宅の再建が急がれた。再建住宅として、鉄筋コンクリート造及び木造3階建個人住宅の新築計画が進捗し、芦屋市教育委員会に埋蔵文化財に関する照会があった。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である月若遺跡の中心地に位置することから、平成8年2月1日、地権者（井石聡）より、文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書が提出された。



第48図 調査風景



第49図 調査区配置図 1/400

当該計画では、基礎埋め込みのための掘削深度は現地表下約100cmであり、近隣調査地点の既往のデータを参考にする、遺物包含層及び遺構等の損壊は不可避と推測された。本市教育委員会としては、取りあえず、遺物包含層・遺構の遺存状況等の確認・判断のための確認調査を実施し、その取扱いについて地権者と協議することにした。

(森岡・木南)

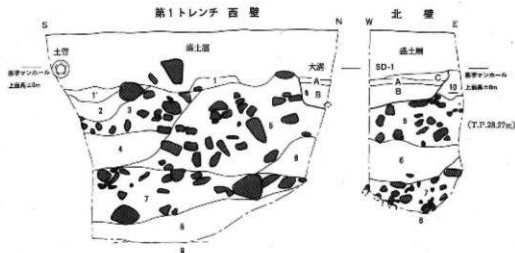
調査の方法と経過 試掘トレンチは、建築予定地北側に1ヶ所設け、深掘し、予定地内南側にも1ヶ所トレンチを設定した(第49図)。第1トレンチは、敷地北西隅から東へ0.85m、南へ0.1mの地点をトレンチ北西隅とし、1.95m×3.4mの大きさとした。ベース自体の確認を目的として現地表下2.2mまで掘り下げた。第2トレンチは、敷地南西隅から北へ1.8m、東へ5.1mの地点をトレンチ南西隅とし、1.95m×3.63mの規模とし、基礎埋め込みのための掘削限界深度1mまで掘り下げた。

調査初日、トレンチ2ヶ所の掘削を重機及び人力で行い、土層断面実測図の作成に入り、同日、第2トレンチの分層発掘を行った。調査2日目、第2トレンチにおいて遺構の検出(第7層をベースとする)を行い、ピット3基を検出、掘削。第1トレンチは、土層断面実測図完成後、大溝の埋土の分層発掘を行った(図版22・23)。夕刻には調査を完了、埋め戻しに至った。

(木南)

基本土層 層序は、第1トレンチと第2トレンチとでは、土層の堆積状況が大きく異なるため、個々に説明を加える(第50図)。

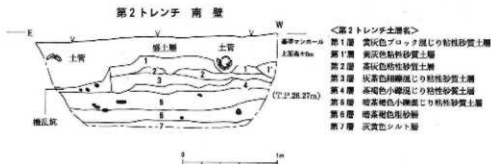
[第1トレンチ] 第1層…茶黄色礫混じり砂層。現地表下約50cm、層厚5～12cmを測る。第1'層…茶灰色細礫混じり砂層。現地表下約58cm、層厚6～15cmを測る。第2層…褐灰色砂礫層。以下、第8層まで土石流による堆積土。下部にマンガンの含浸が認められる。現地表下62～73cm、層厚16～22cmを測る。第3層…暗茶褐色礫層。20cm以下の花崗岩を多量に含む。南下するに従いマンガンの含浸が



<第1トレンチ土層名>

- 第1層 黄褐色礫混じり砂層
- 第2層 赤灰色細砂混じり砂層
- 第3層 褐色砂層
- 第4層 暗茶褐色礫層
- 第5層 灰黄色砂層

- 第6層 灰黄色粗砂層
- 第7層 淡黄褐色砂層
- 第8層 茶黄色礫混じり粗砂層
- 第9層 黄色粗砂層
- 第10層 褐色粗砂層
- A層 赤褐色小礫混じり砂層
- B層 暗茶褐色細砂混じり粗粒砂質土層
- C層 黄褐色小礫混じり粗粒砂質土層



第50図 土層断面実測図 1/40

認められる。現地地表下53~94cm、層厚12~50cmを測る。第4層…暗茶褐色砂礫層。粗砂を中心に、拳大以下の礫を若干含む。現地地表下104~108cm、層厚40cm未満を測る。第5層…灰黄色砂礫層。30cm以下の花崗岩、布引花崗閃緑岩などを大量に含む。現地地表下43~82cm、層厚32~98cmを測る。第6層…灰黄色粗砂層。ラミナを有し、5cm以下の礫を若干含む。現地地表下112~152cm、層厚34cm未満を測る。第7層…淡黄褐色砂礫層。30cm以下の花崗岩を中心に布引花崗閃緑岩も若干加わる。現地地表下130~154cm、層厚20~60cmを測る。第8層…茶黄色礫混じり粗砂層。粗砂はラミナを有し、10cm以下の礫が含まれる。現地地表下168~201cm、層厚17~30cmを測る。第9層…黄色粗砂層。現地地表下222cm、検出面以下に及ぶ。第10層…褐色粗砂層。現地地表下約50cm、層厚28~32cmを測る。A層…赤褐色小礫混じり砂層。大溝内堆積土。古式土師器の細片を包含する。現地地表下約50cm、層厚約6cmを測る。B

層…暗茶褐色粗砂混じり粘性砂質土層。大溝内堆積土。古式土師器が包含され、下部にいくにしたがい比較的破片が大きくなる傾向を示す。現地表下55～58cm、層厚18～24cmを測る。C層…黒褐色小砂混じり粘性砂質土層。大溝内堆積土。古式土師器細片に加え、須恵器の細片を含む。現地表下42～48cm、層厚8cm未満を測る。溝内A層を覆う（図版22中・下）。

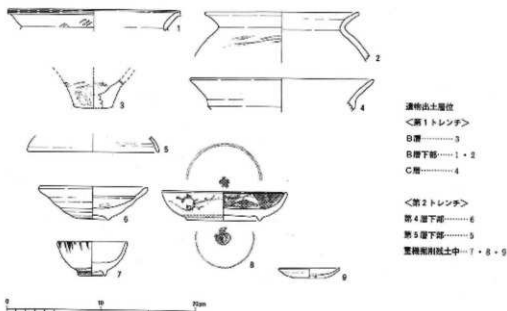
〔第2トレンチ〕隣接する第13地点の南壁の層序に近似する層位が得られた。第1層…黄灰色ブロック混じり粘性砂質土層。近世以降の水田耕土。第1・2層では肥前磁器などが出土。現地表下20～30cm、層厚7～12cmを測る。第1'層…黄灰色粘性砂質土層。近世以降の水田耕土。第1層と同質・同色であるが、ブロックの混入が認められる。現地表下約30cm、層厚17cm未満を測る。第2層…茶灰色粘性砂質土層。近世以降の水田耕土。現地表下約32cm、層厚6～10cmを測る。第3層…灰茶色細砂混じり粘性砂質土層。近世以降の水田床土。京焼風陶器がこの層より出土。現地表下38～46cm、層厚18cmを測る。第4層…茶褐色小砂混じり粘性砂質土層。遺物包含層。最下部において、ほぼ完形の胎土目痕の残る唐津焼皿が出土（第51図6）。現地表下約45cm、層厚6～10cmを測る。第5層…暗茶褐色小砂混じり粘性砂質土層。遺物包含層。遺物は、須恵器・古式土師器などの細片（第51図5）を包含する。マンガンの含浸は第4層より強い。現地表下約55cm、層厚約21cmを測る。第6層…暗茶褐色粗砂層。遺物包含層。遺物は、赤焼系土器片1片を採取するにとどまったが、近隣の調査地では、濃厚な遺物包含層であることが確認されており、稀薄であるとの断定は避けたい。現地表下70～80cm、層厚11～20cmを測る。第7層…灰黄色シルト層。地山。上面において、第6層が埋土となるピット3基（SP-1～3）を検出した（図版23中・下）。（森岡・木南）

遺構 第1トレンチで大溝の連続部分（SD-1）が、第2トレンチでは、第7層上面においてピットなどの遺構が見いだされた。ただし、互いの関連はつかめなかった。（木南）

遺物 コンテナ1箱に満たない量が出土した。9点を図化し得たので、各々に若干の説明を加える。弥生土器・土師器・須恵器と陶磁器の類がみられる（第51図、図版56中段）。

1・2・3は、弥生土器の壺である。1は口縁部であり、外上方にのびる端部は強いヨコナデによって面取りされ、上方及び下方に跳ね上げ部がみられる。口径18.4cmを測り、広い幅の頸部は鋭く屈曲する。口縁部外面に口縁叩き出し手法により叩き込まれたやや粗いタタキメが残存し、消されていない。2は体部上半までの形態がよく判る資料である。緩やかに外反する口縁部は薄く仕上げられ、端部はやや丸みをもって終わる。外面の成形は粗いタタキであるが、磨滅により不明瞭。内面はヘラケズリを伴わず、ナデによって調整される。復元口径16.3cmを測る。3は底部残欠である。小さな平底を呈する。外面には粗いタタキ痕及び底面近くには指頭圧痕が残る。内面は粗い刷毛による回転ヨコハケ調整が施され、部分的ではあるが、クモの巣状になっている。4は、弥生土器の高杯の杯部。立ち上がりの下部は器壁が厚く垂直であるが、口縁部は強く外反する。器表の調整は剥落により不明瞭であるが、ナデによるものと思われる。推定口径19.2cm。これらはいずれも畿内V様式終末期に比定される。第1トレンチ出土の以上の資料は、大溝の形成時期を示すものである。

5は、須恵器杯蓋である。天井部を欠く細片であるが、やや扁平ぎみの器高の低い形状を呈し、器壁は非常に薄い。内面は粗雑なヨコナデ調整が施される。



第51図 月若遺跡第20地点出土遺物実測図 1/4

6以下は近世に入る遺物。6は、唐津焼皿である。内面及び外面の上部に鉄軸が施される。見込みは胎土目痕が4ヶ所認められ、高台は削り出しによるものである。露胎部分には油痕が残り、灯明皿として使用されたものと推定される。口径11.4cmの小型で、やや折れ口縁である。消費地の出土例を参考に、17世紀初頭のものと考えられる。7・8は肥前磁器である。7は染付碗で、口縁部外面には簡略化された雨降り文が巡る。呉須の発色は悪く、器表に鉄分の斑点が浮き出る。復元口径は7.2cm、器高は3.6cmを測る。8とともに18世紀後半に比定される。8は染付皿で、器壁内面には扇に草花文、見込みにはコンニャク印判による五弁花文、外面には蛸唐草文、高台内には渦福銘が施される。呉須の発色は良く濃紺色を呈し、丁寧なつくりである。疊付は無軸で、口径13.1cm、高台径7.9cm、器高は3cmを測る。9は、土師質土器皿である。ロクロ成形で器壁は薄く小型である。糸切り底で、口径は推定6.4cm、底径は推定3.5cmになるものと思われる。18世紀後半を遡らない資料である。第2トレンチ出土の以上の資料は、第4・5層の堆積時期をある程度示唆している。(森岡・木南)

まとめ 概記のとおり、2ヶ所の確認トレンチ共に埋蔵文化財の包蔵が認められた。第1トレンチでは、大溝の連続部分の確認に焦点を絞ったが、ほぼ予測にしたがって大溝の変曲部を検出することができた。大溝の当初の肩は大きく削平を受けているが、残存する深さは30cmを測り、走向は南西→北東から北ないし北西へと大きく方向を変えている。溝内埋土はC層に須臾器を混じえるが、B層は畿内第V様式期→庄内式併行期に比定できる土器が単純出土し、これまで把握されている1・13・30の各地点の大溝出土土器の傾向と符合する。おそらく一連のものともみなして差つかえなからう。ただし、流路になる可能性も捨てきれず、遺跡内での動きはさらなる検討が必要である。

本地点における基本的層率は第2トレンチが参考となる。表土下50cm程から始まる第4層から表土

下1m弱の所に遺存するベース（第7層）までが遺物包含層で、第4層は近世、第5層は古墳時代～古代・中世、第6層は古墳時代初期とおよその見当をつけることができるが、裏付けの資料が何分僅少なため、定かなものではない。遺構遺存面は最低2面あるものと推定される。（森岡）

（3）第25地点の調査

調査動機 芦屋市月若町6番地に所在する本地点（第47図）では、平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災により、家屋が倒壊した。当該地（敷地面積191.22㎡）では、鉄骨造2階建共同住宅の再建が急がれ、地権者（天井寛治）から芦屋市教育委員会に埋蔵文化財包蔵の存否に関する照会があった。本市教育委員会では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である月若遺跡〔森岡編1993〕の中心地に位置することから、平成7年7月31日に確認調査を実施した（第52図、図版24）。



第52図 調査風景

確認調査は、敷地の北側、予定建築物の範囲内で、敷地北側から約1.3m、東側から約3.8mの地点を北東隅とするトレンチを1ヶ所設定し（規模1m×3.5m）、重機によって遺物包含層が濃厚となった第11層までを掘削・排土し、以下を人力によって試掘した（第53図、図版25上・中）。また、第11層より上層については、包含される遺物の内容を把握するため、トレンチの北東側に隣接して西へ約70cm、南へ約90cm試掘坑を拡張し、層位ごとに遺物を取り上げた。人力掘削によって現地表下約1mの深度に地山を確認した上で、土層断面実測図（縮尺1/20）を作成し、写真撮影を行った。試掘調査は、同日の夕刻には完了した。

その結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのプライマリーな遺物包含層（第11・12層）、流水に伴う二次堆積層（第6～9層）など、現地表下約25cm以下に複数の遺物包含層から成る堆積の諸段階を確認した。また、第13層は地山と考えられた（図版25下）。

新築計画によれば、建築予定地全域に及ぶ布基礎埋め込みのための掘削深度は、現地表下60～75cmであり、遺物包含層・遺構の損壊は不可避と判断された。したがって建築予定地内を工事損壊深度まで全面発掘の対象とし、本調査を実施した。

なお、文化財保護法第98条の2第1項に基づく文化庁長官宛の発掘調査通知書の提出は、平成7年9月1日付、芦教社文第114号により所定の手続を行った。（森岡・木南）

調査の方法と経過 発掘調査は、建築工事着手期限が9月末を最下限とするため、緊急を要することとなったので、第3層（水田床土）までを重機によって排土し、以下を人力によって掘削した。また、掘削の際は、調査区外への残土処理が不可能であったため、調査区を2分割し、一方を発掘調査する間、もう一方に残土を据え置き、掘削深度到達後反転した。

調査区の設定は、工事計画における基礎地業の掘削深度に応じて、A区・B区と呼称したため、それに準じた。調査区は、建築予定地西半をA区（掘削深度G.L.－60cm、面積31㎡）、東半をB区（掘



第53図 調査区配置図 1/200

削深度G.L.-75cm、面積48㎡)とした(第53図図版26)。なお、標高については、震災による水準測量値の影響を考慮し、換算等は行わず、施工時の基準としているマンホール上面高(G.L.±0)を基準とした。

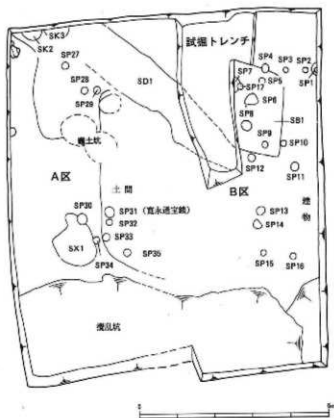
発掘調査は、森岡秀人・木南アツ子を担当者として平成7年9月4日から開始し、同月18日までの間実施した。実働日数は9日である。

9月4日、晴れ。施工責任者との打合せ及び器材搬入後、当初の計画ではA区から重機掘削の予定であったが、西側壁材の補強のため、急速B区の重機掘削に変更し、行った。第3層までの除去の際、第5層の上部を損壊。結局第5層を人力によって遺物の収集及び掘削することとなる。礎石(墨書銘入り「七」の番付、石工名あり)を検出。9月5日、晴れ。B区東半第7層上面において柱痕及び住居址・流路などを検出(本来であれば、柱痕は第5層において検出されるはずであったが、前日の重機掘削のため不能となった)。北壁土層断面図(縮尺1/20)を作成。9月6日、晴れのち曇り。平板測量図(縮尺1/30)作成後、柱痕・住居址の掘削を開

始。B区西半については、第5層直下は第11層であり、北西から南東にのびる流路1が露呈する。9月7日、曇りのち雨。住居址SB1の覆土中に包含される遺物の採取作業を行いつつ、さらに掘削を進める。B区平板実測図(縮尺1/50)を作成、雨で中断。9月11日、曇り。住居址床面まで掘削し、柱痕及び古式土師器が埋没するSK1を検出。9月12日、住居址SB1の平面図(縮尺1/20)作成後、掘削を行う。また、流路SD1の掘削を終え、写真撮影は翌日早朝に持ち越された。

9月13日、晴れ。B区の写真撮影を行い、埋め戻す。A区の重機掘削に入る。その後人力によって第5層上面精査及び近世から近代にかけての第1遺構面の遺構検出を行った。土間・半地下式竈・灰集積遺構・流路SD1などがみつかると。9月14日、曇りのち雨。A区平板図作成後、遺構の掘削・平面図作成となったが、正午からの降水により調査続行を断念。9月18日、晴れ。竈(SX1)のA地区半地下式竈断面図(縮尺1/10)作成、A区北壁土層断面図作成、流路SD1の掘削を経て、写真撮影を行い、器材搬出後、調査完了に至った。(森岡・木南)

基本土層 基本層序は、地山の上に弥生時代後期から古墳時代にかけて存続する数枚の遺物包含層、水田床土・水田耕土・現表土が堆積する。詳細は最上層を第1層として順を追ひ、以下に所見などを



第54図 遺構配置図 1/100

記述する(第55図)。

第1層…現表土。客土・壁土など
が含まれる瓦礫層。層厚
10～45cm前後を測る。

第2層…暗灰黄色粘性砂質土層。
水田耕土。トレンチ分層
区において、長さ約50cm
以下の底石を検出。層厚
16～20cmを測る。

第3層…黄褐色粘土ブロック混じ
り粘質土層。水田床土。
現表土下約30cm。層厚3
～15cmを測る。

第4層…暗黄茶色粘質土層。遺構
内埋土。現表土下約40cm。
層厚5～20cmを測る。

第5層…茶褐色粘性砂質土層。遺
物包含層。第4層とほぼ
同レベルに遺存し、第3
層や第4層はじめ近世・
近代遺構のベースとなる。
層厚14cm前後を測る。

第6層…暗黄茶色粘性砂質土層。遺物包含層。第5層より炭化物は乏しいが、同一層位の可能性がある。現表土下約40cm。層厚12～30cmを測る。

第7層…黒褐色砂礫混じり粘性砂質土層。第11層に起源する有機質土を混成し、全体に1～2cmの小礫を含む。流水に伴う層であり、トレンチ内において北から南方向へ緩傾斜して堆積する。層厚15cm前後を測る。

第8層…暗黄茶色礫混じり砂質土層。第7層ほど粗砂ではないが、やはり流水に伴うものである。現表土下60～80cm。第7層同様、南方向へ緩傾斜する。層厚10～20cmを測る。

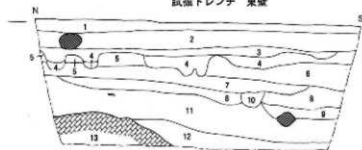
第9層…茶灰色シルト質粘性砂質土層。現表土下約90cm。層厚10cm前後を測る。しまりはいいが、第5層などと比べ遺物量は少ない。

第10層…暗茶褐色砂混じり粘性砂質土層。ピット状の遺構埋土。現表土下約70cm。深さ約12cm。

第11層…暗茶褐色粘性砂質土層。濃厚な遺物包含層。庄内式併行期の遺物を多量に包含するが、布留式土器片も若干含まれる。現表土下60～100cm。層厚25～40cmと厚い。

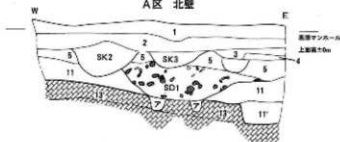
第12層…暗灰茶色砂質土層。遺物包含層。現表土下100～125cm。層厚25cmまで確認したが、分厚く、

試掘トレンチ 東壁



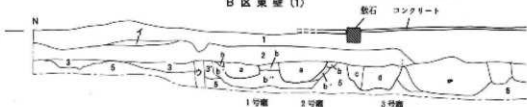
- 基準マンホール
上部高2m
- 第1層 現表土 (五層層・客土)
 - 第2層 暗灰色粘性砂質土層 (水田層土)
 - 第3層 黄褐色粘土ブロック混じり粘質土層
 - 第3層 (3層に5層を起源とする土質を混える)
 - 第4層 暗褐色粘質土層
 - 第5層 赤褐色粘性砂質土層
 - 第6層 暗赤褐色粘性砂質土層
 - 第7層 黄褐色砂礫混じり粘性砂質土層
 - 第8層 暗赤褐色礫混じり砂質土層
 - 第9層 赤灰色シルト質粘性砂質土層
 - 第10層 暗赤褐色砂混じり粘性砂質土層
 - 第11層 暗赤褐色粘質土層
 - 第12層 暗赤褐色砂質土層
 - 第13層 暗黄色粘砂質土層 (地山)
 - 第13層 (13層より砂質味強い)

A区 北壁

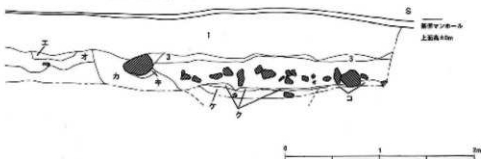


- 基準マンホール
上部高2m
- ア層 暗灰色粘土ブロック混じり粘土
 - イ層 淡灰色粘土ブロック混じり灰赤褐色粘質土層
 - ウ層 淡赤褐色礫混じり砂質土層
 - エ層 淡赤褐色粘土
 - オ層 淡黄色粘土ブロック混じり粘土
 - カ層 淡黄色粘土ブロック混じり灰赤褐色粘質土層
 - キ層 淡灰色シルト質粘性砂質土層
 - ク層 淡黄色小礫混じり粘土 (ブロックに入る)
 - ケ層 黄白色礫混じり粘砂層
 - コ層 淡赤褐色シルト粘質土層
 - カ層 黄褐色小礫混じり粘質土層
 - シ層 黄褐色 (明赤褐色) 礫化層 (礫)
 - シ層 淡赤褐色礫化層 (礫)
 - セ層 暗赤褐色礫化層 (礫)
 - ソ層 暗赤褐色砂質土層
 - タ層 淡赤褐色粘質土層

B区 東壁 (1)



B区 東壁 (2)



第55図 土層断面実測図 1/40

検出面以下に及ぶものと思われる。

第13層…暗黄色細砂質土層。地山。現表土下約100cmの深度でその上面を確認。遺物は含まない。
基本層序の特徴は以上のとおりである。 (森岡・木南)

遺構 本地点においてまとまって確認された遺構は、第5層上面においてであった。内訳は近世以降の生活面(①)、第7層における古墳時代以降の生活面(②)、第11層における古墳時代以前の遺構面(③)、第13層における弥生時代後期の遺構面(④)の計4枚である。このうち、第13層については、試掘トレンチ内において確認したものであり、第13層(地山)に切り込む第12層(遺構内埋土)が検出されたが、発掘調査では第13層の深度まで至らなかったため、全容は明らかでない。以下①～④の項目を立て、報告することとする(第54図)。

①近世以降の生活面 第5層上面において確認されたのは、礎石・柱痕・土間等の建築遺構や竈などによって構成される居住空間である。B区東半において検出された柱痕から考察すると、建物の規模は南北約4.9m(2.5間)を測り、東方向に展開して調査区外へと広がる。また、A区では南北約4m(2間)から東へ広がる土間を検出したが、B区の建物から連続する柱痕が無く、別棟の可能性が高い。土間にもやはり、いくつかの柱痕が検出されたが、中には、寛永通宝銭2枚が出土したものもあり(SP31)、地鎮的要素を示唆するものと考えられる(図版28、2段目)。

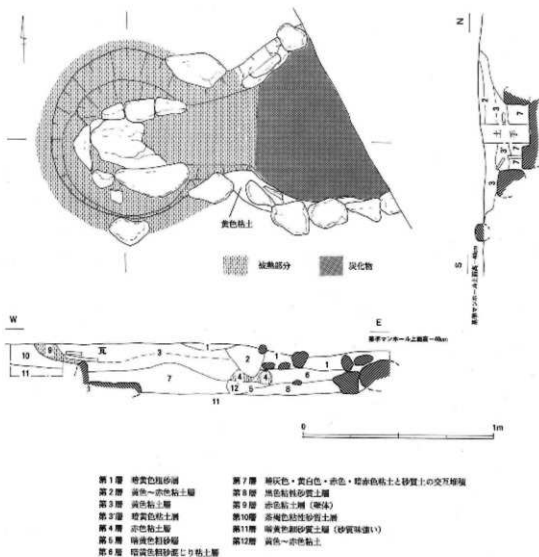
礎石は、重機掘削時に搬出したものの中に、墨書を銘記したものがあり、平坦面に「+」字状の線と「七」の番号が付されていた。縦64cm、横36cm、厚さ21cmの花崗岩を石材としており、他の無銘の礎石も同様の大きさの石材である。

竈は、B区東壁において確認された近代の竈と、A区の土間付近で確認した近世竈の2基である。前者(第55図3段目)は、B区東壁の中央よりやや北側で検出した竈で、3基の燃焼室が一セットとなって連なったもので、全長約2m、残存高0.29mを測り、レンガ片が共存したため、近代の竈と想定される。後者(第56図)は、A区土間の西端中央より北で検出したものであり(図版26上)、半地下式で、石組みの燃焼室と作業室が設けられ、焚口は土間側に位置する。燃焼室は、径1.1mの平面円形を呈し、残存の深さは0.26mを測る。人頭大の花崗岩が周縁に配されており、その表面は赤色に変色する。燃焼室内には、崩落石材とともに壁を構築していたと考えられる黄色及び赤色粘土と棧瓦片が埋まっていた。中央下部は、多量の炭化物を除去すると、「凹」字状の灰落し部分があり、13～39cmの花崗岩が石組み枠として用いられる。また、灰落しの基底部にも、上面が平らな自然石を使用していた。灰落しから作業室へは、幅約25cmの掻き出し溝となるが、ここにも多量の炭化物が認められた。作業室は、燃焼室同様、人頭大からやや小さめの石材及び黄色粘土を用いて壁を構成する。特に、燃焼室との境界は、粘土を瓦片によって内側に突出・拡張する。検出した限りでは、楕円形プランを呈し、幅1.1m、深さ0.2mである。構造物からみて、B区竈より古い年代の近世の竈と考えられる。また、A区竈から南へ約2mの位置に灰を集積したと考えられる灰溜り土坑(SX1)を検出した。両者はともに土間の西端にあり、有機的関係をもつかもしれない。(森岡・木南)

②古墳時代以降の生活面 試掘トレンチの北東隅より南へ約1mの地点で第7層を垂直に切り込む第7'層を確認し、さらにB区東半への広がりが認められ、住居址覆土と想定した。住居址覆土は、

第7層に近似するものの、小礫を多く含まない黒褐色粘性砂質土層が堆積する。平面では北東・南東隅がやや丸い方形プランを呈し、堅穴住居址とみられる。東辺の長さ約2m、堅穴の深さは10~22cmを測る。周溝及びベッド状遺構などは認められなかったが、床面に柱痕と布留式土器・甕片(第63図71)を含む土坑(SK1)が検出された。土坑は、長径38cm、短径31cmの不整な楕円形で、深さ10~12cmを測る(図版28上段)。(森岡・木南)

③古墳時代以前の遺構面 第11層上面において流路が検出された(第59図)。SD1と呼称する。流路は、調査区北西隅約1.1m東の地点から南東方向への下りの勾配をみせ、試掘トレンチ東壁北端から約3.5~4mの地点まで確認した。検出長3.2~4.3mの直線溝を呈し、幅は0.9~1.4mを測る。横



第56図 A区竈遺構平面・断面実測図 1/20

断面は両縁が浅く深さ5cm程度で、中央部は40cm程度と深くなる(第55図2段目)。共に遺物を多量に含んだ拳大以下の円礫によって構成され、暗茶褐色粘性砂質土が堆積する(図版28)。試掘トレンチを境に、B区東半では、第5層と第11層間に第8・9層の流水堆積土の遺存が認められているが、それらの堆積は、流路の上部及び第11層上面を侵食しているようであり、流路の底部は認められなかった。以下、遺構の詳細について、記述する。(森岡・木南)

ビット列 B区東半第7層上面にて検出したが、おそらく上層からのものと思われる。建物に伴うものと推定され、南北2.5間の規模を測る(第53図)。東へは2間分以上が確認され、調査区外に広がるようである。ビット各々の直径は20~23cmと14cm程度の2種に分けられる。埋土は黄茶色もしくは黄灰色粘性砂質土である(第54図)。(木南)

東壁内竈 B区東壁土層断面にて検出した3連1房式の竈である。上部は水田耕土(第2層)が乗る面で削平されており、地下部分のみ残存する。幅約2mの規模に復元されるが、南端の竈は損壊が著しい。断面半円形の竈窯体内には、微量の灰・焼土を混じえる第3層が陥入する。窯壁・窯床部は赤色に酸化しているが、とくに粘質土によって構築された窯壁(b層)は被熱が著しい。(木南)

半地下式竈 A区中央より北側にて検出した。直径100cm前後の範囲が被熱する燃焼室と、直径110cm程の作業室に分けられるが、相互に接続しており、「8」の字形のプランを呈する。拳大~人頭大強の花崗岩円礫を主体とし、平瓦を混じえて壁を構築する。窯床(灰落し)部分はすべて花崗岩で「コ」の字状に囲み、その基底は平坦な石を1枚敷く。燃焼室と作業室の境には柱石が置かれたか否かは不明である。作業室床部には炭化物が多量に集積していた(第56図、図版28)。(森岡・木南)

土間 A区東半にて検出した。B区のビット列よりやや南にずれるが、南北方向の軸線は平行している(第53・54図)。(木南)

SB1 試掘トレンチ東側にて検出した(図版27・28)。1辺(東辺)約2.05mの隅丸方形プランを呈する。第7層をベースに垂直に掘り込まれ、ベースからの深さは7~25cmを測る。床面にはビット数基と土器片(第63図71)を含む土坑1基(SK1)を確認した(第57・58図)。(森岡・木南)

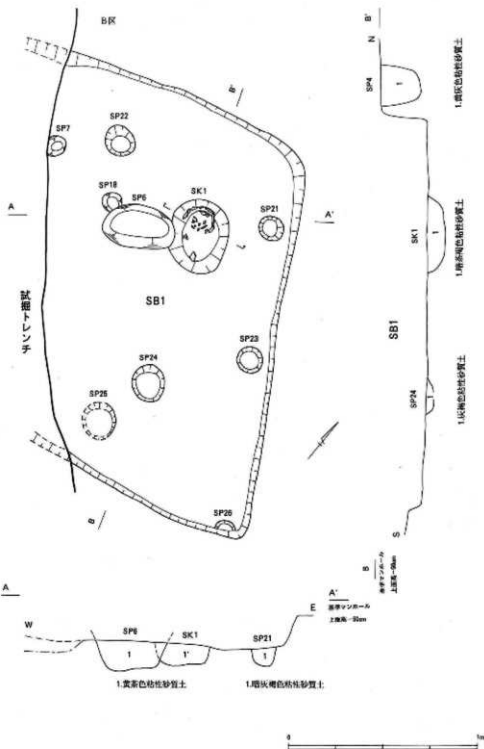
SK1 楕円形プランを呈し、長径40cm、深さ14cmを測る(図版28上段)。薄作りの古式土師器壺(第63図71)を埋納するが、土器の詳細はマンガ・鉄分等の吸着により不明である。土器の出土状態から、柱穴以外の用途が考えられる(第58図)。(森岡・木南)

SD1 第11層をベースに、北西から南東へと走行する流路である(第59図)。幅1.5mを測り、人頭大以下の花崗岩円礫とともに須恵器・土師器を中心とする遺物を多量に包含する。(森岡・木南)

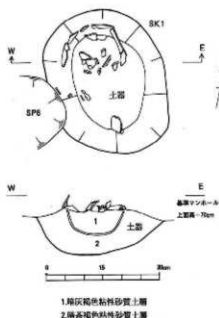
遺物 遺物については、確認調査出土分と本調査出土分とに分けて以下、報告する。

①確認調査出土遺物 確認調査で出土した遺物の総量は、コンテナ約1箱分である。遺物は、細片が比較的多く、初期土師器(庄内式を中心に、畿内第V様式系・布留式を含む)・須恵器・土師器・瓦器・近世陶磁器・棧瓦などが認められる。そのうち、19点を図化し得たので、以下に説明を加える。なお、各々の出土層位については、第60図の出土遺物実測図(縮尺1/4)内に一括掲載する。

1~7はV様式系を含む古式土師器の赤焼系の土器である。1は、畿内第V様式終末頃の広口壺の口頸部片である。体部上半との境は弱く、肩はなだらかで、口頸部全体が緩やかに外反し、口端は平

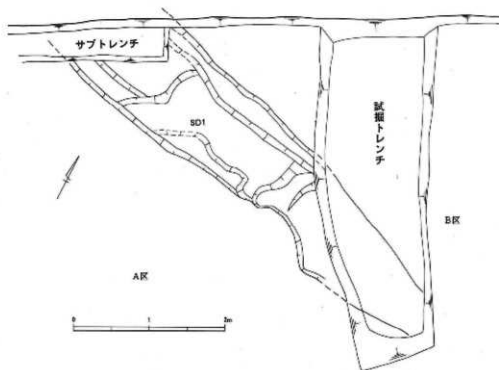


第57図 SB1平面・断面実測図 1/20



第58図 SK1平面・断面実測図 1/10

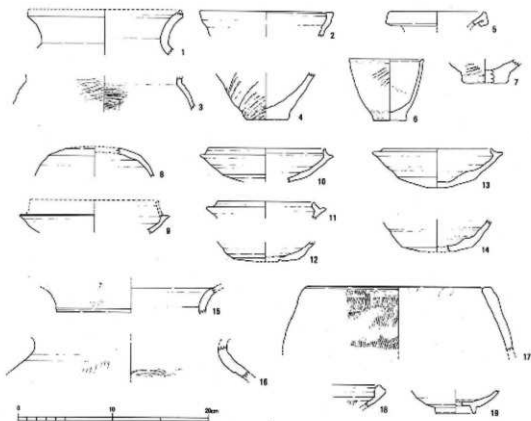
滑な端面を有する。推定口径16.4cmを測る。2は、布留式壺である。口頸部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部付近は垂直となる。口縁部の端面は周縁および上面を強いヨコナデによって平坦に仕上げ、内面が肥厚する。胎土は1mm以下の長石・雲母などが若干含まれるが、精緻であり、暗褐色を呈する。口縁端部の仕上げの特徴から、布留式期の中でも、古相を示すものとみてよい。3・4・7は、V様式期から庄内式期に比定される壺である。3は、頸部への移行を示す体部上半（肩部）の破片である。頸胴の接合部は屈曲し、やや直立ぎみに外反する口頸部が付されるものと思われる。外面にはやや粗めのタタキ痕が、内面には粗いヨコハケ調整痕が明瞭に残る。4・7は、底部である。4・7ともに厚い平底を呈し、外面には底部周縁から粗いタタキ痕が認められる。7の底面には木葉痕がみられる。7は器表近くが褐色の焼き上がりである。5は、やや小振りの器台の口縁部である。受部はやや外反しながら外上方にのび、口縁端部は折り曲



第59図 SD1平面実測図 1/50

げ技法により厚い端面を形成するように巻き折り込まれる。推定口径10cmを測る。純然としたV様式タイプの器台とは考え難く、V様式最末期から庄内式併行期に比定されよう。6は、推定口径7.8cm、器高6.5cm、底径3.5cmを測る小型の鉢である。逆円錐台形を呈し、器体に比べ大きめの平底を有する。V様式の系譜をたどるものであるが、口縁端部の調整テクニックをはじめ細部の技法から庄内式併行期のものと考えられる。

8～16は須恵器である。8は杯蓋、9～13は杯身である。9には内傾する立ち上がりが見えながら認められ、比較的高くならとみてよい。10・11・13は、短い立ち上がりを有する点で共通し、口縁端部はいずれも丸く収められる。12は、底部である。へら切り未調整であり、底・体部との境はやや角張る。8は中村編年のⅡ-3段階、9はⅡ-1段階、10・11・13はⅡ-4・5段階に比定し得、12は最も後出で、Ⅲ-1段階まで下るものであろう。14は、短頸壺の底部とみられる。底部はやや厚めに



遺物出土層位

第2層……18

第6層……17

第7層……9・14

第9層……15

第11層……1・2・3・4

第12層……5・6

竊穴層附属土……7・8・10・11・12・15・16・19

第60図 月若遺跡第25地点出土遺物実測図(1)〔確認調査分〕 1/4

丸く仕上げられるものであり、へら切り未調整となっている。Ⅲ型式段階に入るものであろう。15・16は、甕である。15は、頸部であり、頸肩部の屈曲点近くにおいて1条の凹線が巡る。内外面ともに回転ヨコナデによる調整であるが、外面には成形下地段階に加わったタタキ痕が認められる。16は、肩部の断片であり、内面には同心円状の当て具痕、外面には弱いカキメによって磨り消された不明瞭な平行タタキ痕が残る。15・16ともに中村編年のⅢ型式に属するものであろう。

17は、土師器甕形土器である。厚みを増す口縁部は内傾し、端部は丸いつくりをなす。外面には粘土帯の接合残痕が認められ、縦方向のハケメ調整が施される。外端部はへら切りによって面取り風に整形される。内面には弱い指圧調整がなされる。推定口径18.4cmを測る大きさで、筒状の胴部の前面をへらで切り取って焚口をつくり出し、曲げ底を取り付ける形態の移動式甕であろう。色調は外面淡橙色、内面淡黄色を呈し、胎土は比較的精良である。

陶器18は、丹波焼播鉢である。口縁端部は上方に丸く拡張ぎみであり、その形態・製作手法から長谷川編年ⅡA2類に属する。内外面淡緑茶色を呈する。19は、唐津焼碗である。内面は刷毛による斑文が配され、見込みは蛇の目状に釉剥ぎされる。18世紀代に比定されよう。

遺物の包含状況は、第11層と第12層が須恵器を全く含まない点で共通し、伴出関係も良好であったことが特筆される。第12層では庄内式期を中心とする年代の遺物の中に、V様式後半の遺物が包含されることに対し（第60図5・6）、第11層ではやはり庄内式期を中心としながらも、V様式系の遺物は減少し、かわって後出の布留式期の遺物が包含される。したがって、月若遺跡の既往の調査により明らかにされている第1段階ピーク期（弥生時代後期～古墳時代前期）をある程度層位的変遷をもって示しており、堅久住居や溝・土坑などの遺構を伴う可能性も高からう。なお、第7層出土の遺物については、付近一帯の遺物包含層同様、暗茶褐色を呈した層からの出土であり、須恵器などその量も多いが、当調査地点より高所からの流出包含層であって、必ずしもプライマリーなものとは言い難い。

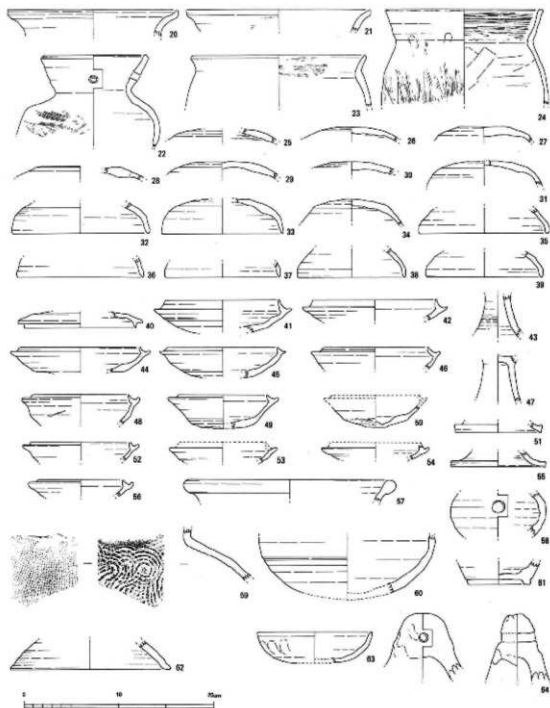
この他、第3・4・5・6・9層についても遺物を含んでおり、上層包含層全体の厚みは73cm以上を測る。なお、第13層に縄文時代遺物を包含する可能性はあるが、当地点では確認できなかった。

当該地点南側に位置する第2地点において出土が顕著であった初期伊万里やくらわんか手の染付磁器碗については、該当する年代の資料は認められるけれど、ごく少数でしかも細片であったことを付け加えておきたい。

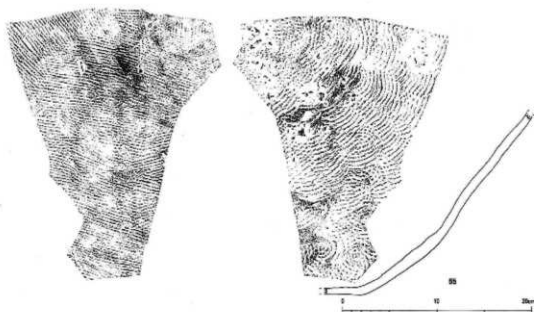
（森岡・木南）

②発掘調査出土遺物 発掘調査において出土した遺物の総量は、コンテナ約2箱分であり、その大半が流路からの出土である。須恵器を中心に、弥生土器・古式土器・土師器・近世陶磁器のほか、蛸壺や古銭もみられる。新たに79点の遺物実測図を遺構・層位ごとに掲載し、若干の説明を加える。

SD1 弥生土器・古式土器・須恵器・土師器・蛸壺などを含む（第61・62図）。流路内堆積土の上部と最深部とでは、出土遺物の様相の変化がなく、新しい遺物（下限相）では、7世紀代の遺物がまとまって出土しており、遺構の埋没年代を示唆するようである。遺物の遺存度については、22や65のように比較的大きな破片も含まれるが、ほとんどはローリングを受けた細片である。22は、庄内式併行期に属する直口壺である。やや内湾ぎみに外上方にのびる口頸部には、2ヶ所の穿孔が認められる。端部は面を成すが、内上方に向けやや突出ぎみに仕上げられ、端面には浅い縦凹線が一条施さ



第61图 月若湾第25地点出土文物实测图·拓影(2) 1/4



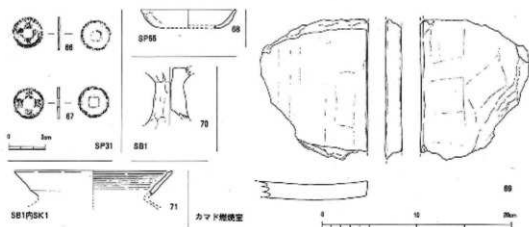
第62図 月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影(3) 1/4

れる。口径10.8cmを測る。体部外面は横・斜め方向にハケメを伴うが、その他の部位は、ナデによって調整される。色調は淡黄褐色で、胎土中に若干の細砂粒を含む。20・21・23は、外反する口縁を有する甕である。20は、端部内面側に強いヨコナデが施され、端部上方へのつまみ上げが著しい。21・23は、端部がヨコナデによりそれぞれ面を成すようである。23は、口縁部内面に横方向のハケメが認められる。復元口径はそれぞれ、17.8cm・19.5cm・18.4cmを測り、23を除き、庄内式併行期に収まるものと思われる。

24は、土師器甕である。内湾する口縁は端部が平坦で、復元口径は17.0cmを測る。かろうじて体部が復元できる破片を伴う。口頸部内面は横方向の細かなハケ調整、体部外面は縦方向のハケ調整が加えられ、体部の内面は器壁を薄く削っている。頸部くびれは著しくないものの、布留式甕の遺制をとどめる長胴甕で、5世紀後半～6世紀前半に下るものと思われる。

25～40は、須恵器杯蓋を一括した。ただし、37については短頸蓋の蓋の可能性がある。杯蓋は、中村編年Ⅱ～5段階に含まれるような、口径がやや小さめで器高が低く扁平なもの(32・33)や、さらに小型化の進んでいるⅡ～6段階のもの(38・39)、細片のため、傾きが不明確ではあるが、内面のカエリが下方で接地する中村編年Ⅲ～1段階に比定されるもの(40)などがみられる。40は長頸蓋の蓋になるかもしれない。28は天井部の復元からみて、6世紀中葉前後まで上るもののようである。

41・42・44～46・48～50・52～54・56は、須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりがかなり短く、法量も小振りのものが目立つ。中村編年Ⅱ～5段階、もしくはⅡ～6段階に収まるものである。43・47は、須恵器高杯の脚柱部である。43は透かし窓を伴うようで、ヘラ切りが認められるが、詳細は不明。おそらく長脚2段になるものと思われる。51・55は、須恵器高杯の脚裾部である。51は裾端部が



第63図 月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影(4) 1/3・1/4

上方へと拡張される。これらは、中村編年のⅡ-6段階前後のものであろう。

57・59・65は、須恵器甕である。57は口縁端部を丸く仕上げており、復元口径21.2cmを測る。59・65は体部片である。2点共に内面には青海波状の同心円当て具痕がみられ、外面は59が平行タタキのちカキメ調整。65は横及び斜め方向の平行タタキが加えられるが、若干磨り消しきみである。58は、須恵器甕である。やや扁平な体部には特に加飾も認められない。

60は、短頸壺もしくは鉢の体部と思われる。球形の体部を呈し、下半部に1条の凹線が巡らされる。61・62は、台付長頸壺や台付鉢などの脚台部と思われる。62はふんばり形の脚台が「ハ」の字形に開き、端面が接地する。脚台の復元径は16.8cmを測る。63は、土師器杯とみられる。半球形の丸い体部を有し、口縁端部にはヨコナデが加わる。復元口径12cmを測り、淡灰橙色を呈する。外面は淡赤色がかかる部分がみられ、丹彩が施されていたようである。7世紀前半のものか。

64は、土師質竈壺である。上部には、孔径1cmの貫通孔を伴う。ナデ・指頭圧によって成形される。5〜6世紀のものであろう。全高15cm弱ぐらいの大きさのものとみられる。

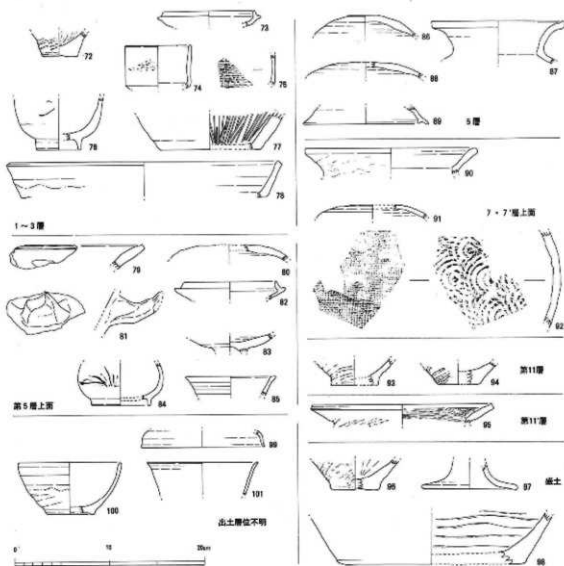
SP31 既述のとおり、地鎮具として用いられたと想定される古銭である。銹化が著しく、文字部分などかなり不明瞭であるが、「寛永通宝」と思われる(第63図66・67、図版59下)。

SP55 68は、口径9.9cmの土師質土器皿である。ナデにより、薄く仕上げられており、褐白色を呈する。胎土は精良。近世に下るものであろう(第63図、図版58上)。

SX1 竈燃焼室の壁体を構築する平瓦の1枚を実測・掲載した。表面は銀化している部分もみられ、近世の中でも比較的新しいものと想定される。平瓦は、完形品が認められず、掲載瓦のような一部を欠落したもののみが出土している(第63図69、図版58上)。

SB1 70は、堅穴住居内覆土中より出土した小型器台。脚柱部片である。脚柱部から裾部へは屈曲せず、なだらかに開くものと思われる。庄内式期の資料とみられる(第63図、図版58上)。

SK1 71は、遺構図に掲げた甕と同一個体とみられる。内湾きみの口縁部は、内面に横方向のハケによって調整される。器壁は非常に薄く仕上げられ、口縁端部は内方へ肥厚し、端面はやや内傾す



第64図 月若遺跡第25地点出土遺物実測図・拓影 (5) 1/4

る。復元口径16.6cmを測る。ややイレギュラーな布留式甕の口縁部片で、布留式(中)相段階のものと思われる。4世紀に比定でき、竪穴住居跡の時期を知る手懸かりをなす(第63図、図版58上)。

第1～3層 近世・近代遺物が包含遺物の大半を占める。72は、畿内第V様式系の甕底部である。小さな平底を呈し、底部ぎりぎりまで平行タキが及ぶ。73は、須恵器杯身である。短い立ち上がり有し、器高は扁平かつ口径も9.6cmと小さい。中村編年Ⅱ～6段階に比定し得る。74・76は、肥前磁器染付碗である。74は、コンニャク印判により施文される。口径7cmの筒型碗である。76は、草花文が施されるくらわんか茶碗である。75は、産地不明の陶器である。外面は灰釉、内面は鉄釉が施される。外面には、とびがんな筆が施される。77は、堺・明石系の播鉢で、外面は赤褐色を呈する。底

部にはハナレ砂が認められる。78は、土師質土器埴塔である。細片につき、傾きについては不確定であるが、直線的な体部をもち、外面はナデによって調整されるものと思われる。煤の付着が著しい。難波分類D類の諸特徴を備えており、同類に属している(第64図、図版58上)。

第5層上面 若干の近世遺物が含まれるが、混入の可能性も考えられる。79は、直線的に外傾する口縁を有する甕である。端部は面を成し、内面側には強いナデによって凹線が巡る。奈良時代前後のものであろうか。81は、土師器甕などの把手である。84は、肥前磁器染付甕である。内面は無釉で、外面には呉須によって草花文が配される。85は、備前焼小型鉢である(第64図、図版58上)。

第5層 87は、庄内式併行期の広口甕である。外弯する口頸部をもち、器面調整はナデによる。復元口径14.0cmを測り、淡黄褐色を呈する。86~89は、須恵器杯甕である(第64図、図版58)。

第7・7'層上面 90は、甕である。外反する口縁部は外面を横方向のハケ、内面をナデによって調整され、端部は丸い。復元口径18cmを測る。91は、須恵器杯身の天井部である。つくりは薄い。92は、須恵器甕等の体部片である。外面に平行タタキのちカキメが認められ、自然釉が付着する。内面は同心円状の当て具痕が認められる(第64図、図版58下)。

第11層 93・94は、72同様の第V様式系甕の底部である。叩き成形が施される(第64図)。

第11'層 95は、庄内式併行期の甕の口縁部で、端部は若干つまみ上げられる。口縁部内面のハケメは密に加わり、頸部外面には細かいタタキが残存する(第64図、図版58下)。

盛土 96は、内面に縦方向のヘラナデが加わり、底部に木葉痕が認められる。97は、非常に薄作りの高杯裾部である。なだらかに開き、淡橙黄色を呈する。布留式期に入るものか。98は、大谷焼甕の底部である。内面はハケによって化粧がけされる。断面は明橙色を呈する(第64図、図版58下)。

出土層位不明 99は、須恵器短頸甕の蓋である。口縁端部はやや外方へとのび、口径12.8cmを測る。100は、唐津焼灰釉陶器碗である。101は、陶器端反り碗で、白色釉が施されており、瀬戸産太白焼とも考えられる(第64図、図版58下)。

(森岡・木南)

まとめ 今回確認調査を実施した地点は、南接する第2地点の発掘調査結果を基礎として、比較的深部に近世段階の遺構面を想定したが、それとは裏腹に、月若遺跡でも古い時代の3~4世紀の遺物包含層が良好に遺存する事実を確認した。

これは、本地点が芦屋川扇状地を基盤となす旧地形の急激な高まり部分に該当するものであり、換言すれば、そうした高まり部分の端近くを路線とした阪急電鉄の走行位置が当地点の北側に位置することを見合うものである。

出土遺物を検討した結果、純粋な時期幅をもつ包含層として第11・12層の存在が指摘でき、資料の示す年代は3世紀初頭~末頃とみて大過ない。第11層からは確実に布留式土器が伴出する。また、6~7世紀代の遺物を中心とする二次堆積包含層や遺構なども遺存しており(第6・7・9層)、これらは月若遺跡西半域の全体的傾向と合致する。ただし、想定していた近世期の遺構面は阪急電鉄の開設に伴う土地造成により大きく削平されたものと思われる。

確認調査の結果、当地点では現地地表下25cmから始まる数層の遺物包含層が存在し、旧家屋による大きな攪乱などもないようである。当該地の建築計画は、工事施工部分88㎡全体が現地地表下40cm全面掘

りを行ったのち、布基礎を埋め込む予定となっており、包含層全体の削除が避けられないため、損壊部分の発掘調査が必要と考えられた。

設計・施工関係者と現地で協議をした結果、工事着手の限界が9月末日であり、それまでに事前調査を実施しなければならないが、県教育委員会復興調査班の支援については、調査経費（国庫補助金）の補正時期、支出負担行為時期とも絡み、無理と判断されたため、市教育委員会の方で本調査も継続実施することとした。

本調査の成果は、確認調査の結果とやや齟齬をきたす部分もあったが、古墳時代前期の堅穴住居跡1棟と古墳時代後期～飛鳥時代の流路1条を検出した。また、その下には弥生時代終末期頃の遺構面が遺存することもつきとめられた。7世紀代に芦屋川扇状地面が洪水など地形変化を伴う流水を受けたとみてよい。

上層遺構では、近世の建物跡が検出され、特に近世竈1基の全掘データを増やすことができた。月若遺跡ではこの種生産関係の遺構も編年的考察が必要である。（森岡）

（4）第28地点の調査

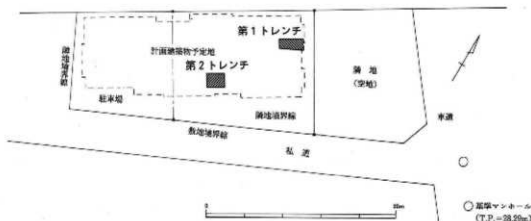
調査動機 兵庫県芦屋市西芦屋町1番地3及び1番地6に所在する当該地（敷地面積302.8㎡）では、阪神・淡路大震災により、敷地東半に存在した家屋が倒壊し、居宅の新築計画が急がれた（第47図）。その結果、現在、駐車場となっている敷地西半を含め、鉄筋コンクリート造1階建集合住宅が計画された。該当地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である月若遺跡の遺構密集部に所在することから、平成7年9月21日、地権者（五味博喜）より芦屋市教育委員会に、文化財保護法



第65図 調査風景

第57条の2第1項に基づく発掘届出書が提出された。当該計画によると、基礎埋め込み及び地盤改良のための掘削深度は現地表下約2mであり、本市教育委員会は、遺物包含層・遺構等の損壊は不可避免と判断して、本年度震災復興に伴う国庫補助事業の発掘調査を実施する方向での検討を進め、取りあえず土層の堆積状況・遺物包含層の濃淡などの協議に供し得る基礎資料入手のための確認調査を平成7年11月8日～9日に実施した（第65図、図版29）。（森岡・木南）

調査の方法と経過 試験段階、敷地西半（面積115.8㎡）がなお駐車場に供用されていたため、試掘トレンチは敷地東半（面積187㎡）内に2ヶ所設定した（第66図、図版29）。第1トレンチは、敷地境界北東隅の杭から南へ約3m、西へ約1.2mの地点を同トレンチ北東隅とし、2.6m×1mの範囲を掘削した。掘削はすべて重機で行い、現表土下約2.3mの深度に至った。第2トレンチは、敷地境界北側中央付近の杭から南へ約6.6m、東へ約3.5mの地点を同トレンチ北西隅とし、2m×1.5mの範囲を重機と人力によって掘削した。掘削は、第3層以上を重機で、以下第8層までの北壁沿いテストレンチを人力で掘削し、各層位ごとに遺物を分類・採取した。



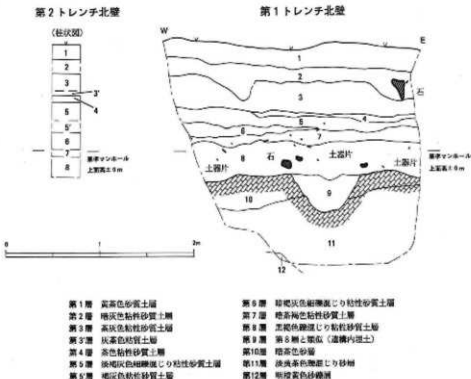
第66図 調査区配置図 1/400

調査第1日目に第1トレンチの土層断面実測図（縮尺1/10）を作成、同日中にこのトレンチの埋め戻しを行い、2日目に第2トレンチの土層断面柱状図を作成、夕刻にはこれを埋め戻して調査を完了した（第65図）。なお、確認調査は森岡・木南が担当した。（木南）

基本土層 基本層序は上層より、現表土（第1層）、現代盛土層（第2層）、水田耕土（第3・3'層）、水田床土（第4層）、遺物包含層（第5～8層）、遺構内埋土（第9層）、無遺物層（第10～12層）に弁別できることを確認した（図版30）。

なお、第1トレンチと第2トレンチの土層堆積状況は同じ様相を示し、レベルの差のみあったため、相互に層序の対応を図った。基本層序は次のとおりである（第67図）。

第1層…黄茶色砂質土層。現表土層。層厚14～27cmを測る。第2層…暗灰色粘性砂質土層。盛土層。瓦片・レンガ片・小礫を含む。層厚15～39cmを測る。第3層…茶灰色粘性砂質土層。水田耕土。近世以降の遺物を若干含む。第2トレンチにおいては、下部が第4層によって灰茶色に変色し、やや粘土質味を帯びる。層厚23～37cmを測る。第4層…茶色粘性砂質土層。水田床土。層厚10cm未満を測る。第5層…淡褐灰色細礫混じり粘性砂質土層。濃厚な遺物包含層であり、以下第7層までは土師器片・須恵器片、古代以降の瓦・中世遺物などの出土が認められる。第2トレンチにおいては、下部の色調が暗みを増す。層厚5～20cmを測る。第6層…暗褐灰色細礫混じり粘性砂質土層。遺物包含層。第5層と同質であるが、色調がやや暗い。層厚18cm未満を測る。第7層…暗茶褐色粘性砂質土層。濃厚な遺物包含層。層厚6～19cmを測る。第8層…黒褐色礫混じり粘性砂質土層。濃厚な遺物包含層。第1トレンチにおいては、マンガンの含浸が顕著。10cm以下の花崗岩片が散在する。層厚30～40cmを測る。第9層…遺構埋土。第8層と類似。坑底までの深度は、約40cmを測る。第10層…暗茶色砂層。無遺物層。第11層を起源土としながらも第8層に近似した変色をみせる。第11層と質的に類似。層厚7～38cmを測る。第11層…淡黄茶色礫混じり砂層。現表土下約150cmから始まり、検出面以下に及ぶ。最も厚い部分で80cmを測る。無遺物層。第12層…明橙黄色砂礫層。現表土下約215cmから、検出面以下



第67図 土層断面実測図・柱状図 1/40

に及ぶ。トレンチ内では上端部を確認するにとどまった。無遺物層と思われる。（木南）

遺構 重層度の高い包含層を検出した2ヶ所のトレンチの試掘結果を集約すると、確認された計4枚の遺物包含層（第5～8層）のうち、有機質の著しい第7層・第8層に至っては濃厚に遺物が包含され、その時期は古代～中世を主とするようである。第8層には第7層に含まれた瓦器・瓦質土器の類が認められず、古代に形成をみた可能性が高い。第5～7層の遺物包含層から出土する遺物内容は、古墳時代から中世にかけての時期幅をみる点で近似しており、各層位の時期的推移については詳らかにできなかった。

最終包含層と考えられる第8層を除去して検出した遺構埋土（第9層）については、断面において古式土師器と思われる赤焼系土器細片を観察したので、古墳時代前期に遡ることも十分考えられ、精査が望まれる（第67図，図版30）。（森岡・木南）

遺物 出土した遺物は、コンテナ1箱程度。図化可能な資料11点を選んで実測し、類別を加えた。須恵器1～5・土師器8～10・磁器11の破片と瓦片6・7がみられる（第68図，図版60上）。

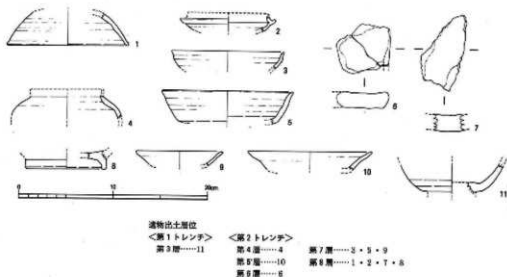
1は、須恵器杯蓋である。やや外向する口縁端部は薄く仕上げられる。内面には火罨状の痕跡をみ、外面は自然釉を被る。推定口径13cm、器高は4cm近くなるものと思われる。2・3・5は、杯身である。2は短く弯曲しながら内傾する立ち上がり有する杯身で、復元口径は8.6cm前後の小型品で、残存器高も1.8cmと浅い。3は薄く外反ぎみの口縁端部を有する杯身で、口縁部外面直下に強いナデ

調整が加わり、端部の外反度が強調され、シャープな仕上がりとなっている。推定口径12cmを測り、また器壁も全体的に薄い。5は底部周縁から外上方へ直線的にのびる器体を有し、口縁端部はやや外反ぎみに丸く仕上げられる。高台をもつタイプとみられ、比較的底部中央寄りに付されるものと推定される。口径は14.0cm程度に復元できる。それぞれ中村編年Ⅱ-6、Ⅲ-3、Ⅲ-2段階に属するが、3などは細片のため、天地逆転の可能性もあろう。4は、小型の短頸壺である。端部を欠くが、口頭部は直立ぎみに短くのびるものと思われる。頭部での推定径は、7.7cm程度であり、器壁は薄い。断面芯部の色調は、淡赤紫色を呈し、古手の須恵器に特徴的な胎土・色調を示す。

8はいわゆる回転台土師器の高台部分の残欠。貼付高台は直立し、断面形はほぼ四角形で、しっかりしたつくりをなす。調整は回転ヨコナデによるもので、内面を中心にナデ仕上げが行われる。端部は僅かながら内側に影らむ。高台径は推定8.7cmを測る。10世紀後半前後の時期のものとみてよい。9・10は、土師器の皿である。9は小皿であり、口径9.2cmを測る浅めのタイプで、器壁も薄い。口縁部外面直下にナデが加わり、端部は外反する。色調は淡褐色系で胎土は密である。15世紀前半に比定されよう。10は中皿で、底端部から外上方に向かってのび、口縁端部は薄くなって、傾きを緩め外反する。9と同様、口縁部外面直下に一段ナデが加わる。色調は淡乳橙色で、胎土は精緻であるが、クサリ端の微粒が散見される。9よりは後出になるもので、15世紀から16世紀にかけての時期を付与しておこう。

11は、龍泉窯系の青磁碗である。内外面には淡緑色の青磁釉が施され、全体に貫入が認められる。口縁部及び高台を欠いているが、残存高は3.2cmを計測する。16世紀代に比定できよう。

6・7は、平瓦片。6は側縁にへら切り痕が認められる。表面は、凹面・凸面ともに磨滅が著しく、成形痕は不明。1〜5mm大の石粒を含み、やや多孔質な胎土で付近既出の古代瓦の胎土と似かよった素地土が用いられている。7は凹面に顕著な布目痕、凸面に細かな叩き痕が認められる。胎土は多



第68図 月若遺跡第28地点出土遺物実測図 1/4

量の石英・長石粒を含むが、焼成は良好である。

(森岡・木南)

まとめ 当該調査地点は本遺跡の西端付近に位置している。西方に展開する芦屋廃寺遺跡と直に接する地域で、埋蔵文化財の包蔵は当初より予想される地点であったが、包含層の重層度や遺物の傾向、遺構の密度などを把握する目的で確認調査を行った。

結果として、現地地表下75cmの深部に層厚70cmを測る数枚の良好な遺物包含層を確認した。第1トレンチのセクションにかかった遺構は、第10層をベースとする土坑1基(径約68cm、深さ約40cm)のみであるが(第67図)、層界面の状況からみて、2～3面の遺構面の存在が予測でき、2ヶ所のトレンチの総合判断からは、ほぼ敷地全域に同じ態様の重層する包含層の遺存が推定される。

包含層のつながりは、第1トレンチから第2トレンチに至るまでに第6・7・8層が下降傾向を示し、第2トレンチで未確認であったベース(第10層)もおそらく西側ではレベルを落とす可能性が高い。旧地形全体が西ではやや下ることが予測できるが、この点は本調査の実施によって明らかになるだろう。流路などが存在したのかもしれないし、地形の自然勾配とも思える。

遺構及び遺物包含層の様相については、①第10層をベースとする遺構が古墳時代前期初頭まで遡る可能性が強いこと、②第8層が古代の遺物を主体とすること、③第7層から上には中世段階の遺物を併せもつことなどが、約言できる所見である。

以上の確認状況を踏まえ、本地点については、遺構・遺物包含層の損壊が見込まれる約190㎡を対象とした全面発掘調査が必要と判断した。

(森岡)

(5) 第30地点の調査

調査動機 阪神・淡路大震災により家屋が倒壊した当該地(敷地面積190.44㎡)には、地権者(古田耕治)より鉄骨造2階建個人住宅の再建計画が起こったが、月若遺跡の中心地でもあるため、平成7年10月5日に森岡秀人・木南アツ子が担当者となって、確認調査を実施した。その結果、現地地表下29cmの浅さから推定大溝の覆土包含層を確認し、遺構の損壊も予測されたため、同年10月25日～11月1日の5日間、損傷度のみを知る目的で、第2次確認調査を実施した(第47図)。



第69図 調査風景

(森岡・木南)

調査の方法と経過 工事基礎の掘削深度は、設計G.L.-55cmを測るため、遺構損壊が確実と考えられた計画地北半の一部を調査対象とするのみに軽減し、特に第1・13地点で確認されている東西大溝の残存状態究明を主たるねらいに据えて、発掘区を設定した(第70図)。敷地北端約1.3m幅は石垣を伴う一段高い植栽部分があったため、その南部分に南北に長い2m×5.5mの規模のトレンチ調査となり、人力掘削により掘り進めた(図版31)。

発掘調査は、平成7年10月25日から開始し、翌月に入って、11月1日に終了した。現地実働は5日を要した。10月25日、施工担当者立会の下、調査区を設定し、掘削を開始。第1層(表土層)の除去

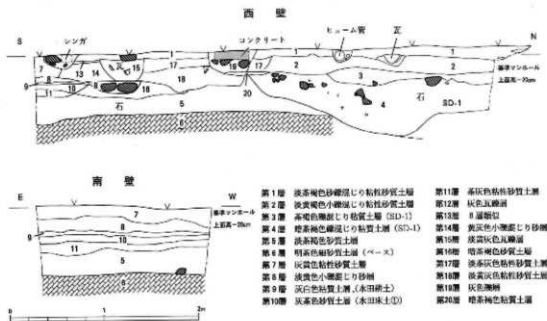
に入るが、コンクリート布基礎及び各種塩化ビニール管が残存し、掘削に困難をきたす。結局、表土除去のみで初日は費やされた。10月26日、調査区中央において東西に埋め込まれていた布基礎より南側は、盛土層であることが判明し、排土にかかる。現表下約25cmで、近代の石組礎石及び水田耕土（第9層）を検出。写真撮影にて記録し、除去する。10月30日、南壁・西壁にサブトレンチを設定し、掘削を始める。10月31日、南壁・西壁の土層断面図（縮尺1/10）、調査区配置図（縮尺1/50）を作成する。11月1日、サブトレンチ幅により、第5層無遺物層の確認及び濠底部の確認を行い、埋め戻しに至る（第69図）。（森岡・木南）

基本土層 層序は堆積順に、芦屋川扇状地形成土（第6層、ベース）・遺物包含層（第5層、大溝のベース）・大溝関連土層（第4層・第3層、SD-1埋土）・近世以降の水田土壌（第9～11層）・近代建物関連土層（第8層・第2層）・盛土層・現代建物関連遺構（第12層）・既存建物・現表土となる。各層位は次のような所見である（第71図）。

第1層…淡茶褐色砂礫混じり粘性砂質土層。現表土。第2層…淡黄褐色小礫混じり粘性砂質土層。近代の旧猿丸邸の倉に伴う整地層。しまりは強く、あたかも漆喰のようである。第3層…茶褐色礫混じり粘質土層。大溝（SD-1）内埋土。小礫や石塊を含む。土質は第4層に近似する。第4層…暗茶褐色礫混じり粘質土層。大溝（SD-1）内埋土。上部・下部ともに人頭大以下の花崗岩・布引花崗閃緑岩の角礫を多量に含む。遺物は、下部では庄内式及び布留式併行期の遺物を包含し、上部ではそれらに加えて須恵器の伴出が認められる。第5層…淡茶褐色砂質土層。大溝（SD-1）のベース。無遺物層。風化花崗岩細粒を全体的に散見。第6層…明茶色細砂質土層。扇状地形成土。第18地点及び第19地点の基本層序第4層に対応できる。第7層…灰黄色粘性砂質土層。現表土及び盛土層。現代旧家屋に伴う盛土層。第8層…淡黄色小礫混じり砂層。盛土層。近代建物に伴う石組礎石の掘形にも堆積する。第9層…灰白色粘質土層。水田耕土。第8層によって北側を切られ、連続は認められない。第10層…灰茶色砂質土層。水田床土①。北への立ち上がりが見取され、おそらく水田の段差が築かれたものと思われるが、近代建物（第8層）



第70図 トレンチ配置図 1/200



第71図 土層断面実測図 1/40

によって削平を受ける。第11層…茶灰色粘性砂質土層。水田床土②。第12層…灰色瓦礫層。被災した既存建物の前に建てられた家屋の基礎。レンガを東西に帯状に敷き、布基礎としたようである。下部には小礫が敷かれる。第13層…第8層と同じ。盛土としての第8層の二次堆積土。第14層…黄灰色小礫混じり砂層。現代旧家屋に伴う盛土層。第15層…淡黄灰色瓦礫層。掘乱坑。第16層…暗茶褐色砂質土層。第17層…淡茶灰色粘性砂質土層。盛土層。第18層…淡黄灰色粘性砂質土層。盛土層。第19層…灰色礫層。既存建物コンクリート布基礎の下、人頭大の礫さらに下部には小礫が挿入される。第20層…暗茶褐色粘質土層。(森岡・木南)

遺構 調査区内において検出された遺構は、旧家屋に伴う石組基礎と弥生時代終末期～古墳時代前期の大溝1条である。以下に、発掘所見を記述する(第71図、図版31・32)。(森岡・木南)

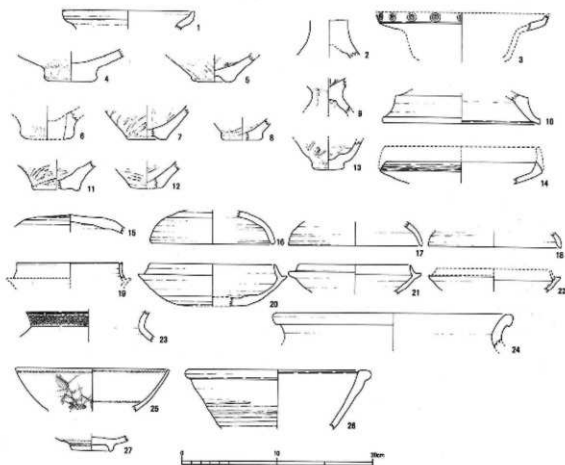
石組礎石 調査区南側において検出された近代の旧猿丸邸に伴う家屋の石組礎石である。30cm以下の花崗岩を「L」字状に敷き詰め、上面は平坦にする。幅44～55cm、検出長1.95m、掘形深度は13cmを測る。西に隣接する第1地点においても、同様の敷石遺構が検出されており(森岡1985d・86i・88j)、その延長とみられる(図版32下段右)。(木南)

大溝(SD-1) 調査区中央から北側において検出された古墳時代初頭前後に構築された大溝。近隣の既往調査では、第1・13・20・28地点においてもその連続が確認されており、当該地点においても同様の結果が得られた。阪急電鉄神戸線を挟んで北側に位置する第3・4・9・15・33地点において、同時期の遺構が検出されており、北方に広がる集落域に伴う環壕と想定されている。大溝は、当該地点においては、幾度かの掘乱と削平地業により、プライマリーな肩部は平面的にみて20cm程し

か確認されなかったが、北方向への落ち込みが看取され、底部付近の断面形はなだらかな「U」字状を呈する。検出した溝底の最深度は肩部から約70cmを測る。溝の構築年代については、集落から廃棄されたと考えられる日常土器から、庄内式併行期とみて大過なく、大溝埋土上層中に含まれる須恵器の時期をより所に、その埋没は6世紀の中に入ろう（図版32上・中段）。

なお、環濠と想定している大溝の外縁部には、おそらく土塁などの築造が推定されるが、先述のとおり、幾度かの削平を被り、その痕跡は全く見出し得なかった。（森岡・木南）

遺物 1～14は、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の弥生土器・土師器である。1は復元径14.0cmを測る変形土器の口縁部で、口縁形態は端部が立ち上がり、受口状を呈する。焼き締まりの良い土



遺物出土層位

第1層……26

第3層……1・6・11・15・16・21・23・25・27

第4層……9

第4層(上部)……2・3・12・14・17・18・19

第4層(下部)……4・5・7・8・10・13

第5層……22(埋入)

第8層……24・26

第72図 月若遺跡第30地点出土遺物実測図 1/4

器で、断面は褐色。器表もしっかりしており、外面灰褐色、内面は暗黄褐色を呈する。2・9は高杯脚部、3も高杯杯部のやや立ち上がりみせる口縁端部であろう。端面には竹管文を付けた円形浮文を付している。4は壺の底部で、ほぼ完存する。5～13は甕・鉢などの底部である。6は分厚く、壺になるかもしれない。多くは外面に叩き成形痕を残す。7・13は灰色・淡灰黄色を呈し、他の土器とやや異なる。10は高杯ないしは器台の有段裾で、端部をややつまみ上げた調整を施す。淡黄赤色を呈する。14は珍しい器形を呈するが、高杯の一部とみておきたい。これらの土器類は主として第4層から出土したものである。

15～24は須恵器を一括した。杯は6世紀後半～末頃の資料が中心であるが、15・19のようにやや古いものもみられる。23は擬凹線直下に繊細な波状文が施される。24は甕の口縁部で、内外面に黒灰色の自然釉を帯びる。須恵器は3層並びに4層上部の出土品が目立つ。25・26は陶器・磁器である。26は鉢である。口縁部は外方に玉縁状に突出する。磁器碗25は19世紀以降に下る新しい時代のもので、笹の葉をあしらった染付磁器である。27は伊万里染付碗の高台部である（第72図）。（森岡）

まとめ 震災復興に伴う事前調査であったため、限定的な調査区しか設けられなかったが、予想していた大溝（SD-1）の南肩部を検出するなど一定の成果がみられた。

SD-1は断面「U」字形を呈する溝で、その走向から考えて自然流路とはみられない。幅は調査区内で2.6mまで測ることができたが、おそらく数mはあるだろう。深さについても、溝底の検出に至っておらず、70cm以上は残っているようである。埋土中の土器は、第3層と第4層が比較的層位に則した年代順で出土している。3～6世紀の期間に埋没が進行したことを物語る。（森岡）

（6）33地点の調査

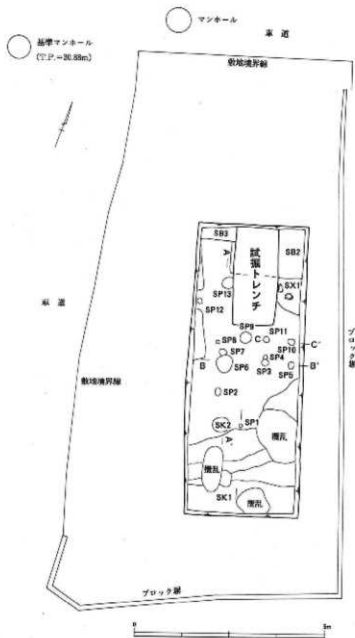
調査動機 月若遺跡の範囲に入る芦屋市西山町81番地4・5において、地権者（藤原清治）より罹災家屋の再建計画があがったため、平成8年2月5日に確認調査を実施した（第47図）。周辺部では古墳時代を中心とする遺構や濃密な包含層が見いだされており、今回の新築計画も基礎掘削深度がG.L. -50cmの設計であるため、包含層などの損壊が生ずるものと推定され、試掘結果により取扱いを定めることとした。

確認調査を終えた結果、予想どおり堅穴住居跡などの遺構・包含層の損壊が避けられぬものと判断され、特に第5層上面での全面調査が必要な旨、明らかとなり、地権者側と協議した。この協議を受け、2月15日～2月17日の3日間、遺構・包含層の損傷の加わる深度（現地表下50cm）までを対象とした全面調査を実施した（第73図）。（森岡・木南）



第73図 調査風景

調査の方法と経過 確認調査は事業地面積97.57㎡の中央に短辺0.6m、長辺3.25mの規模のトレンチを1ヶ所設定して行い、機械掘削により1.30mまで基本土層の把握に努めた。その結果、数枚の遺物包含層を確認するとともに、到達面で竪穴住居の1辺らしき大きな包含層の変化(SB1)を認めため、試験坑を幅1.15mになるよう拡張し、分層的に発掘するとともに坑底に現れた竪穴状遺構の内部を調査した。測量基準高はT.P.30.88mを測る(第74図、図版33)。



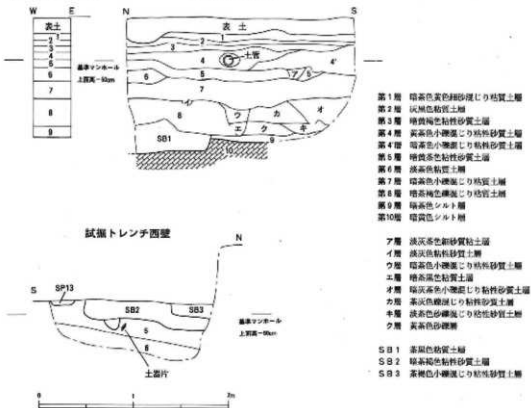
第74図 調査区配置図・遺構平面実測図 1/100

全面調査は3日間を要した(第73図)。平成8年2月15日、曇り。整地層・水田層(第2・3層)及び遺構の認められなかった第4層上部を重機によって掘削し、第5層上面に至るまでを人力によって精査した。2月16日、晴れのち曇り。第5層上面において遺構の検出を終え、写真撮影を行う。調査地南半では攪乱が若干加わっていたが、旧地形の段差に伴い斜向する地層堆積が確認されたため、調査地西壁南半にサブトレンチを設け、土層断面図(縮尺1/20)による記録を採った。調査地北半では、複数のピットを半掘する。ピットの平面実測図(縮尺1/20)及び遺構配置平板図(縮尺1/50)を作成する。2月19日、晴れ。土管敷石(SX1)、住居跡(SB2・3)を発掘し、各住居跡の土層断面図を作成するとともに(縮尺1/20)、夕刻には埋め戻しに至った。

(森岡・木南)

基本土層 盛土は平均15cmと浅く、その下には表土・水田耕土・床土が認められ、現地表下36cm以下第4層から第9層まで

試掘トレンチ裏壁

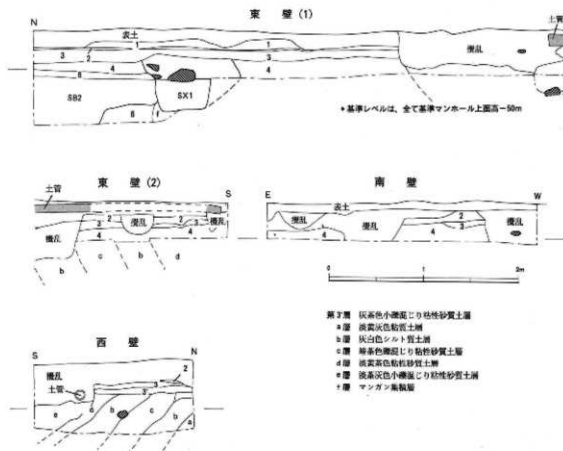


第75図 土層断面実測図(1) 1/40

がすべて包含層である。第10層のシルト層は月若遺跡の基本ベースに近似し、縄文文化期の遺物を包含する可能性はあるが、原則的には無遺物層と考えられる。セクション観察により5・8層上面にはピット・土坑など顕著な遺構が存在する(第75図、図版33)。

堆積状況については、第4層より上部は水平の堆積をみせるが、第5層以下については敷地南半部において、旧地形の段差に応じ、地層が急激に落ち込むものと推測される。出土遺物の様態は、現地表下50cmに位置する第5層上面では、中世遺物を含むビットが確認され、この時期の削平が加わったものと考えられる。第6・7層は茶色味を帯びる粘質土層である。律令期前後の須恵器を中心に土師器片を含む。第8層は暗茶褐色小礫混じり粘質土層である。古墳時代の須恵器を含み、遺構も岸うようである。第9層は、地山直上に掘られた住居跡内の覆土である。遺物は須恵器を伴わず、庄内式併行期のもののみが含まれる。第10・11層はシルト層で、遺物は認められない。(森岡・木南)

遺構 確認調査では、第8層を削去した段階で堅穴住居の一部と推定される落ち込み（SB1と呼称）と同検出面にあるビット（SP1）を検出した。また、第5層上面を対象とした本調査において、まとまった遺構を検出した（図版34・35）。（森岡）



第76図 土層断面実測図 (2) 1/40

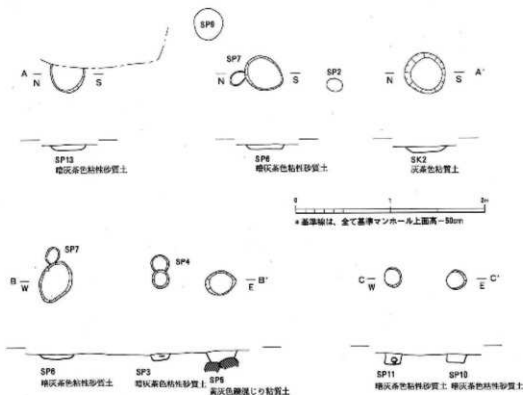
SB1 第9層(暗茶色シルト層)をベースとする古墳時代前期初頭頃の竪穴住居で、方位に則せば、東辺部分を検出したことになる(第78図, 図版33)。竪穴の残存高は18cmを測り、床面はフラットである。壁際には径58cmのピットと壁溝らしき有機質土のつまる遺構を見いだしたが、内部は未発掘である。竪穴の埋土は茶黒色粘質土で、粘りがあって硬化し、硬く締まっている。須恵器を一切混じえない赤土土器片をかなり含んでおり、床面直上では面をなして出土した。(森岡・木南)

SP5 第5層上面で検出したが、他のピットと明らかに土質が異なるもので、より上層から営まれたものである(第77図下)。短径25cm、長径31cmの楕円形プランを呈し、埋土は黄灰色礫混じり粘性砂質土層である。(木南)

SP13 直径30cm強のピットである(第77図上)。SP5以外の他のピット同様、暗灰色粘性砂質土を埋土とする。治平元寶1枚が出土しており(第79図27)、地鎮的な様相を窺わせる。(木南)

SX1 第4層中の土管直下に布設された敷石遺構である(第76図, 図版35)。人頭大以下の礫が多量に挿入される。当遺構は第4'層をベースとする。(木南)

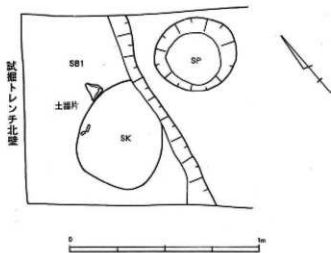
SB2・3 第5層上面において検出した竪穴住居跡であるが、試掘坑西壁で確認した結果、SB



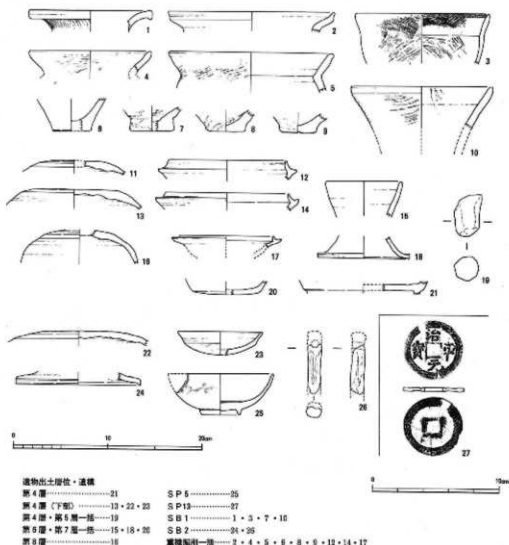
第77図 遺構平面・断面実測図 1/40

2は、SB 3によって切られており、先行するようである（第75図下，図版35）。覆土はSB 2がし
まりの悪い暗茶褐色粘性砂質土層、南側にベッド状遺構及びピットを伴う。SB 3は茶褐色小礫混
り粘性砂質土で、残存する堅穴の深
さは15cm程度である。（森岡・木南）

遺物 出土資料は、27点を図化し
た（第79図，図版61）。1～10は、
弥生時代終末期～古墳時代前期初頭
の弥生土器・土師器である。1はS
B 1の覆土中より出土した壺形土器
で、口縁部はよくヨコナデ調整され
ている。黄橙色の色合いによく焼き
締められており、外面の器表は縦方
向に丁寧にヘラミガキされている。
研磨痕が顕著に残存。2・4・5は
鉢ないし甕の口縁部。2はヨコナデ



第78図 SB1平面実測図 1/20



第70図 月若遺跡第33地点出土遺物実測図 土器・土製品 1/4、銭貨1/3

により端部がつまみ上げられる。復元口径17.8cmを測る。内弯する口縁部4は灰黒色の焼成を示し、胎土も他の土器とやや異なる。搬入土器かもしれない。5も4と似た暗色系の色調を示す。口縁叩き出し手法によって成形され、口縁端には弱いながら僅かに端面をもつ。3は復元径14.4cmの鉢形土器で、僅かに外反させる口縁部の先端は尖りぎみに終わる。調整は口縁部の内面を中心に繊細なハケメが加えられる。口縁端内面には特徴的な調整痕が残る。欠いている底部は小さくなるだろう。

6～9は底部で、6・7・9には黒斑が認められる。7・8・9は甕か鉢であろう。10は鉢形を示す器形の土器で、器壁の厚みがかなりある。外面叩き成形、内面には粘土紐巻き上げ痕を残す。形態と粗略な製作技法から製塩土器の可能性も考えておきたい。1・3・7・10などの土器から、堅穴住居SB1が庄内式期の所産であることが判る。3世紀前半の時期を付与したい。

11～24は須恵器である。11・13・16・22は杯蓋、12・14・17・20は杯身。13・22は復元径が大きく、6世紀前半に比定し得る。12・14は6世紀末、17は7世紀前半、20も7世紀に入るものである。15は平瓶の口縁部片で、7世紀に入るものであろう。18は高杯の脚部である。端部は僅かに上下拡張をみる。21・24は8世紀に入る杯。24は中村編年〔中村1981〕のIV型式3段階の型式標徴を有する。19は土師器の把手残欠。明褐色に焼き上げられ、胎土は精良。

23は瓦器小皿で、口縁部は薄く、ヨコナデ調整が入念になされる。12世紀段階のものであろう。25は染付磁器碗。26は有孔棒状土鍾。27は北宋銭「治平元寶」で、初鑄年代は西暦1064～67年である。保存状態は良好であったが、整理中に数片に離散した。(森岡)

まとめ 本調査では、下層で竪穴住居跡3棟の確認など、弥生～古墳時代の居住域の広がりをおさえる上で一定の成果があった。SB1は3世紀代、SB2・3については8世紀の土器も出土しているが、5～6世紀頃の竪穴住居とみておきたい。(森岡)

(7) 小 結

月若遺跡については、第20・25・28・30・33地点の合計5地点分の報告を行った。第20・28の2地点は確認調査のみで、事前調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班による全面調査に委ねることになったが、第25・30・33の3地点分については、芦屋市教育委員会が平成7年度中に続けて本調査も実施した。いずれも最も古い段階では、庄内式に併行する段階の遺構に恵まれ、第25地点では竪穴住居跡1棟、第33地点でも竪穴住居跡1棟の遺存が確認された。月若遺跡の3世紀段階の居住域の連続的な広がりがかなり鮮明となってきた。また、第33地点では古墳時代の竪穴住居の3例を加えた。

また、第30地点では、予測されていた該期開削の大溝1条が見いだされ、第1・13・20地点と連続する遺構であることが確かめられた。さらに第25地点では、従来から月若遺跡で多出している竈状遺構1基が全掘され、焼成室や作業室の構造や素材に関する知見が得られた。この種、近世・近代の竈に関しては、月若遺跡第8地点の出土例以来、数多くの蓄積をみており、いずれ近い将来、編年的な考察も加えてみたい。

月若遺跡は被災率8%と比較的低かったため、町内を歩いた状況では倒壊家屋も少なかった。震災後の再興も等価交換方式に基づく共同住宅建設などは目立たず、専用住宅の個別復興が主流となっており、今年度調査を実施した地点の大半は個人住宅新築が調査原因であった。平成7年度中の早期復興は、復興4区域を除く市内各所で進捗しており、市内全域での温度差が感じられる。月若遺跡管内においては、平成8年度の個人住宅復興に伴う事前調査の増加が遺跡の埋没深度が浅いだけに予想される。

なお、月若遺跡の既述調査の内容については、報告書や概報、速報の類〔森岡1985d, 86i, 86k, 88b, 88d, 88l, 88m, 88n, 89, 94b, 森岡編1993・95, 森岡・木南編1996, 森岡・中井・濱野1996, 森岡・白谷編1992〕を参照されたい。(森岡)

4. 打出岸造り遺跡

(1) 調査地の位置と環境

打出岸造り遺跡の範囲内における今年度行った確認調査は2件を数え、うち1件は、同年度中に兵庫県教育委員会復興調査班が本調査を実施した(第9地点)。この報告については、第28集に収載の予定である。今回市教育委員会が確認調査を実施した第1地点は、本遺跡発見の端緒をなした学史的にも重要な場所である。紅野芳雄が戦前に初めて踏査して、その遺作『考古小録』(紅野1940)に紹介をみたのが本遺跡で、昭和9年から10年にかけて10数回にわたる調査記録がみられる。遺物の出土が顕著であった場所は、宮川に架かる芦月橋を西に50m程入った台地東端の道路の切り通しで、現在は住宅街と化し、東側には神戸屋レストラン芦屋店の店舗と駐車場が存在する。当時の記録を復元すれば、崖状の断面に65cm

の厚みで濃密な包含層が遺存したようであり、弥生時代を中心とする土器類が数多く採集されている[村川・森岡1976]。これを以下、第1地点と呼称する。

遺跡は、宮川の右岸、川沿いに細長くのびる宮川低地帯に面した扇状地上に位置し、標高は15~17mを測る緩斜面地に立地する。既往の調査では、第4地点において中世の水田跡、近世の上水管が見い出されており、弥生時代のみならず、中世以降には広範囲に遺跡の広がりが認められる。江戸時代の上水管については、現在、芦屋市立美術館1階常設展示場にその一部を移築保存している。本遺跡の発見地である第1地点はその東端付近にあり、第4地点は当地点の西方70m余りの所に位置し、第9地点は南西120mの地点に位置する。なお、本遺跡での被災面積は全体面積30,800㎡のうち7,100㎡を測り、約23%を占有する(第80図)。(森岡)

(2) 第1地点の調査

調査動機 震災復興調査が軌道に乗ってきた平成7年10月、打出岸造り遺跡(第9地点)の支援調査を実施していた兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の矢口裕之(群馬県)・北原治(滋賀県)両氏から、担当の発掘現場近辺で開発工事が進みかけており、おそらく打出岸造り遺跡の範囲の中に



第80図 打出岸造り遺跡調査地点分布図 1/5000

入る可能性が高いとの連絡が入った。連絡を受けた係長森岡が直ちに工事現場に急行したところ、既に擁壁工事で非常に濃密な包含層の損壊を確認した。該当地は芦屋市大原町82番地（敷地面積221.9㎡）で、事業主（加賀桂一）の個人住宅新築現場であることが判明、施工業者である株式会社バナホーム大阪に早速連絡をとるとともに、工事を一時中断するよう指示を出した。平成7年10月26日のことである（第81図）。



第81図 工事進行状況

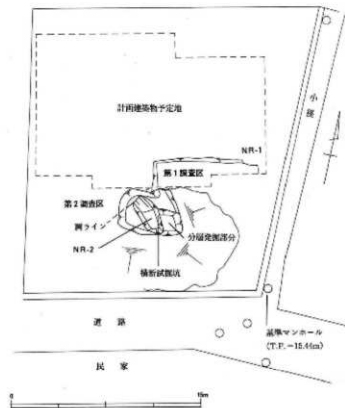
地権者代理に出頭してもらい、事情聴取を行ったところ、発掘届出書を未提出のまま、工事に着手した文化財保護法違反であったため、中断した工事について別途協議することにして、直ちに本件の緊急発掘調査に入ることを指示し、書類の手続き等を行政指導した。（森岡）

調査の方法と経過 10月27日、駐車場予定地の掘り下げ工事部分を第1調査区と呼び、その北壁面の精査から損壊記録調査を開始する。調査は森岡秀人・木南アツ子が担当。11月1日、第9地点と損壊部分の土層など比較検討し、遺跡の重層状況が次第に判明してくる。地権者代理との協議に基づき、

第2調査区を新たに前庭部分に設定。試掘を開始し、ほぼ32㎡の面積を掘り下げる。夕方頃に東西に近い方向の河川状遺構の平面が露呈する。11月8日、流路内堆積土にテストトレンチを設定し、横断面を観察しつつ、掘り下げと分層を行う。土層図の基準線設定。11月9日、流路（NR-2と呼称）の土層断面を実測。北壁の土層断面の註記を完成し、遺構の検出状態の平板実測を終える。

以上のように、緊急調査は10月27日～11月9日の実働6日間に及んだ（図版36）。

調査方法としては、住宅建築の基礎工事がほぼ終わっていたため、その部分は未調査とし、駐車場の予定された深掘部分をトレンチ状に改変して、土層断面と遺物包含



第82図 調査区配置図 1/300

層の実情を確認調査し（第1調査区）、掘削残土の盛られた盛土部分が前庭になる予定であったため、そこに新たに試掘坑を設定した（第2調査区）。第1調査区は東西8.3m、南北2.0m、第2調査区は東西5m、南北3mの大きさである（第82図、図版36）。（森岡）

基本土層 当初既に工事に入った車庫部分が切り通し状に掘り下げられており、この部分の北壁・西壁断面を整理・精査した結果、次のような事実が判明した。検討した土層断面は、現地表面が標高17.5mの高さにあり、確認深度は15.4mの高さまでである（第83図上・中・下、図版37上・中）。

層位は最上層40～50cmが盛土であり、その上部が工事により動いたとみられる淡茶色土層、下部は淡黄灰色礫混じり粘質土層であり動いた形跡はなかった。標高17.00m前後の位置には水田耕作土と床土が水平に広がっていた。水田耕土は上部にかなり削剥が加わっていた。第1層は淡灰褐色粘性砂質土で、床土直下に厚さ30cm前後で広がる第1包含層。土師器や須恵質土器を包含し、径2～7mmの花崗岩起源の微礫粒を含んでしまっている。第2層は暗茶褐色粘質土で、有機質味を強く帯びた第2包含層。径5mm以上の花崗岩起源の白色微礫粒が目立つ。ビート層ブロックの黒泥土（擬礫）を含む。土器の包含量は第1包含層より少ない。第3層は淡灰褐色粘質土層。5～8mm大の花崗岩起源礫を顕著に含み、土器片など遺物を包含。土坑など遺構埋土を形成している。厚さは15～20cm。第4層は淡灰褐色粘性砂質土層で、全体的に砂粒分が強く、土師器片・花崗岩礫を散見する。厚さは最高で8cm程度で、付近一帯に広がるものではない。第5層は淡茶褐色礫混じり粘質土層。東に向けて傾斜堆積を示して層厚を増す包含層で、セクションに顕著に土器片を包含する。第7層ほどではないが、花崗岩起源の小礫を数多く含む。第3～5層は層相の違いがみられるものの、一まとめの単位堆積をなすものとみなされる。

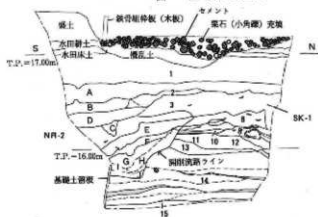
第6層は灰色礫混じり粘質土層で、3層と直結する部分があり、遺構のベース土となる。色調は7層に同調するが明るい。径5mm以上の花崗岩起源礫を数多く含む。第7層は暗灰色礫混じり粘質土で、径1cm以上の粗大礫を含む。全体的には6～9mm大の礫粒を包含する。第8層は灰黄色絨状シルト層で、(ア)淡灰茶色シルト(イ)淡茶色細砂混じりシルト(ウ)白色シルト(エ)淡灰黒色シルトなどシルト質砂泥の互層を一括した。遺物は入らない。第9層は淡灰色シルト質粘性砂質土で、礫分は少なく、土師器片などを包含する。第6・7・9層は一つの堆積単位ととらえている。

第10層は淡灰茶色礫混じり粘性砂質土で、第11層とコンビをなす。径5mm以上の粗い礫粒を顕著に含み、締まりはあるが、全体的に砂礫っぽい。第11層は標高16.2mの位置に厚さ5～7cmで北壁西端を除き概ね水平に堆積する。10層とコンビを組む薄い粘質土で、径2～3mm大の微礫を含む。6・7・10層に比べ礫分は少なく、締まりはよい。

第12層は黄白色砂層で、付近一帯に広く堆積する。灰白色粘土と径3～5mmの小さな礫を混じえる中砂。洪水不安定期の下限をなすとみられる砂層。粘土質土は13層を起源とするものであるが、ブロック部分を除き締まりはよくない。第13層は淡黄灰色礫混じり粘質土層で、砂礫層の厚い堆積の終焉と一時的安定を示す粘質土。局部的に径7～8mm大の小礫を包含する。セクションに顕著な遺物は見当たらない。

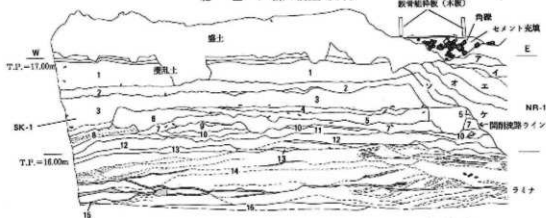
標高16m付近以下には、厚さ数10cmの厚い粗砂と礫層が堆積する。流路にしては東西方向にかなり

西 壁 (第1調査区)



- 第1層 淡灰褐色粘性砂質土層
- 第2層 暗茶褐色粘質土層
- 第3層 淡灰褐色膠凝じり粘質土層
- 第4層 淡灰褐色粘性砂質土層
- 第5層 淡茶褐色膠凝じり粘質土層
- 第6層 灰色膠凝じりの粘質土層
- 第7層 暗灰色膠凝じり粘質土層
- 第8層 灰灰色塊状シルト層
- 第9層 淡灰色シルト質粘性砂質土層
- 第10層 淡灰茶色膠凝じり粘性砂質土層
- 第11層 淡灰褐色粘質土層
- 第12層 黄白色砂層
- 第13層 淡黄灰色膠凝じり粘質土層
- 第14層 茶褐色砂層-白色細砂とシルトの交互地層
- 第15層 黄白色シルト質細砂層
- A-J層 淡白色-暗黄色シルト層

北 壁 1 (第1調査区西半)



北 壁 2 (第1調査区東半)



- ア層 黄褐色粘質土層
- イ層 淡灰褐色粘質土層
- ウ層 淡黄褐色膠凝じり粘性砂質土層
- エ層 淡黄色粗砂層
- オ層 褐色砂質土層
- カ層 淡黄褐色粗砂層
- キ層 淡茶褐色粘性砂質土層
- ク層 淡灰褐色膠凝じり粘性砂質土層
- ケ層 灰黄色粘質土層
- コ層 淡黄白色シルトブロック凝じり粗砂層
- サ層 灰白色粘質土層
- シ層 淡黄白色粘質土層
- ス層 淡黄色シルト層
- セ層 淡灰褐色粘性砂質土層
- ソ層 褐色粘性砂質土層

第83図 土層断面実測図(1) 1/40

広がるため、上方からフロー状態でこの地域一帯に広域に堆積した氾濫原に係わる洪水堆積層とみなされる。粗砂と中砂と砂礫層が厚くラミナをなして堆積し、中砂・細砂・極細砂に伴う形で水平方向に薄いシルト層が介在する。暗黄色シルト層の水平方向のまとまりは、標高15.6m前後の位置にある。この砂礫堆積物を一括して第14層と呼びたい。

第15層は現状で検出し得た最下層に当たり、黄白色シルト質細砂層であり、標高15.5mに達するまでに水平的な堆積を終えている。

以上が、調査区を設定した北壁と西壁の一部を中心とした基本的土層であるが、次に主だった土器類の包含傾向を記述する。

西壁面は、住宅の建築部分の南限が断面で観察される。鉄骨組枠板の中に小角礫の栗石が充填されたセメントが流し込まれており、水田床土のレベルまで掘り下げられた形で、基礎工事が一応終了した状態にあった。基礎部分の厚さは20～25cmを測る（第83図上、図版37下）。

その直下は、第1包含層で淡灰褐色粘性砂質土層が水平に安定した堆積環境を示しており、土師器・須恵質土器を包含する。径2～7mmの花崗岩起源の微礫粒を含むも、全体的によく締まっている。第2層（暗茶褐色粘質土層）は、有機質味を強く帯びた包含層で、径5mm以上の花崗岩起源の白色微礫粒が目立つ。ビート層状の黒泥土層で、土器の包含は少ない。

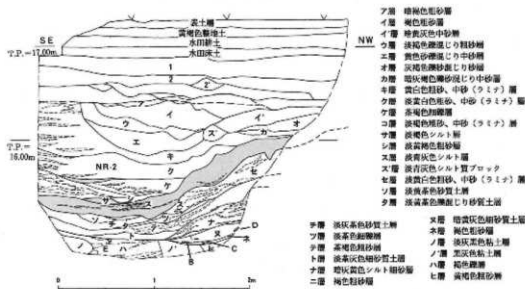
第3層（淡灰褐色礫混じり粘質土層）は、5～8mm大の花崗岩起源礫を顕著に含み、土器片を包含し、下部に土坑（SK-1）を伴い、その埋土をも成す。第4層（淡灰茶色粘性砂質土層）は全体的に砂粒分が強く、土師器片、花崗岩礫を散見する。第5層については既述したので割愛する。

第6～11層までは一つの堆積単位を示し、6・8層にはかなりの土器片を包含する。第6層（灰色礫混じり粘質土層）は土坑など遺構のベースをなす包含層で、色調は7層に同調するが、やや明るい。径5mm以上の花崗岩細礫粒を数多く含む。第7層（暗灰色礫混じり粘質土）は、径1cm以上の粗大礫粒を含み、全体的に6～9mm大の礫粒を包含する。第8層はシルト層で完形土器ほか土器片を多量包含している。第9層（淡灰色シルト質細砂）は礫分少なく、土師器片などを若干包含する。第10層（淡灰茶色礫混じり粘砂）は、径5mm以上の小さな礫粒を顕著に含み、締まりはあるが、全体的に砂礫っぽい。第11層（淡黄褐色粘質土層）は、薄い粘質土で、径2～3mm大の微礫粒を含み、締まりはよい。第12層（黄白色砂層）は、灰白色粘土と径3～5mmの小礫粒を混じえる中砂。洪水による不安定期の下限をなす砂層。粘土質土は13層を起源とするものである。ブロック部分を除き、締まりはない。第13層（淡黄灰色礫混じり粘質土層）は、砂礫物堆積の終焉と一時的安定を示す粘質土で、局部的に径7～8mmの小礫を包含する。遺物の包含はないように思われる。第14層（暗黄色シルト層）は、砂礫層中の薄い間層。流水の一時的底面をなすが、上下でさほどの時間的経過はない。数枚あるシルト間層とほぼ酷似する。第15層（黄白色シルト質細砂層）はさらに下部に続く。（森岡）

遺構 平面的な調査におよばなかったため、遺構の確認は土層断面によったが、自然流路1条と人工的な流路1条が検出された他、セクションに土坑やピットなどの遺構が視認された。流路については、NR-1・2と呼称し、土坑・ピットはSK・SPを遺構番号に付す。（森岡）

NR-1 調査区1（東西調査坑）の北壁東半で検出された流路断面で、走向は一応南北方向とみ

西 壁 (第2調査区)



第84図 土層断面実測図 (2) 1/40

られる。水田耕土・床土以下第1～15層すべてを破って西肩法面が形成されており、比較的新しい流路と思われる(第83図中・下)。東側については工事により切断され、またさらに下部へと堆積が続くため、幅や深さは未詳であるが、幅が広く、断面「V」字形を呈するか、もしくは、東に向けての地形的段差の低所部分に厚く洪水の堆積がみられた状況である(図版37中)。

流路内の基本的土層は、水田耕土直下のア層は、淡黄色シルト質細砂質土の基層に径2～4 cmの黄褐色粘土質ブロックを斑状に包含し、水田床土を形成。耕土が厚味を増す東側では、同様に層厚が増している。イ層(淡灰褐色粘質土層)は、黄灰色粘性砂質土の基層に暗褐色粘質土を斑状に含む。ウ層(淡黄褐色砂混じり粘性砂質土層)は、径2～5 mmの小礫を包含する中砂に縞状の暗褐色粘質土を不規則に混じえる。エ層に類似するが、ブロック分の濃度が高い。エ層(淡黄色粗砂層)は、径3～6 mmの礫分を主成とする粗砂層に淡黄褐色粘土質シルトブロックを局部的に混じえる。オ層(褐色砂質土層)は径2～4 mmの小さな礫をボツボツ含むが、全体的には細砂がよく締まった砂質土層。カ層(淡黄褐色細砂層)は、淡黄色粘質土ブロックを包含する。キ層(淡茶褐色粘性砂質土層)は、乾くと堅くよく締まる土層で、径2～3 cmの円礫を散見するのが特徴。ク層(淡灰黄色礫混じり粘性砂質土層)は、径6～9 mmの小礫の粒を全体に混じえ、乾燥すると、キ層同様に堅く締まる。ケ層(灰黄色粘質土層)は、キ・ク層に比べ、礫分は減少。2～7層の層位に起源する二次的粘土ブロックを混在させる。

他に、コ層(淡黄白色シルトブロック混じり粗砂層)・サ層(灰白色粘質土層)・シ層(淡黄白色粘性中砂層)・ス層(淡黄色シルト層)・セ層(淡灰褐色粘性砂質土層)・ソ層(褐色粘性砂質土層)なども顔をみせる。

肩部分形成土との層位面は不整合をなしてしっかりしており、堆積土は部分的にレンズ状堆積を示して流路内に一気に堆積したようすを示す。全体的に下層ほどシルト分、粘質度も高く、中層位に粗砂・砂の堆積をみる。いずれにせよ、長い時間をかけての堆積とは考え難い一過性の特徴を示したものであった。イ層などで若干の遺物が検出されている。

当河川の本来の肩は、標高16.9mの位置にあり、検出最低深度は15.45mを計測する。（森岡）

NR-2 当流路断面は、NR-1とはかなり異なった様相をみせる（第84図）。流路はまず新たに試掘を行ったところで平面的に検出され、その内部を一部ではあるものの、層位的に調査できた（図版38）。また、本流路については、その中心部を発掘したようで、レンズ状堆積土の北側立ち上がり部分が既に確認されており、およそその幅について見通しを得ることができた。

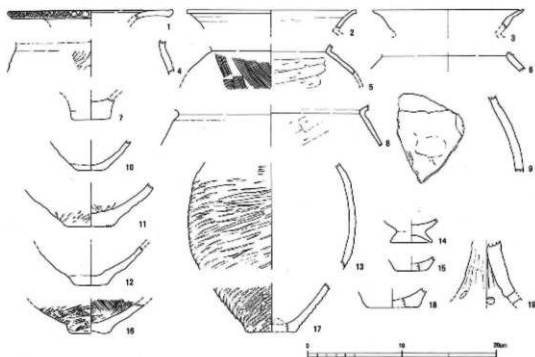
流路を平面的に検出したのは、標高16.43mの位置で、発掘を開始した盛土の上面高は17.85m付近である。旧地表面は盛土の下17.28mの位置にあって、表土層の厚さは5～8cm程。標高17.1mに形成されている近・現代水田耕土までに黄褐色の整地土が噛む。水田耕土（約10cm）・同床土（約8～12cm）の下部は既に遺物包含層（第1層）で、層厚10～25cmと厚い。その下も同様に包含層（第2層）で、層厚5～22cmを測る。いずれも土器片を含んでいる。

流路検出面直上の土層は、暗褐色粗砂層・暗茶色小礫混じり中砂層で、部分的に暗黄色シルト質粘砂や暗灰黄色粘砂のブロック土を含む特徴的な土層である。

流路内堆積土については、第84図に明示されたとおりであるが、いくつかの単位に分けることができる。最も新しい流路末期の堆積土は断面で幅1.95m、深さ55cmを測る断面「U」字形をした掘り直し部分で、主として粗砂と砂礫物により埋まったものである（ア～エ層）。この段階では、当流路も痕跡程度に埋没し終っている。次いでオ～ス層とイ・ス層から成る上部河川堆積物があり、層理面直上のス層（淡青灰色シルト層）はある時期の流路最下底部に当たるとみられ、水成層である。キ～コ層については、ラミナが顕著に認められる。この堆積単位には、あまり土器片などの遺物は含んでいない。

次は、下部河川堆積物のセ～ナ層で、土層はそれぞれ薄くこま切れとなり、チ・ト層のように砂質系でやしまる土層と、セ・ソ・タ・ツ・テ層のように砂礫物の著しい土層が互層となる。現状で最下部となるニ～ヒ層は検出範囲の関係で、その広がりがよくつかめないが、当流路の最下部の堆積状況であることが、第9地点の発掘結果を参照することによって判明する。すなわち、ノ層（淡灰黒色粘土層）・ノ'層（黒灰色粘土層）のいわゆる泥炭化度の強いビート層を下刻した形で礫層（ハ層）が突発的に陥入しており、同様な状況が第9地点の河道底部と酷似している。ハ層には断面中で1点の土器（E）を確認した。また、土器類はノ'層より後出堆積を示すニ・ヌ・ネ層からも断面確認している（B・C・D）。

以上の調査結果から判断すれば、NR-2が第9地点で発掘された河道とその方向や規模からみて、同一のものと判断することも可能であろう。なお、注意しておきたいことは、第1調査区西壁土層断面にうかがわれた流路端を示す堆積（A～J）は、本流路と関連するものであり、おそらく同一流路の肩部とみて大過ないだろう（第83図上）。（森岡）



遺物出土層位	
第1層……7	テ器……1・19
第8層……12・15	ト器……13
第8層……17・18	文器……2・3・4・5・6・9・10・15
第10層……11	ハ器……8
第15層……14	

第85図 打出岸遺跡第1地点出土遺物実測図 1/4

遺物 器形判別のつく資料19点の図化を試みたが、そのすべてが庄内式期を前後する段階の土器であった(第85図、図版62)。

1は、口縁部が大きく外反して長くのび、口縁端部を僅かに上・下に拡張する。端面には波長短くシャープな櫛波状文を施し、その上に2、3個単位で円形浮文を貼り付ける。胎土は精良で、黄白色の焼き上がりを示すが、焼成温度がやや低いためか、器壁中に灰黒色芯を有する。壺か、器台であろう。2・3は壺の口縁部とみられる。暗灰黄色を呈する2は、口縁部にやや丸味をもった端面をもつ。3は口縁部が強く外反し、端部は尖りぎみに終わる。淡黄灰色を呈する。4・5・6・8は壺の体部片である。4は叩き成形で、内面はナデる。色調は淡黄色。

5は器壁内面を薄く削り込んだ庄内式壺の体部上半片で、3片による接合資料。内面のヘラケズリは横方向に近く、口頸部界の稜線を際立たせるかのごとく、8mm前後まで境に接近して施されている。口縁部は鋭く屈折するが、残念ながら端部まで残っていない。外面は細かなハケメにより叩き成形痕が消し去られている。庄内式期新相のテクニックを使用し、一見河内タイプのものにみえるが、胎土は淡黄褐色を呈し、花崗岩の造含鉱物を含むため、在地産の庄内式壺とみて大過ない。6は、壺の頭

部残欠であるが、淡黄赤色を呈する。おそらく叩き成形とみられるが、痕跡は不明瞭である。長石・石英などの鉱物粒を胎土中に含む。

8も内面にヘラケズリを有する庄内式系の甕とみられるが、頸部での曲折はあまく、5より時間が下る資料と思われる。口縁部への移行には、僅かながら内弯傾向をみせ、外面にも縦・斜め方向のハケメ調整は認め難い。頸部付近直下の緩やかな段差は布留式甕の特徴の一つでもあり、布留式直前、庄内式期でも最新相の型式的位置を占める資料であろう。胎土には細砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。器面に鉄分の沈着が著しい。9は壺か、甕の体部片であり、大きな土器になるものと思われる。内面は板目調整の痕跡をとどめるが、外面は粘土帯の接合痕跡を顕著に残し、とくに上半部には下地となった叩き成形痕が完全に残っている。細砂を含む胎土で、外面は淡黄色に焼き上げられているが、黒斑を有する。13は、叩き成形痕を残す甕の体部片で、内面は削らず、ナデで仕上げられる。胎土中には細砂を含み、暗黄色を呈する。外面器表には煤化痕をとどめている。在地産とみられる。

7・10～12・14～18は底部片である。7は突出する平底を有し、淡黄色を呈する。甕か鉢であろう。10は底部全体が突出せず、うすく作られる。壺とみられる。11・12も壺か甕の底部と思われ、11には叩き成形の痕跡が残る。14は鉢。16は体部の重心がかなり下にくる甕であり、17とはやや形態を異にする。16は淡黄赤色、17は灰黒色を呈し、ダークな色合いである。外面にはやや細筋の明瞭な叩き目をとどめる。19は高杯脚部残欠片で、透かし孔の痕跡を残す。内面には縦方向に絞りが観察される。色調黄褐色で若干の砂粒を含む。

これらの資料は、ヌ層など同一層位から検出された土器を多く含み、テ・ト・ヌ・ハ層など流路下層の堆積土を包含層とするものである。ただし、土器型式との間には層位上の微妙な逆転もみられる。出土層位が広く分散するにもかかわらず、遺物相がまとまる点に大きな特徴がある。（森岡）

まとめ 以上のように、当遺跡発見場所の様相を知る上で、重要な知見が多々得られた。紅野芳雄の昭和初期の実査時の所見では、弥生遺跡としての認識が強かったが、时期的には中期以前の土器は確認できなかった。宮川流域にも庄内式併行期の大遺跡があった点を再評価したい。（森岡）

（3）小 結

芦屋の考古学史において、本地点については世に名高い「打出岸造り遺跡」の再検証という特筆すべき調査成果がもたらされた。既に住宅の建築工事に入っている状況下、確認調査を進めたため、調査方法には多くの制約があったが、僅かな発掘面積にもかかわらず、自然流路1条の横断面を偶発的にも検出し得、出土土器からその開削時期を3世紀前半に特定することができた。この流路については現行道路の走向などにも痕跡をとどめるものようであり、いまだ上流部で宮川から分岐した可能性が強い。また、この調査と並行して実施されていた同遺跡9地点（兵庫県派遣職員矢口裕之・北原治両氏担当）の全面調査で露呈しつつあった略東西方向の自然河道とも走向などが合致し、これと連続することも直感された。今後そのへんのことについても考察を深めていくべきであろう。

いずれにせよ、幻の打出岸造り遺跡が再び姿を現したことは、復興調査の大きな成果の一つに数えられてよい。（森岡）

5. 打出小樋遺跡

(1) 調査地の位置と環境

打出小樋遺跡は、昭和60年5月、打出小樋古墳の発掘調査に伴い確認された。古代～中世を中心とする複合遺跡で、付随して弥生時代や古墳時代の遺物、近世に属する遺物が散見される〔森岡編1993〕。

本遺跡は、打出小樋古墳周辺の確認調査が進む過程で明らかとなった平安時代から江戸時代にかけての水田跡を主体とする遺跡で、宮川左岸の翠ヶ丘台地先端部に東西200m、南北250mの広がりをも

る。総面積は35,600㎡を測り、基盤面では国府型ナイフ形石器などの旧石器も出土しており、洪積層の遺物も注意される。本遺跡の中心部に位置する打出小樋古墳は、5世紀末に築造された1辺30数mに復元される方形で、多数の円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・形象埴輪が出土している〔森岡1986・87〕。

今年度、確認調査を実施した第17地点は、その西方至近地に位置し、既往の調査で古墳周濠の一部が検出された第3地点〔森岡・白谷編1993〕、重層する中世水田跡が確認された第4・7地点とも近接する(第86図)。なお、本遺跡における被災面積は5,200㎡を測り、約15%を占有する。〔森岡〕

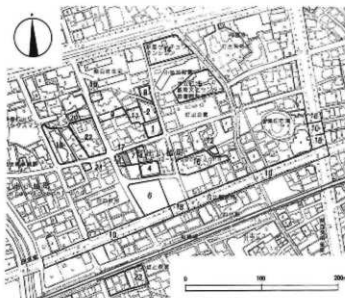
(2) 第17地点の調査



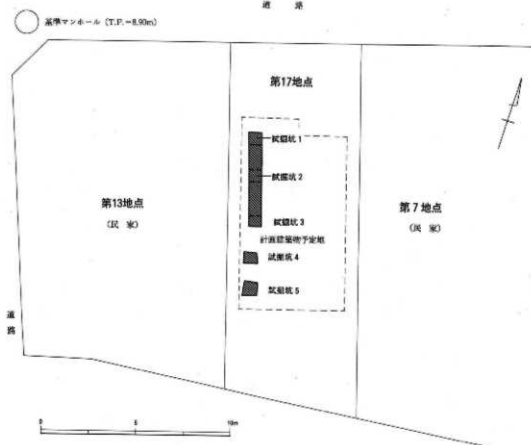
第87図 調査風景

調査動機 市内打出小樋町28番地・28番地4に所在する当該地(敷地面積132.25㎡)は、平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災により家屋が倒壊し、居宅の再建が急がれた。計画建築物は木造2階建個人住宅で、基礎施工のための掘削深度は、設計グラウンド・レベルから-50cmである。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である打出小樋遺跡の範囲内に所在し、調査地点は、打出小樋古墳の一部とみられる周濠や葦石が確認された第3地点や、中世水田造成面が確認された第7地点を東隣に控える場所である。

地権者(柳哲男)による文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書(平成7年11月9日、芦教社文375号)の提出を受け、本市教育委員会では、平成7年11月27日に確認調査を実施した。



第86図 打出小樋遺跡調査地点分布図 1/5000

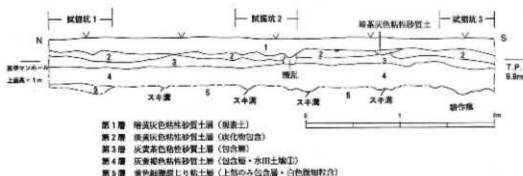


第88図 調査区配置図 1/200

その結果、第7地点同様の土層の堆積状況が認められ、現地表下約50cmで中世水田造成面を確認した。当該計画による遺構・遺物包含層等の損壊は不可避と考えられたが、早期着手の事業内容を勘案し、遺跡の調査記録がとれる最小限の掘削範囲にとどめる意向で、平成7年12月14日、第2次確認調査を実施した。発掘調査は森岡秀人・木南アツ子が担当した(図版39上)。(森岡)

調査の方法と経過 掘削は、全て人力によって行った。調査当日、既に第1次確認調査の試掘坑(試掘坑1)と同様の試掘坑(試掘坑2～5)が掘削されており、試掘坑1～3間を分層発掘し、各層位に包含される遺物を精査し、第4層及び第5層上面において遺構検出を行った。同日午後、第5層遺構掘削後、写真撮影によって記録し、東壁土層断面実測図(縮尺1/20)及び試掘坑4・5においては土層断面柱状図を作成し、夕刻には埋め戻しに至った(第87・88図、図版39中)。(木南)

基本土層 基本層序は上層より、表土層・遺物包含層・水田土壌の順に堆積する。遺構は第4層及び第5層上面において確認した。試掘坑1～2間の第4層上面において、幅9cm、検出長25cmの北西から南東方向へ走る唐草痕を検出。試掘坑2～3間の第4層上面では、上層からの攪乱坑1基・ビッ



第89図 東壁土層断面実測図 1/40

ト1基・ヒトの足跡を検出(図版39下)。足跡は最大幅10cm、長さ20cmを測る。攪乱坑以外の埋土は、淡茶白色シルトであり、第3層に由来する土とは異なる。試掘坑1～3間において、東西方向に流れる唐犁痕及びヒト・ウシの足跡や起伏が看取された。唐犁痕は明瞭なもので、8条確認した。遺物は第2層以下において土師器・須恵器の他、土師器・瓦質土器・陶磁器など中・近世遺物を包含するが、ローリングの著しい細片であり、図化は不能である。

なお、今年度国庫補助事業に伴う発掘調査として、打出小樋遺跡では、第17地点の他に第18地点(下水道埋設工事に伴う確認調査、打出小樋町58番地8先から春日町126番地3先まで)の確認調査を、平成8年2月7日、同年2月8日の2日間実施した。金津山古墳の南側に東西に走る鳴尾一御影線に設けた試掘坑1～3ではアスファルト及び鉾津等が包含され、既に地山まで削平されており、金津山古墳の東方に設けた試掘坑4においては、既存埋設物により、攪乱状態であり、遺物の出土は認められなかった。しかし、攪乱中に散在する茶色～暗茶褐色粘質土ブロックは、近隣の調査地のデータによると、弥生時代前期の遺物包含層に由来する可能性があることを追記しておきたい。周辺地のどこかに弥生前期に遡る遺跡が存在するのであろう。(森岡・木南)

遺構 試掘坑1～3の第4層上面にて、北西から南東方向へ走向する唐犁溝1条及びビット2基、ウシ・ヒトの足跡を検出した。唐犁溝は検出長25cm、幅9cmで、非常に浅い。ビットは不整形形で径20cm程度のものである。足跡は幅8cm、長さ20cmの長三角形を呈する。ヒトのものであろうか。深度は浅く、第3層が陥入する。第5層上面では東西方向に走向する唐犁溝8条を検出した。幅は10～22cmを測るもので、痕跡内には第4層が堆積する(図版39下段)。(森岡・木南)

遺物 基本土層の項で言及したとおり、若干の遺物の出土があったが、図化可能なものはない。第3・4層から鎌倉・室町・江戸時代の土器片類が出土している。(森岡)

まとめ 本遺跡の様相について追認できたが、古墳関係の遺構は検出していない。(森岡)

(3) 小 結

昭和61年の打出小樋古墳の緊急発掘調査に伴って発見された本遺跡の確認調査も17次を迎え、古代・中世を中心とする広域な耕作地の変遷実態と範囲が判明しつつある。(森岡)

6. 金津山古墳

(1) 調査地の位置と環境

金津山古墳は市内最大の方後円墳で、全長55mを測る。径42m前後を計測する後円部は3段築成で、埋葬施設などは未調査であるが〔芦屋市教委・金津山古墳周濠発掘調査会1989、森岡1990〕、周濠・葦石・埴輪をもつことが判明している。同墳は翠ヶ丘古墳群中の一墳で、5世紀後半の造営にかかり、「芦屋グループ」と呼んでいる首長系諸の一翼をなす。市内で最も南に張り出した翠ヶ丘台地の南縁付近、標高10mの所に立地している。前述した打出小槌古墳の東約130mの地点に位置し、すぐ東側は台地縁が大きくくぼんで谷状の地形をなす。



第90図 金津山古墳周辺調査地点分布図 1/5000

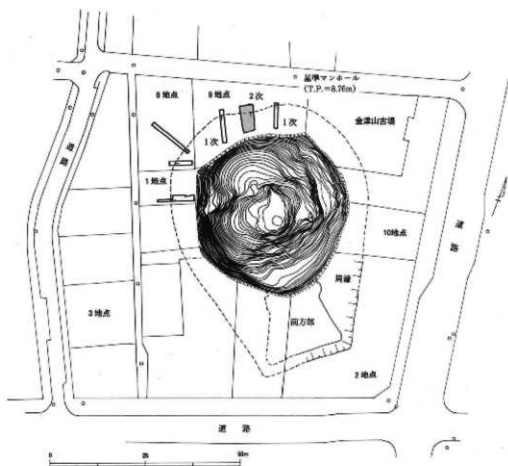
本墳と直接関連する遺構・遺物は第1・2・6・10の諸地点で見いだされており（第90図）、今回の調査地点（図版40上）も後円部の周濠及び外堤の遺存が予測された。（森岡）

(2) 第9地点の調査

調査動機 本地点は芦屋市春日町156番地1に所在する。当該地（434.37㎡）では、震災により家が損壊したため、住宅の再建が急がれ、文化財保護法に基づき、地権者（岡橋淳）より鉄骨造2階建個人住宅の新築計画が届けられた。本地点は、古墳時代中期後半に築造された金津山古墳の後円部北側に位置し、周濠等の遺構の存在が予測された（第90図）。このたびの新築計画では、基礎杭としてコンクリートパイルの打設が予定されたため、住宅への影響が出ぬよう試掘トレンチを設定し（図版40中・下）、周濠の残存状況・埋積過程を確認するための事前調査を実施した。（森岡）

調査の方法と経過 確認調査は2回実施された。第1次は平成7年8月21日に芦屋市文化振興財団の和田秀寿が担当して行われ、敷地内に2本のトレンチを設定、周濠が良好に残存していることが判明し、円筒埴輪2片と葦石2石が出土した。第2次確認調査は、芦屋市教育委員会が主体となり、森岡秀人・木南アツ子が担当して平成7年11月13日～11月27日の実働8日間実施した。調査区は敷地のほぼ中央に東西3.3m、南北8.2mの範囲を設定し、掘削した（第91図）。掘削は盛土全体及びトレンチ西壁沿いを地山まで深掘したサブトレンチを重機により掘削し、他は人力で行った。なお、測量に用いた基準高は、北側道路上に定められたT.P.=8.76mである。

平成7年11月13日、快晴。施工業者立会の下、発掘予定地に縄張りし、トレンチを設定。重機掘削を行う。人力による精査は、トレンチ東辺を第4層上面、中央部は第6層上面にとどめた。西壁土層断面図（縮尺1/20）の作成を開始する。11月14日、雨。悪天候により作業を中断しつつ、土層断面図を完成。11月15日、晴れ。第4層及び第6層上部を掘削、除去する。SK1、SX1・2を検出す



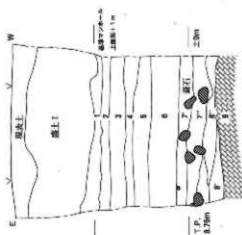
第91図 調査区配置図 1/1000 今回調査区

る。11月16日、晴れ。SK1、SX1・2の平面・断面実測図を作成する。第5層掘削排土中、石包丁1点が出土。第6層下部の除去完了。11月20日、雨のち曇り。午前中、降雨による清掃を行い、午後よりトレンチ中央部の第7層を除去する。なお、調査期間を考慮し、トレンチ東半の掘削は中断した。11月21日、晴れ。第7層を掘削し、多数の埴輪片の遺存を確認した。11月22日、晴れ。トレンチ東辺北半部D層及びE層において葺石（外堤部からの流入、二次堆積）を検出した。平面図（縮尺1/10）を作成する。中央部の埴輪出土状態図も同日に作成する（縮尺1/10）。11月27日、晴れ一時曇り。トレンチ東辺北半部の葺石を除去、下部に堆積する埴輪を検出し、平面図を作成（縮尺1/10）。その間、平板によりトレンチの配置を実測し、出土した埴輪の取り上げ作業



第92図 調査風景

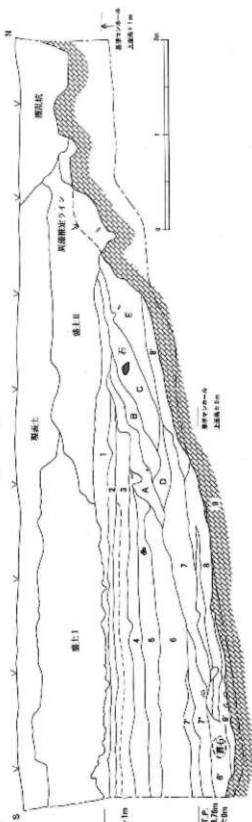
南壁



- 関東土 関東色粘土砂質土層
 盛土I 黄褐色シルトプロック混じり粘り砂質土層
 盛土II 関東色粘質土層
 第1層 灰色粘土層
 第2層 暗灰色粘り砂質土層
 第3層 黄褐色粘り砂質土層
 第4層 暗灰色粘り砂質土層
 第5層 暗灰色粘り砂質土層
 第6層 暗灰色粘り砂質土層
 第7層 暗灰色粘り砂質土層
 第8層 暗灰色粘り砂質土層
 第9層 暗灰色粘り砂質土層

- 第7層 暗灰色粘り砂質土層
 第8層 暗灰色粘り砂質土層
 第9層 暗灰色粘り砂質土層
 第10層 暗灰色粘り砂質土層
 第11層 暗灰色粘り砂質土層
 第12層 暗灰色粘り砂質土層
 第13層 暗灰色粘り砂質土層
 第14層 暗灰色粘り砂質土層
 第15層 暗灰色粘り砂質土層
 第16層 暗灰色粘り砂質土層
 第17層 暗灰色粘り砂質土層
 第18層 暗灰色粘り砂質土層
 第19層 暗灰色粘り砂質土層
 第20層 暗灰色粘り砂質土層

西壁



第93図 土層断面実測図 1/40

を行い、夕刻にはなんとか調査を終了した（第92図）。震災復興の住宅建設であったため、範囲をか
なり絞り込んだ調査であったと思う。（木南）

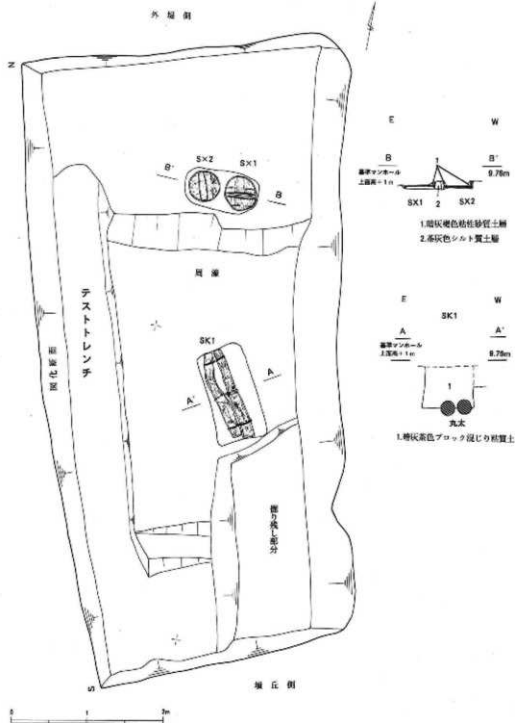
基本土層 現表土層…暗茶色粘性砂質土層。層厚16～48cmを測る。盛土層Ⅰ…黄褐色シルトブロッ
ク混じり粘性砂質土層。地山（第9層）を削土し、整地に用いたものと考えられる。現地表面下16～
28cmに遺存する。層厚46～77cm。盛土層Ⅱ…暗灰色粘質土層。昭和初頭の地図によると、当該地付近
には池が記載されており、その埋土の可能性もある。現地表面下26～47cmの所に遺存する。層厚20～50
cm。第1層…灰色粘質土層。水田耕作土Ⅰ。現地表面下76～95cm、層厚2～20cm。第2層…暗黄褐色粘
性砂質土層。水田床土。上面高はおおよそ-95cm、層厚5～9cm。第3層…淡灰褐色粘性砂質土層。水
田耕作土Ⅱ。上面高はおおよそ-100cm、層厚15～20cm。第4層…暗黄茶色砂混じり粘性砂質土層。周
濠が埋没する最終段階の土層と考えられる。第5層…暗灰黄色粘性砂質土層。緑泥片岩製磨製石包丁
が出土しており、他は埴輪・瓦器・瓦質土器・陶器等がみられる。径15cm以下の円礫を若干含む。上
面高は-124～-138cm、層厚8～21cm。第6層…暗灰茶色砂混じり粘質土層。出土遺物の主な様相は第
5層とさほど差異はない。上面高は-132～-151cm、層厚16～32cm。第7層…暗黄灰色砂混じり粘質土
層。外堤部からの流入堆積土。上面高は-151～-178cm、層厚16～30cm。暗黄褐色を帯びる第7'層と、
湿潤地が安定して淡灰茶色を呈する第7''層に細分される。なお後円部側縁に用いられたと考えられ
る人頭大の円礫をトレンチ南端にて確認している。第8層…淡灰黒色～青灰色砂混じり粘土層。水成
層。古墳築造時の須重器が包含されることが既往の調査によって判明している。浅い「U」字型の周
濠の底部に堆積する第8'層（淡黒褐色重粘土層）や、外堤部からの埴輪列前堆積を最もみる第8
''層（淡灰褐色砂混じり粘土層）に分けられる。上面高は外堤側で-129cm、濠内中央部で-206cmと
傾斜し、層厚は25cm未満である。第9層…淡青灰褐色～黄褐色礫混じりシルト層。地山。上面高は高
位では盛土によって削土されるが-34cmと浅く、低位では周濠最深部-230cmである。その他、外堤
側からの流入堆積土A～E層がみられるが、第93図の土層断面実測図および図版41・42を参照されたい。
なお、既述調査では、外堤側にも円筒埴輪が樹立していたことを証する堆積をみる（第93図、図
版41下段・42下段左）。（森岡・木南）

遺構（第94・95図、図版42・43） 周濠およびSK1、SX1・2を検出した。

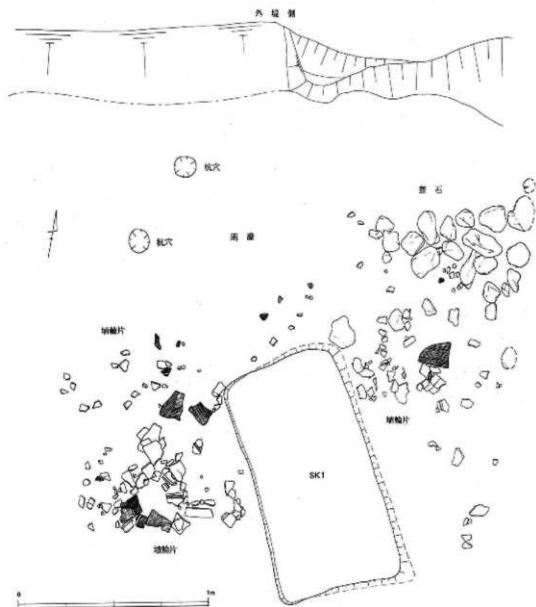
SK1 トレンチのほぼ中央に位置しており、長辺130cm、短辺70cm、深さ55cmを測る長方形ブラ
ンを呈する陥形の土坑底に丸太2本が並べて敷かれている。丸太は長さ122cm、直径19cmで、針金で
3ヶ所くくりつけられている。中央の針金は上方へとのびているものの切断されており、他のものを
ゆわえつけていたものと思われる。電信柱等の木柱の基礎と考えられる。埋土には、6層・E層を中
心に第8'層やA層などがブロック状に混入する。（木南）

SX1・2 埋桶遺構である。両者共に直径40cmを測り、上部は欠損している。長径98cm、短径54
cmの楕円形プランの陥形に2ビット一対で埋め置かれる。（木南）

周濠 先述したとおり、断面は浅い「U」字形を呈する。周濠の外縁部から濠底の中央までの水平
距離は約5.2mを測る。埴丘側の肩は未確認。周濠の縁辺部には地山上に盛土がなされ、外堤をもつ
場合があるが、当地点においては削平が著しく、その規模・態様ともに不明である。（森岡・木南）



第94図 遺構平面・断面実測図 1/50

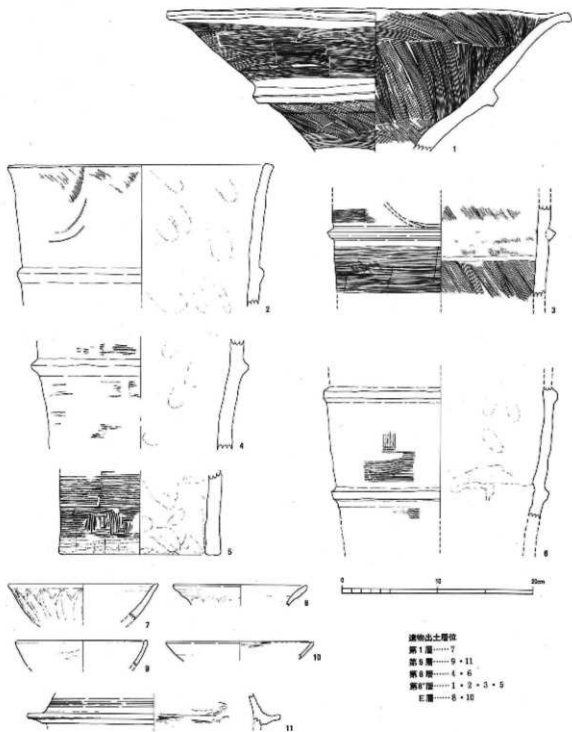


第95図 埴輪出土状況 1/20

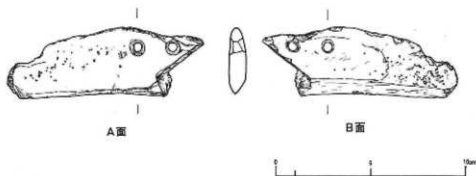
遺物 コンテナ約3箱分の遺物が出土した。大半を埴輪片が占めており、普通円筒埴輪がその中心をなす。中には赤彩の朝顔形円筒埴輪や須恵質・半須恵質のものもみられる。他に弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・青磁・陶磁器・石製品等が出土している。実測遺物については12点掲載したので（第96・97図）、次に若干の説明を加える（図版63）。

濠内に落ち込んだ多量の埴輪片と堆積層中から埋没過程を示す古代～中世の土器類が出土した。

1 は復元口径42.2cmを測る朝顔形円筒埴輪の口縁部で中程にがっしりとしたタガを付ける。内外面ともていねいなハケメ調整を行う。3 は朝顔形円筒埴輪の体部片であろう。内面タテナメハケ調



第96図 金津山古墳第9地点出土遺物実測図 1 / 4



第97図 第5層出土石包丁実測図 1/2

整、外面B種ヨコハケ調整で、透かし孔がみられる。2・4は円筒埴輪の破片。口縁部片2は、復元口径27.2cmを測り、外面ハケ、内面ユビナデ調整。器表の磨耗が著しいが、ヘラ記号「ㄥ」が残る。4はB種ヨコハケ調整痕をかりうじてとどめる。5は一見円筒埴輪の基部のようであるが、復元径も小さく、外面ヨコハケ調整もやや異質であることから、形象埴輪の一部とみておきたい。

7～11は第5層以上の層位より出土をみたもので、青磁碗(7)、土師器皿(8)、瓦器碗(9・10)、瓦質羽釜(11)など、中世の土器類が優勢的に認められる。7は能泉窯系の青磁碗で、復元口径16cm前後を測る。縁溝弁は幅広く、間弁が存在する。全体に貫入が認められる。14世紀頃のものともみられる。口径14.2cmに復元される8は、肥厚させた口縁部にヨコナデを加える。体部下半には指頭圧を施す。淡灰黄褐色を呈し、焼成はやや軟質。9は復元口径14cmの瓦器碗で、口縁端部はこころもち肥厚する。色調は内外面灰黒色で焼成は良好。13世紀代の資料とみられる。10は内面にかろうじてラセン暗文が認められ、器高は低くなる。外面灰黒色、内面漆黒色を呈する。

11は器径26.8cmに復元される瓦質焼成の羽釜で、やや軟質の焼き上がりを示す。胎土中に1mm大の石英・長石・チャートなどを含む。内面にはハケによる調整を施す。14～15世紀の年代を与えてよい。

第97図は外弯背直線刃磨製石包丁で、3分の1程度を折れによって欠損する。刃部は片刃で、使用によってやや内湾ぎみとなる。紐孔は背部に近い位置に施され、ごく僅か紐ずれの痕跡をとどめる。比較的厚みをもつ弥生時代の磨製石包丁である。(森岡)

(3) 小 結

再度、確認調査を実施した結果、金津山古墳の後円部周濠の完周状況を把握することが可能となった。第91図を見て明らかとなり、当墳の後円部は段築などについて非常にわかりにくい土地改変が加わっているが、平成元年度の後円部トレンチ調査〔森岡・和田・後神編1990〕によれば、ほぼ3段築成になることが判明している。段高は上段2.4m、中段1.9m、下段1.6mと推定され、上・中段全体は盛土手法、下段全体は地山削出し手法により構築されている。下段高は周濠底からの平均推定値であるため、下段テラス面は盛土下部高付近となり、一部削平されている公算が高かろう。(森岡)

7. 久保遺跡

(1) 調査地の位置と環境

久保遺跡は市域東部、宮川の左岸、翠ヶ丘台地の西縁に立地する鎌倉時代～南北朝時代の中世遺跡で、昭和62年に確認された〔森岡編1993〕。JR東海道線芦屋駅の東方350mの所に位置し、付近の標高は15～16mを測る（第98図）。遺構は水田跡と付属施設が主体であるが、至近地に屋敷地などの存在が推測される遺物相で、今日までに15地点で確認調査を実施している。市内で初めてヒトや動物の足跡が検出されたことで知られている。同遺跡の範囲面積は22,000㎡を測り、約7,670㎡が被災している。これは遺跡全体の約35%を占める。（森岡）

(2) 第15地点の調査

調査動機 兵庫県芦屋市親王塚町65番地に位置する当該地（敷地面積759.6㎡）は、平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災により家屋が倒壊し、住宅の再建が急がれた。計画建物は、鉄筋コンクリート造4階建集合住宅で、既存建物と規模・構造を異にした建築物のため、遺構や遺物包含層に影響が出ることが予測された。

また、当該地点は中世段階の水田造成面の検出や、前後する時期の遺物が出土して、遺跡発見の端緒をなした第1地点に近接していることから、とりあえず、層位の確認等の基礎資料入手のための確認調査を実施するに至った（図版44上）。なお、文化財保護法第57条の2第1項に関する発掘届出書は、地権者（細谷太一）より、平成7年10月13日付（芦教社文第341号）で本市教育委員会に提出されている。当地点の確認調査は森岡秀人・木南アツ子を担当した（第99図）。（森岡・木南）

調査の方法と経過 確認調査は、平成7年12月4日及び同年12月5日の2日間実施した。既往データを参考にして、地山までの深度が浅く、かつ各層位の厚みも薄いため、確認掘削は人力によって行った。

敷地内に設けた試掘トレンチは2ヶ所であり、第1トレンチは敷地北東隅から西へ5.3m、南へ9.0mの地点をトレンチ北東隅とし、最終的には2.7m×1.15m



第98図 久保遺跡調査地点分布図 1/5000



第99図 調査風景



第100図 調査区配置図 1/400

の範囲を掘削した。第2トレンチは、敷地北西隅から東へ2.5m、南へ9.1mの地点をトレンチ北西隅とし、最終的には1.96m×1.16mの範囲を掘削した(第100図、図版44下・45)。

調査初日、層位ごとに遺物を採取しながら、第5層(想定ベース)を掘削し、無遺物層であることを確認した後、土層断面図(縮尺1/20)を作成した。翌日、再度拡張区の層位的発掘及び遺構掘削を実施、夕刻には埋め戻しを行って調査を終了した。(森岡・木南)

基本土層 層序は、第1トレンチと第2トレンチとでは若干の差異が認められた点に留意しつつ、個別に述べることにする(第101図、図版45中・下)。

＜第1トレンチ＞ 現整地層の下で、盛土層・近代水田耕土・床土・遺物包含層・水成層及び遺構を1ヶ所確認した。現地表下97cmまで掘削したが、地山を確認するには至らなかった。各層位の見解は次のとおりである(第101図右)。

第1層…黄灰色砂層。既存建物に由来する盛土層。現地表下5～11cm、層厚20～35cmを測る。

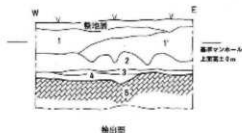
第2層…灰色粘土層。近代水田耕土。近世以降の陶磁器を中心に包含する。久保遺跡第1地点の第2層及び、本地点の第2トレンチ第2層と対応する。現地表下25～33cm、層厚3～20cmを測る。

第3層…淡黄灰色粘性砂質土層。近代水田床土。遺物は、須恵器細片を1片採取したのみであり、包含状態は稀薄な印象を受ける。第1地点及び本地点第2トレンチ第3層とも対応する。現地表下約43cm、層厚約4cmを測る。

第4層…淡黄褐色粘性砂質土層。遺物包含層。第1地点第4層の土質に近く、おそらく対応するものと思われるが、本地点では中世(14世紀代を中心とした)の良好な遺物の出土は認められなかった。現地表下約45cm、層厚約2～5cmを測る。

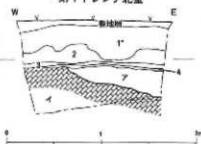
A層…淡茶灰色シルト質土層。トレンチの北・東・南方向への延長がみられ、発掘区を東へ1m拡張したが、遺構東肩を検出することはできなかった。したがって規模・形状については不明であるが、最深部は26cmを測り、浅い。現地表下47cmを測る。遺構内埋土。

第2トレンチ北壁



第1層 淡灰色粘粒砂質土層
 第1層 灰黄色粘粒砂質土層
 第1層 淡黄色砂層
 第2層 灰色粘土層
 第3層 淡黄灰色粘粒砂質土層

第1トレンチ北壁



第4層 淡黄褐色粘粒砂質土層
 第5層 淡黄褐色粘粒砂質土層
 ア層 淡黄褐色シルト質土層
 イ層 灰色粘土層

第101図 土層断面実測図 1/40

イ層……灰色ブロック混じり粘土層。水成層。褐色に変色した地山起源土がブロック状に散在する。

現地表下47cmから検出面以下に続くものと思われる。掘削を含むため、埋土の可能性あり。

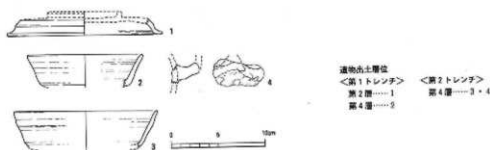
＜第2トレンチ＞ 整地層及び第1～4層に至っては土色が若干異なるものの、ほぼ第1トレンチと同じ堆積状況を示す。ただし、高低差を伴う。第2トレンチは、宮川寄りに設定したため、第1トレンチより各層位が低いレベルでもって堆積するが、層界面はほぼ水平である。西への大きな傾斜がみられないことから、おそらく中世段階から畦畔などによって仕切りが遺存し、階段状に水田が造営されていることを証している。以下、第1トレンチでは看取されなかった第5層の所見を述べ、上層については省略したい(第101図左)。

第5層…淡黄褐色粘粒砂質土層。地山とみられる第1地点の第5層に対応する。この上面において中世水田の経営が想定されており、本地点においても上面で耕作痕らしき起伏が認められたが、明確な唐犁痕や足跡などは検出できなかった。現地表下60cmから検出面以下に及ぶ。第4層下にあるイ層との具体的な関係は判らない。(森岡・木南)

遺構 第5層(地山)上面において、耕作痕が若干検出された。中世段階のものとみられるが、近世以降の耕作を同時に被っているものと思われる。(木南)

遺物 確認調査の遺物出土量は、コンテナ1箱に満たない程度で、細片が多い。器種・器形の判明する4点については、図化し得たので、以下個々に説明を加える(第102図、図版63右下)。

1～3は須恵器である。1は杯蓋である。扁平な器形を呈し、おそらく輪状(高台状)のつまみを有するタイプと考えられる。シャープに外反する口縁は強いヨコナデによって強調され、端部は丸く仕上げられている。推定口径は16.5cmと大きく、残存高は1.7cmを測る。2・3は、杯身である。2点ともに高台を付すタイプのものである。器壁は2がやや外反ぎみにのびるのに対し、3は外上方へ直線的に薄くのびる。推定口径は2が12.3cm、3が15.2cmを測る。1・2・3のすべてが中村編年IV-2段階前後に属するものと思われる。



第102図 久保遺跡第15地点出土遺物実測図 1/4

4は、土師器甕の把手である。把手は扁平なものであり、大半が欠損している。把手内面はナデによって丁寧な調整が施され、把手外面は強い指頭圧痕及び下方向へのユビナデの痕跡が明瞭に残る。残存する体部は、器壁が薄く弯曲し、丸底を呈する甕と推測される。(森岡・木南)

まとめ 事業地に2ヶ所のテストトレンチをあげ、確認調査を実施した。その結果、現地表下40～50cmの深さの所に層厚5～12cmを測る遺物包含層が1層検出され、ベース面には遺構も見い出された。遺物からみて、奈良時代までさかのぼる遺構が出てくることも予想される。

遺構の規模・性格・広がりに関しては不明な点が多いが、中世の水田跡以外に建物や池などの遺構が遺存する可能性も存在し、建築予定面積を勘案して、約400㎡の損壊部分全面の事前調査が必要であろう。さらに、中世以前の遺跡とも複合する公算は高かろう。

なお、発掘調査については、本市教育委員会では対応が困難と判断されたため、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班の専門職員による全国支援を求める予定である。(森岡)

(3) 小 結

久保遺跡では、第15地点1ヶ所のみ、本調査に移行することになったので、本書において報告した。第1地点の調査成果〔森岡・河野1987、芦屋市教委1987〕からみれば、旧地形になじむ中世の水田跡や近世の水田跡が検出されることが予想される。また、一部に建物跡が出てくる可能性も残されている。歴史時代の土器は、比較的安定した時期のものであり、注意を要する。

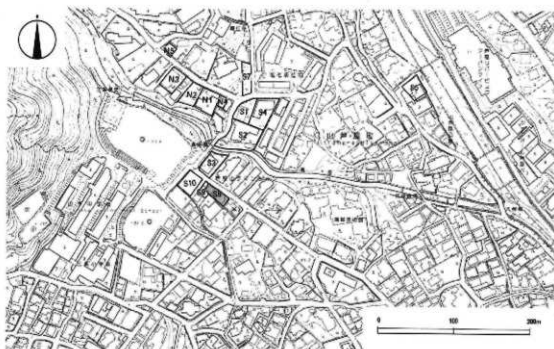
久保遺跡(第1図)は、昭和62年の発見当初、旧打出村域内の旧字名によって命名した(大石安雄 実地測量武庫郡打出村図面、明治31年9月27日)〔細川1963〕。「くぼ」は窪地を意味し、すぐ東隣りの旧字名は「堀ノ内」で、「豪族の屋敷跡」との地名考証があり、北接する旧字名「郷の本」も屋敷地に由来するもので、「打出の古き集落地」とされ〔細川1963〕、弥生土器の出土も報じられている。宮川左岸域の有望な中世遺跡として、さらなる実態把握が必要と思われる。(森岡)

8. 山芦屋遺跡

(1) 調査地の位置と環境

昭和55年、山芦屋町の城山古墳群（4・10号墳）の発掘調査に付随して有数の縄文遺跡が確認された〔森岡1982・83 a・b〕。遺跡は芦屋川と高座川の合流地点の北方、六甲山地南麓の高位段丘面にあり、標高は70～90mを測る。付近一帯は既に住宅地と化しているが、高座川左岸部のN1・S1地点の調査を皮切りにS2・S3・S4地点などが宅地開発に伴い次々と発掘されており〔藤岡・森岡1980、村川・北野・森岡・神戸大考古研1981〕、遺跡の範囲と様相が明らかとなってきた。縄文時代の資料は近畿地方でも稀少な早期の土器・石器をはじめ、前期・後期のものをみる。遺構はS4地点で早期末に比定し得る石罫炉、前期の土坑などが検出されている〔関西大学1984、網干ほか1985〕。押型文土器については編年資料として有効な層位的な知見も加わっており、正報告書の刊行が待たれる。また、S2地点では弥生時代中期の焼失住居1棟、配石遺構1基が〔多淵1982〕、S3地点では古墳時代終末期の横穴式石室墳1基（三条5号墳・方墳）が確認されている〔村川・森岡1983〕。

今回確認調査を実施したS8地点（山芦屋町55番地3・4・5）は、高座川の右岸域に位置する高位段丘面にあり、道を隔ててS3地点の南方に近接する所である（第103図、図版46）。周辺では南東30mの近傍でも縄文土器がまとまって出土した地点が存在する（山芦屋町61番地）。この地点（第103図×印）は、住宅工事現場の立会的な調査であったが、高座川右岸域で初めて縄文土器包含層の遺存



第103図 山芦屋遺跡調査地点分布図 1/5000

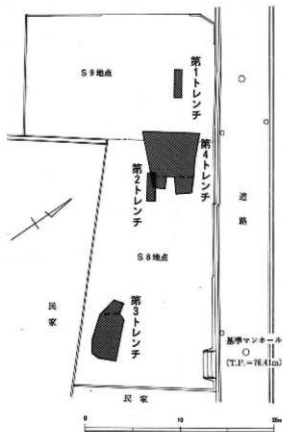
を確かめることができた。遺跡はこれより南方にも広がる可能性がある。なお、山芦屋遺跡における被災率は25,000㎡中1,700㎡の面積を占め、7%と少ない。(森岡)

(2) S8地点の調査

調査動機 山芦屋町は、表六甲の山裾に位置するため、沖積地に比べ震災による被害は少なかった。しかし、復旧・復興を必要とする住宅がないわけではなかった。平成7年10月26日、地権者飯国ミツ子(敷地面積424.2㎡)から被災建物の再建を目的とした共同住宅(木造2階建)建築に伴う発掘届出書の提出があったため、同年11月9日に試掘坑を2ヶ所あけ、確認調査を実施した。その結果、南側のトレンチに縄文土器を含む分厚い有機質土層が見いだされたため、建築工事の影響度を判断する目的で平成7年12月18日～21日に第2次確認調査を行った。北に接するS9地点



第104図 調査風景



第105図 調査区配置図 1/400

(山芦屋町55番地7、面積182.5㎡)についても同日、試掘坑1ヶ所を開いて確認調査を実施したが、ここでは遺構・遺物の出土をみなかった。包含層の範囲も限定的である。(森岡)

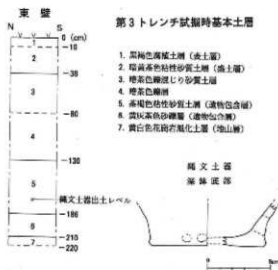
調査の方法と経過 4日間実施した第2次確認調査は、予察地点を踏襲してトレンチの設定を行い、適宜調査区を拡張した(第104図)。敷地北端設定のものを第2トレンチ、南隅のものを第3トレンチと呼称する。

第3トレンチは、拡張した結果、最終的には幅2.8m、長さ6mとなった。また、第2トレンチの駄目押しに第4トレンチを設定し、機械掘削した(第105図)。(森岡)

基本土層 第1次確認調査の基本的層序は第106図に示したとおりであり、第3・4トレンチの堆積層位は第107・108図のとおりである。

遺構 未掘部分を第5層上面まで掘り下げた時点で、土坑3基(SK-1・2・3)と堅穴住居跡1基を検出した(第108図)。(森岡)

SK-1 径36cm程の大きさで、深さ12cm。東壁内に続く。プランは長円形。(森岡)



第106図 土層断面柱状略測図・出土遺物実測図 1/3

の遺存する部分にあたったため、大量の縄文土器と石器類が出土した。これらが片鱗にすぎないことは、容易に想像がつく出土状況である。遺憾ながら、震災調査のため、一切の拡張は行わなかった。

縄文土器 全部で300点を超える縄文土器片が出土したが、そのうち図化に耐える104点を報告する（第109～113図）。主として有文土器を中心に概観したこと、できるだけ出土状態を尊重したため、実測図の配列も遺構や層別別に行ったので、文様や製作技法による群別、類別がゆきとどいていない。土器そのものの分類に基づいての詳しい報告は別巻を用意しつつあるので、編年および地域性の考察とともにそれに委ねたい（図版64・65）。

縄文土器は中期末葉～後期前葉のものに限られ、他の時期のものはない。また、両時期のものが共存の状態で出土しており、きわめて近接した製作時期の土器群とみて大過ないものである。下地の縄文は中期末に多いLRから後期初頭のRIへの転換が看取され、漸移傾向から過渡期であることを裏付ける。また、中期末の一群は、沈線幅が後期に比べ太い。胎土や色調は在地産の土器が大半であるためか、淡黄茶色を呈し、表六甲特有の石英・長石などの花崗岩起源の鉱物粒を若干含むことで共通し、明らかに搬入品であることを示唆する土器片は見受けられなかった。

竪穴住居内堆積土で最も新しい層序を占めるものはA層で、上部（1・2）と下部（3～15）に分けて取り上げたが、沈線間に縄文を充填する土器が多い。3は山形隆起をもつ深鉢の口縁部で、隆起部分には円環状の沈線区画があり、その下に紡錘文を垂下させる。4も似た構成であろう。磨消縄文の6・7は中津式であろう。6は波状口縁深鉢の波頂部に向かって1条の帯縄文をせり上がらせる。7は波頂部に刺突を施す。底部の3点（13～15）はいずれも底部の周縁が外方に突出するもので、14・15はわずかであるが、13はやや強く外張りする。試掘調査でも13と類似する形態の底部が出土している（第106図）。底面に網代痕などは認められない。

16～35は竪穴住居跡覆土中のものをB～Dの分層ごとにまとめた。16は突起状の山形口縁をもつ

SK-2 長軸56cm、短軸34cm以上、深さ9cmの浅いもので、東壁にかかる。住居内覆土を切っており、住居跡が埋まってから穿たれたものである。中央に30cm大の石塊が検出された。

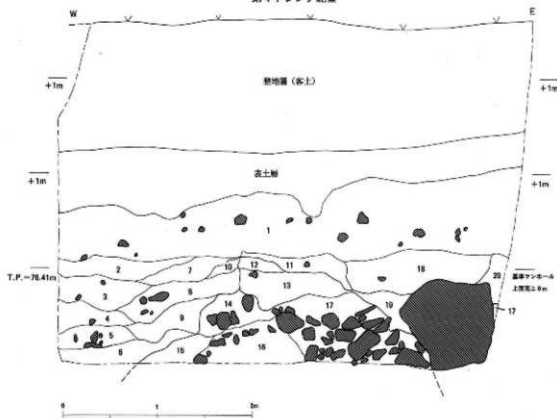
縄文土器片が出土している。（森岡）

SK-3 径30cm、深さ11cmを計測する。一部南壁にかかり、北半部に長円形の深掘ビットを有する。第5層面に構築。（森岡）

竪穴住居跡 既掘部分の東セクションの整理に際し断面確認がなされたもので、重機掘削により半壊状態になったが、掘り広げた部分で平面プランを検証し、方形の竪穴住居であることが判明した。幅2.3mを計測する。（森岡）

遺物 僅か数㎡の調査面積であったが、遺構

第4トレンチ北壁



<第4トレンチ北壁>

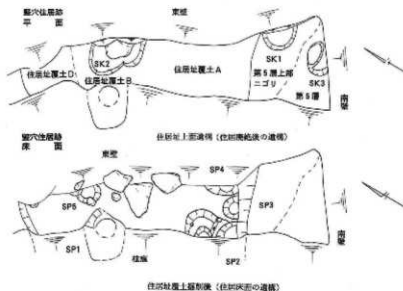
- 第1層 淡茶黄色微泥じり砂質土層
- 第2層 淡灰色中砂層
- 第3層 淡黄褐色小礫混じり粗砂層
- 第4層 淡灰色シルト質砂層
- 第5層 淡灰紫色微泥じり粗砂層
- 第6層 淡灰色粘性シルト質土層
- 第7層 淡灰褐色小礫混じり粗砂層
- 第8層 黄茶色微泥じり粗砂層
- 第9層 淡灰紫色微泥じり粗砂層
- 第10層 灰白色粗砂層

- 第11層 暗黄灰色細砂層
- 第12層 暗黄灰色シルト質細砂層
- 第13層 淡黄灰色シルト層
- 第14層 灰白色シルト混じり微泥
- 第15層 暗赤褐色粗砂層
- 第16層 淡灰褐色微泥じり粘性砂質土層
- 第17層 暗赤褐色微泥
- 第18層 茶白色シルトブロック・微泥じり粗砂層
- 第19層 暗赤褐色小礫層
- 第20層 暗黄灰色シルト層

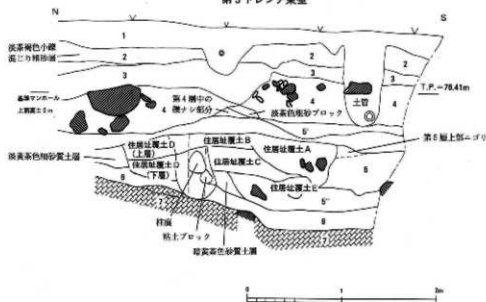
第107図 第4トレンチ北壁土層断面実測図 1/40

ので、口縁部文様として楕円形区画文をもつ。内湾する山形部分の外縁は全体的に水平方向の沈線をも5条施し、側面部を沈線区画で飾るものである。北白川C4式に比定される。条痕による器面調整を行う18は口縁部に3条の太い平行沈線を施し、体部も太い沈線による区画で飾る。これと似た調整・手法の土器は25・26・27・29・31などがあげられる。沈線の原体は巻貝の一種であるヘナタリ（の先端）によるもので、沈線のみの中津式は瀬戸内地域には多く存在し、類縁があるのだろう。23は疑似縄文を施している点、特異である。8や21は二枚貝条痕調整を施している粗製の土器である。

36～90は竪穴住居跡のベースとなっている5・5'・6層や同住居の上を覆う5'層などから出土し



第3トレンチ東壁



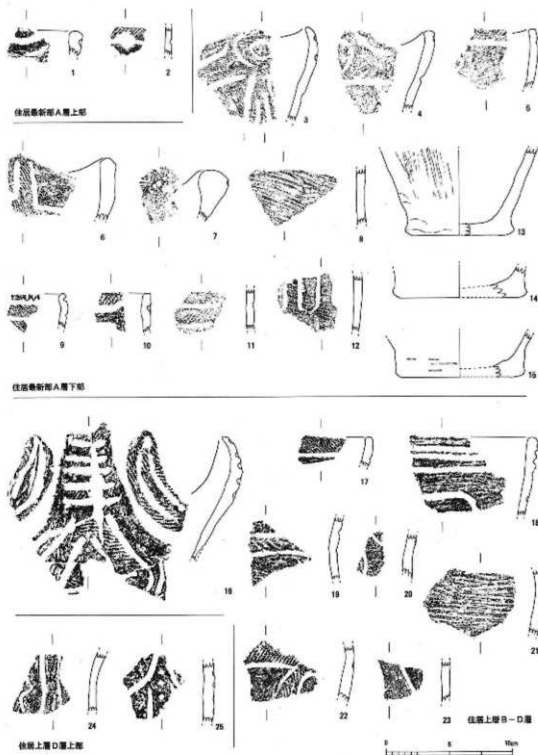
基本層位

- 第1層 第2トレンチ北壁と同じ
第2層 第2トレンチ北壁と同じ
第3層 暗茶褐色粘性砂質土層
第4層 黒灰色小礫混じり粘性砂質土層
第5層 淡茶褐色微細じり砂質土層
第6層 黄灰色砂礫層
第7層 黄白色花崗岩風化土層

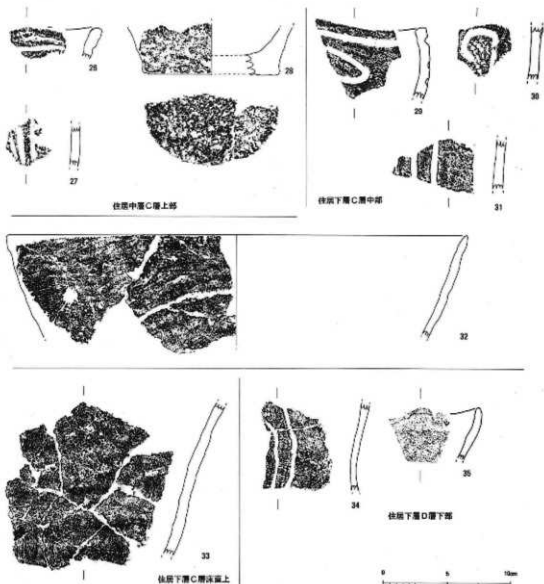
住居内堆積土

- 居住址土A 暗茶褐色粘性砂質土層
居住址土B 暗茶褐色粘性砂質土層
居住址土C 暗茶褐色粘性砂質土層
居住址土D 暗茶褐色砂質土層 (上部)
居住址土E 暗茶褐色微細じり砂質土層 (下部)
居住址土F 暗茶褐色粘性砂質土層

第108図 第3トレンチ壁六住居跡平面実測図(上)・東壁土層断面実測図(下) 1/40



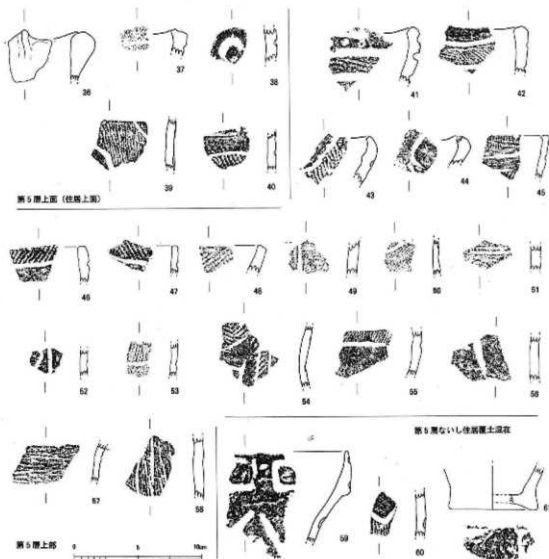
第109圖 山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(1) 1/3



第110図 山芦屋遺跡S8地点出土土物実測図・拓影(2) 1/3

た縄文土器である。36・37・41～44は波状口縁深鉢である。59は中期末から中津式への移行を示す深鉢の土器片である。84はJ字文の中を縄文が充填する。85は紡錘文とみてよい。86はボール状の浅鉢に復元できる。図化していないが、57・79・80・83・89などの二枚貝条痕調整だけの粗製の土器も比較的多い。90は太い沈線による区画文の周囲に円形竹管文をめぐらせている。区画文と竹管文のセットのくり返しを重視すれば、突起数4程度の波状口縁を想定すべきかもしれない。

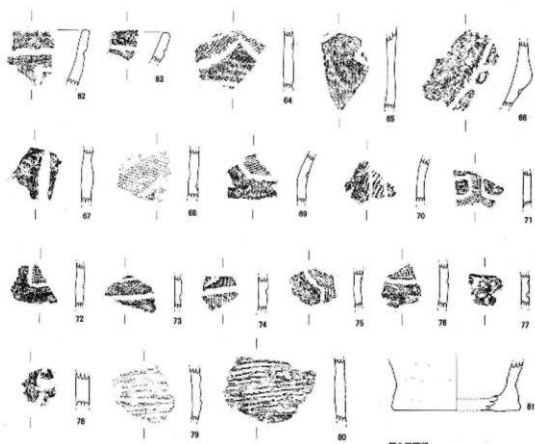
第5層最下部にも縄文土器片を含んだ落ち込み状の遺構がみられたが、91～98の土器片が出土した。91は外面に押圧痕の加わる無文の土器である。92は浅鉢形の器形になるとみられ、口縁部直下に1条



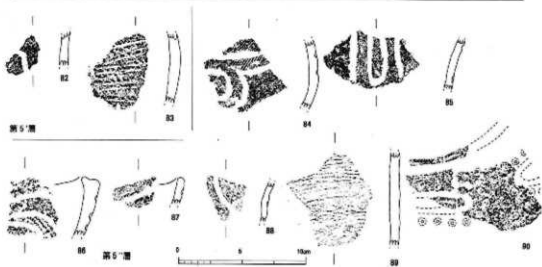
第111図 山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(3) 1/3

の沈線を施し、その上には縄文を施文する。93は平口縁の深鉢で磨消縄文を施す。口縁直下の施文帯は太い沈線による山形文様の中にRLの縄文を充填する。わずかにくびれる胴部にも沈線を伴う縄文帯がみられる。94は縄文を充填しない沈線文を施す。紡錘文になろうか。胎土はきめ細かく、焼成も良く、全体的に器壁も薄い。96・98は外面を条痕調整する土器で、深鉢96は横方向の条痕による調整痕の凹凸が断面に顕著にみられる。

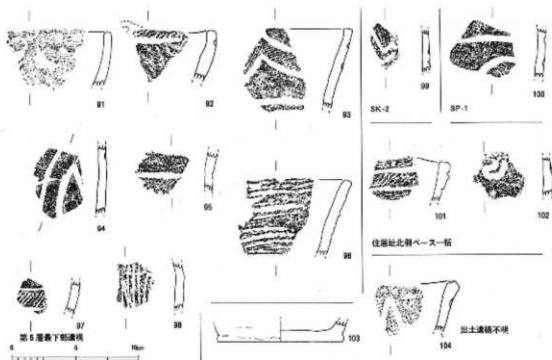
細片ではあるが、SK-2、SP-1などの遺構からも縄文土器片が出土している。100は磨消縄文を施すが、やはり沈線は太い。住居址ベースから検出された101は口縁部縁端を肥厚させる浅鉢で、ゆるい波状をなす。104も口縁の端を厚ぼったくする粗製の土器で、太い沈線により山形状の文様を



第5圖下節



第112圖 山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(4) 1/3



第113図 山芦屋遺跡S8地点出土遺物実測図・拓影(5) 1/3

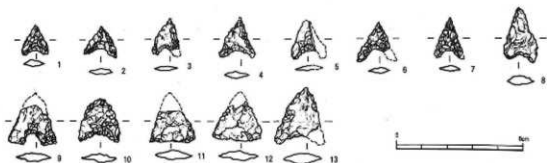
施文する。この他、比較的無文土器が出土していることを付け加えておく。(森岡)

石器 かなり急いだ調査であったため、土層を見極め、フルイを用いて表土中より極力回収することに努め、打製石鏃13点の出土を確認した(第114図)。型式・技法とパティネーションからすべて縄文時代に属するものと思われるが、石鏃の形態のみからでは細別の時期比定は困難である。1～7の小型品と8～13の通常品に分けられるが、型式と大きさは必ずしも対応しない。材質はすべてサヌカイトで、器面は淡い灰色を示すものが多いが、断面は漆黒色を呈し、そのほとんどが二上座のものと思われる。1～7は重量も軽く、完形品に復し得ても1.2～1.9gの範囲に収まる。

1・2・6・7は器面全体を押圧剥離によって細かくトリミングされた製品で、基部の抉りは浅いもの(1・2)とやや深めのもの(6・7)に分かれる。3～5は剥片を素材としたもので、大剥離面をとどめたものが多い。縁辺にエッジを加えているが、5のように基部に施しながら、身部側縁を未調整にしている例がある。8～13にも剥片鏃のようなもの(8・11～13)と比較的ていねいにトリミングを加えたもの(9・10)に弁別でき、基部を平基盤につくっている11・12とは異なり、9はいわゆる鋏形鏃と呼んでいい形態を採っている。10は先端部と凹んだ基部も丸みを帯びよう調整剥離が加えられている。3・5・6・9・11～13は脚端や先端などを一部欠く資料である(図版66)。

以上の打製石鏃は、縄文中・後期のもの以外に早期や前期に比定し得る資料を含むようである。

(森岡)



第114図 石畿実測図 2 / 3

(3) 小 結

今回の調査地点は、縄文時代の遺構・遺物の出土が確認されなかったS3地点と道路を隔てて南側に近接する場所で、大量の縄文土器の出土と堅穴住居跡の確認は予想できなかったことである。

確認調査時、第3トレンチの東壁で僅か1点の縄文土器片を目にとめたにすぎなかったが(第106図)、包含土層の色調や有機質度から、有力な縄文土器包含層であると直感した。報告する段になって振り返ってみれば、その時の判断力の良さが幸いし、山芦屋遺跡で初めて縄文文化期の堅穴住居跡を検証し得たわけである(第108図)。

堅穴住居跡の時期は、縄文中期末～後期初頭の土器の出土があったため、およそその時期を限定できるが、型式レベルまでの時期比定は、土器の伴出関係からは特定することができなかった。

ただ、土器群の時間幅はその出土状態からきわめて短期間の所産と考えられ、後期の土器には福田KⅡ式が全く含まれていない。中期末の器種構成や有文土器・無文土器の比率などが再構成される段階のものとみられ〔矢野1994a〕、中津式の成立状況を考える上に重要な資料である。無文深鉢の増加は平縁有文深鉢の無文化に伴うものであり、波状口縁有文土器が増える傾向をみせている。

また、土器様相は岡山県昭和町日羽ケンギョウ田(建行田)遺跡〔間壁夫妻1967〕と親縁的なものがみられ、山陰側では京都府竹野郡網野町浜詰遺跡第Ⅲ群・第Ⅳ群土器〔千葉・富井1993〕などとも対比し得る資料である。今後、比較・検討を深化させることによって、本土器群の編年の位置付けや地域性がより厳密化することができるだろう。「中津式の成立は瀬戸内地方以東からの影響のみを重視するのではなく、九州地方を視野に入れた双方向的な地域間関係の中で理解すべき」とする指摘〔矢野1994b〕は、重要な検証課題と考える。

震災復興の再建住宅建築に伴う事前調査で損壊深度が限られたものであったため、確認調査を超える発掘調査は断念したが、もし全面調査が行われたものなら、おそらく、縄文時代中・後期の集落域の本体をあてることになり、数多くの堅穴住居跡や付属遺構とともに、縄文遺物が多量出土したものと思われる。非常に残念な思いをしたが、これも震災復興調査ならではの緊急措置である。すべては周辺の今後の精査に期したい。

(森岡)

Ⅲ. 総 括

1. 芦屋川右岸遺跡群における寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡・月若遺跡の相対関係と様相の変化について

古代以前を盛行期とする遺跡が稠密に集塊分布する芦屋川右岸地域での確認調査は、震災後も市内で最も多くを占める位置は変わらず、本書でも14地点分の報告をまとめて記載した。とくに寺田・芦屋廃寺・月若遺跡の3遺跡は、阪急神戸線の沿線からJR東海道本線に至るまでに互いに相接する位置関係にあり、今年度の調査結果を加味しての知見から、いくつか考証の歩を進めることができた。

月若遺跡は、5ヶ所の調査地点が互いに接近し、遺跡西部の東西100m、南北150mの範囲についてかなり面的なものとなった。第20・30地点では、第1・13地点で検出されていた溝SD1〔森岡1985d・86i, 浅岡・姫路・古川1993〕の連続と考えられる溝状遺構が確認され、弥生時代後期末～庄内式併行期を上限時期とする濃密な遺物の出土をみた。埋没時期に関しても、既往のデータと符合する古墳時代後期を前後する時期とみて大過ない。類似した溝は第10地点でも認められ〔浅岡・姫路・古川1993〕、もし続くことが立証されれば、南方へ流下する人工的な流路になるが、西から連続する第1・30・13の3地点では東西方向を基調としており、第20地点において南肩がかるうじて検出され、向きを北側に変えることが判明したので、環濠になる公算もなお捨て切れない。

当該溝以北では、ほぼ同時期と推定される竪穴住居跡〔第15・33地点〕・包含層〔第3・4・9地点〕が検出されており、溝より北側にはこの文化期に属する有力な集落が広がっているものと思われる。第33地点で検出をみた土坑状の遺構〔SB1〕は、方形プランの竪穴住居跡の一部になる公算が高く、阪急沿線以北にあっては、その範囲が確実に芦屋廃寺遺跡下層におよんでおり、2遺跡が立体構造上重複することが確実視できるようになった。

月若遺跡と隣接する芦屋廃寺遺跡は、最下層において弥生時代後期末～庄内式期の包含層・遺構が存在しており、2遺跡の様相はほとんど変わらず、明確な範囲の違いは認められない。この傾向は寺田遺跡についても同様であり、おそらく3遺跡を識別・区分する拠所はないとさえいえる。仮に同文化期において同一遺跡とみなした場合、東西700m、南北350mの範囲に遺跡が大きく広がることになり、3世紀前半を中心とする集落としては市内はもちろんのこと、周辺でも最大規模を誇る。この点については、三条九ノ坪遺跡や冠遺跡の実相をも加味して既にふれたことがある〔森岡1988n〕。

古墳時代に入ると、集落の核はいくつかに分かれるようであるが、月若・芦屋廃寺・寺田の各遺跡の中でそれぞれ中心をもつ地域があり、月若遺跡では第18・19地点を中心とする地区に5～7世紀の大規模な集落が展開している〔森岡1994b, 森岡編1995, 森岡・木南編1996〕。また、芦屋廃寺遺跡のB・W地点〔芦屋市教委ほか1987, 本書Ⅱ-2-(2)〕や第1～3次調査地点〔村川1970・76〕を範囲とする5～6世紀の集落の存在も考えられる。寺田遺跡については、今日までの資料をみる限り、

この時期の遺物は西部より東部に重心があるように思われ、今後東川谷状地形以東の東部域において、5～6世紀の古墳時代集落が顕現してくるものと予想される。

これら古墳時代の集落は、摂津地域の趨勢か、7世紀初頭頃を境に掘立柱建物に急速に移行しており、集落の構造にも変化がみられる。堅穴住居段階には竈を付設する住居も多く、月若遺跡の第18・19の2地点においては約30%の堅穴住居に造り付け竈を構築していた〔森岡編1995〕。

奈良・平安時代になると、様相は一変し、出土遺物の多くが芦屋廃寺遺跡と寺田遺跡に収斂する。前者ではほぼ全域に、後者では中心域をもつように8～9世紀代の遺物が分布しており、寺田遺跡では中心建物群もみついている〔南他1985〕。今回確認調査を実施した寺田遺跡第52・57地点や芦屋廃寺遺跡W地点はその中心部の様相を示すものであり、とくにW地点では掘立柱建物など寺院関連の遺構が見込まれよう。寺田遺跡第1地点周辺は、大型扇形の掘立柱建物の一部（52地点）や東西走向の溝状遺構（57地点）などが存在し、隣接地区では今後官衙の一部をなす遺構や公的施設を想定できる遺物の出土も期待し得る。

このように、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭への移行、古墳時代中・後期から古代への遷移は、3遺跡間で非常に複雑な歩みを示している。その前史とも言うべき弥生時代前・中期の段階では、かなり不連続な一面もみせており、今のところ弥生前期の集落は月若遺跡や芦屋廃寺遺跡の範囲の内にその兆候を現してはいない。その一方、寺田遺跡においては、径100m内外の小規模な前期集団の存在が少なくとも二つ、場合によれば、北部域にも存在を予測し得、芦屋川扇状地の扇縁部微高地上に分散的居住を開始した初期水稲農耕集団の足跡を見いだすことができる。寺田遺跡（第47・52・57地点）の確認調査成果は、既往地点（第1・16・20・27地点）の発掘所見と前期後半という時期の一点でよく結びつく有機的な内容を提示しており、今後、弥生前期集落の実態が周辺地に存在する本山遺跡や本庄町遺跡、北青木遺跡などとの関係をもって明らかにされる日が来るであろう。

弥生中期への遺跡の継続は寺田遺跡では当初（第1地点）より判明しており〔南他1985〕、月若遺跡では第12地点に中期後半の遺構（SK-06など）がみられる〔森岡・白谷編1992〕。前期より土器の出土地点は散発的であり、今後、寺田遺跡全体や芦屋廃寺遺跡への広がりが考慮されるが、目下のところ、弥生時代終末期へのつながりは明確でない。

いずれにしても弥生時代終末期から古代の末に至るまでの3遺跡の変遷過程については、考古資料を繋ぎ合わせるだけでは不十分といえ、扇状地の形成という堆積環境の移り変わりを微地形レベルで見極める作業とのすり合わせが不可欠であり、遺構立地の時期別特性を把握していかなければならない。

中世段階では、寺田遺跡で2地点分（47・55地点）、芦屋廃寺遺跡で3地点分（W・29・38地点）、月若遺跡で2地点分（28・33地点）で遺物や遺構の出土をみた。寺田遺跡は遺跡西部に有力な中世集落が存在したようであり、豊富な日常雑器をもつ地点が認められる（55地点など）。月若遺跡でも、中世の累重する生活面の変遷が追える可能性があらう（28地点）。鎌倉～室町時代の3遺跡の関係については、まだ不明なことが多い。少なくとも近世芦屋の旧4ヶ村の居住域とはかなり異なる地点でも集落景観が存在したようであり、中・近世での不連続性がうかがえる。今後の究明課題にしておきたい。

（森岡）

2. 打出岸造り遺跡発見地の再調査とその成果

打出岸造り遺跡の発見は古く、戦前に遡る。発見者は西宮町長紅野太郎の長男である紅野芳雄（明治26年生～昭和13年没）で、大正6年から始まった遺跡踏査活動の過程で、本遺跡を目にとめたようである。紅野の遺著『考古小録』（紅野1940）によれば、この遺跡の記事は昭和9年3月14日の記載を初見とする。同9年6回、昭和10年には9回もの記述が頻繁にみられ、昭和9～10年の2年間に合計15の記事と踏査日実数19回の活動の証左がみられる。

紅野芳雄がこの遺跡の端緒をつかんだ地点は、既に芦屋市史に紹介したが〔村川・森岡1976〕、翠ヶ丘町に所在する阿保親王塚古墳の西方200m、宮川を越える芦月橋の西数10mの地点である。宮川に沿って岩ヶ平方面へ通ずる小径があるが、その道路の西側に高さ2m程の台地の東端を切り下げて道を開く土木地業においてみつかったらしい。

その実態は地表下35～100cmの所に弥生土器を濃密に含む包含層が分厚く遺存しており、〔村川・森岡1976〕においては、微証から弥生遺跡の存在を予想しておいたが、調査記録類の厳密な分析に立てば、庄内式期（3世紀前半）を中心とする集落のようである。

今回確認調査を実施した第1地点は、まさにこの発見地に該当し、同時期の遺物が出土している。

第85図の出土土器は、既に工事中の住宅建設現場を僅かな日数で緊急発掘した断面採取資料を中心とする土器片で詳細な検討には耐え難いものであるが、層準が著しく異なるにもかかわらず、庄内様式の範疇で理解される点で比較的単純な時期相の資料といえる。5・8などの薄蓋の体部片には右上がりの内面へう削り手法が採用されるもので、壺1の加飾口縁も第V様式より時間の下がる資料といえる。これらは、南西方向へと流下する流路状の遺構から出土しており、この流路の性格が問題となる。とくに近接する宮川との関連が気にかかるところである。

幸い上記した遺構については、並行して実施されていた同遺跡第9地点の復興調査現場（兵庫県支援職員担当）において、同規模・同堆積相・同時期相・同方向の流路が確認されており、小結において連続する同一遺構の蓋然性の高さを述べた。この流路については、一応自然河川とはしているものの、人工導水路の可能性も考慮に入れるべきであり、筆者はむしろ当該期に人為的に開削されたものと考えている。第9地点の報告は第28集の文化財調査報告〔森岡・木南編1996b〕に収める形で編集作業を進めており、翌年度に発刊の予定である。その中で改めて取り上げようと思う。

いずれにせよ、宮川水系の弥生遺跡は実態不明なものが多い。打出岸造り遺跡や大原遺跡が右岸側にある他、左岸側には一段地形が高くなる翠ヶ丘丘陵上に北から打出地造り遺跡、久保遺跡が立地し、JR東海道線以南には堂ノ上遺跡が、国道2号線を越えると、打出小樋遺跡が存在している。さらに南、海岸線に至るまでには今のところ弥生遺跡はみつかっていないが、旧海岸線に至るまでに前期に遡るような初期農耕集落が発見される可能性はあるだろう。打出岸造り遺跡はかかる宮川水系の遺跡分布の中で、初めて具体的な遺構が把握されたわけであり、水田域との広がりからは、大原遺跡とも密接な係わりが出てきたことになろう。今回の調査は、既に70年が経過した本遺跡の発見地を再び発掘したもので、古墳時代前期に遡る人工流路の一端をつかみ得た意義は大きい。（森岡）

3. 金津山古墳後円部を巡る周濠と出土埴輪について

市内最大の前方後円墳（全長55m）である金津山古墳については、昭和60年の周濠調査（第1地点）〔森岡1986h・88〕以来、たびたび調査のメスが加えられている。第2地点の成果はとくに大きく、前方部の存在が判明し、出土埴輪類からその築造時期も5世紀後半であることが確定した〔芦屋市教委・金津山古墳周濠発掘調査会1989, 森岡1995〕。後円部についてもトレンチ調査が行われており、埋葬施設の態様が予測し得るようになった〔森岡・和田・後神編1990, 森岡1995〕。

今般調査を行った第9地点は、後円部北側に位置し、後円部周濠が完周するか否かを確認することを目的に実施されたものである。調査した結果、幅数mの周濠が検出され、その堆積土を分層発掘することによってさまざまな所見が得られた（本書Ⅱ-6-(2)）。

周濠の確認地点は第91図を見て明らかなように、第1・2・6・9地点とトレンチを図示しなかった第10地点におよび、ほぼ完周することが確かなものとなった。周濠は第5層堆積時点で瓦器・瓦質土器や陶器を含み込み（第96図9・11）、第9地点において中世後期には底から約85cm堆積が進行していたとみられる（第93図）。

第8・8'層では古墳時代の遺物が中心となり、倒壊流入した埴輪を多量に含むことから、築造後、古代に至るまでに埋没が進んだ周濠底部の初期堆積と考えてよい。周濠にはこれまでの発掘調査や試掘調査でも空壕が水成化していく早い過程で須恵器や埴輪の出土を見ており、第9地点のトレンチ調査でもほぼそれを裏づけることができた。

出土埴輪は、川西宏幸氏編年〔川西1978〕の第Ⅳ期に比定し得るもので、近傍の打出小櫛古墳出土埴輪〔森岡1986g・87c・92c・95〕に先行する。翠ヶ丘古墳群における本墳の位置づけについては、伊丹市御願塚古墳など、近傍の地域に存在するほぼ同時期に築造された帆立貝形前方後円墳同士での比較考証〔森岡1990〕が今後必要となてこよう。

金津山古墳の所在する標高7～65mの翠ヶ丘丘陵には、三角縁神獣鏡を含む銅鏡数面を出土した有数の前期古墳、阿保親王塚古墳があり〔村川1971, 勇・藤岡1976, 森岡1987c・92d〕、本墳に後続する打出小櫛遺跡を含めて同丘陵上においてある程度首長系譜がたどれる。阿保親王塚古墳までは、神戸市東部海浜に点在する前期古墳の西求女塚古墳・処女塚古墳・東求女塚古墳・ヘボツ塚古墳などと同列に考えてよい築造動向が存在するが、中期後半まで下って時間的ヒアタスをもつ金津山古墳の築造は、芦屋地域における大王墓時代を迎えて以降の新しい動向である。

周辺では、前述した狹隘な神戸平野の前期古墳群地帯に中期後半から築造を開始する住吉宮町古墳群が存在し、既に総数60基におよぶ確認数がある。これらは横穴式石室を埋葬施設とする六甲山地南麓部の群集墳よりは1世紀近く先行して営まれたもので、密集度も著しく高く、墓域構成にも規則性が認められる。最近では横穴式石室墳からなる一群も見出されており、大阪府長原古墳群と酷似したタイプの平野部立地の群集墳といえる。6世紀前半築造の住吉東古墳は帆立貝形の小規模前方後円墳でありながら、その中にある盟主的位置を占めており、同様な兆候は周辺の試掘データから推察すれば、この翠ヶ丘丘陵上にも金津山古墳との関連でその存在を予測し得るようになった。（森岡）

4. 縄文時代竪穴住居跡の初見と山芦屋遺跡の範囲をめぐって

山芦屋遺跡（S8地点）〔本書Ⅱ-8にて報告〕は、今年度実施の確認調査で最も成果のあった調査地点である。既にp117の小結でふれたように、山芦屋遺跡において初めて竪穴住居跡が検出されたわけであり、覆土中および床面検出の土器から縄文時代中期と後期の両様相を併せもつ文化小期の居住区の一部が明らかとなった。

市内における縄文文化期の竪穴住居跡は、既に朝日ヶ丘遺跡の第1次調査で確認されている。朝日ヶ丘の竪穴住居跡は南北市道造道部分で検出された地山面の一部に残された人工的な加工面やピット群、土器集中地点などから成り、当時の表土下2.0mの所に位置する〔村川1966〕。その後の範囲確認調査（第2次調査）では住居跡に類する遺構は見当たらず〔藤井1974・76〕。1981年と88年の第3・4次調査では当該地山面が南北方向に幾筋ものうねりを有し、低い部分には花崗岩の巨石を含むボルダー（流石群）が厚く形成されており、二次的性格の強い包含層がそれらを覆う形で遺存している〔山中1984、山中・森岡ほか1988〕。したがって、当住居跡の時期比定に疑問がないわけではないが、当時の報告を尊重し、先例として紹介しておこうと思う。

山芦屋遺跡S8地点の竪穴住居は、現地表下110cmの位置にあり、標高75.9mの高さに残存する戸が存在している。竪穴の壁体の現状での高さは80cm、セクションにおける南北検出長約2.3mを測るが、試掘坑が狹隘なため、平面プランについては不分明な点が残った。

縄文中期末～後期初頭の時期は、東日本の土器文化の流入に伴い西日本でも竪穴住居構造に大きな変革がうかがわれる。

具体的には、中期末～後期初頭に石囲炉が導入され、地床炉と混在する。滋賀県・奈良県・三重県・福井県などにその傾向が認められ、近畿地方東部では北白川C式期に石囲炉は4本柱とセットになっているようである。プランは円形・方形の両様が存在する。これらの文化波及は、岐阜県西部から滋賀県経由という見方が強い。後期前葉には、三重県名張市下川原遺跡や滋賀県穴太遺跡で柄鏡形住居なども登場してくる。関東地方との人的交流や文化の流入の大きさをうかがわせる。大型の石柵や縄文土器の底径が増大することと関係づける人もいるが、住居の変化との関係はよく判らない。

中期最末期の兵庫県下の竪穴住居例は摂津では良好な資料がないが、播磨では増加傾向にあり、矢野健一氏は近畿地方西部における主柱2本の方形プラン住居に注目しており、里木Ⅱ・Ⅲ式頃から明確化するという。阪神間では、山芦屋遺跡・朝日ヶ丘遺跡以外に本山遺跡（第20次）〔神戸市東灘区本山本町・本山南町〕、西岡本遺跡（神戸市東灘区西岡本6丁目）、篠原A遺跡（神戸市灘区篠原中町5丁目）で縄文住居の検出例があり、本山例は掘立柱で船元Ⅰ式、西岡本例は竪穴住居（2棟）で高山寺式に比定できる。山芦屋S8地点例と同じ中期末の竪穴住居跡は篠原A遺跡でみられ〔下條・定森編1984〕、規模（4.2m×3.3m）、プラン（隅丸方形）炉（地床）柱穴（主柱2本）など、本例との比較において参考になろう。

遺跡範囲に関しては、山芦屋遺跡が高座川を越えて南方に広がることを確定的なものにした。地点別に中心地が異なることも明確となった。その重要性がさらに高まったと言えるだろう。（森岡）

5. 山芦屋遺跡S8地点における縄文中期末～後期初頭の土器様相の推移

昭和55年の遺跡発見以来、初めて竪穴住居跡が検出された山芦屋遺跡では、同時に今から4000年前前の縄文時代中期末から後期初頭にかけての縄文土器がまとまって出土した。既に報告したように〔本書Ⅱ-8〕、これらの土器は、主として竪穴住居内覆土中ないしはそのベース、さらに住居を覆う包含層より出土したもので、現場では覆土を掘り込み状に入るA、上層部堆積（B・D上）、下層部堆積（C・D下）、ピット内堆積（E）などに弁別して遺物の取り上げを果たしている。

ただし、層位ごとに慎重に取り上げたのにもかかわらず、分別した当該土器にはさほど時間的差違が反映されておらず、縄文時代中期末～後期初頭に編年される土器が層序を越えてまとまって検出されている。全体を見渡してみても、深鉢などは器形としてはかなり後期的なのに、縄文地はLRが主流で、中期末の特色を堅持している。

地域性としては、中部瀬戸内や丹後など日本海沿岸の諸遺跡とも深い関係があり、磨消縄文を獲得する段階の興味深い時期の土器片が目に残る。いわゆる中津式直前段階の資料から中津式成立期の様相までが知られ、典型中津式を下限としている。中期末の上限は、口縁部と胴部との境界に隆起帯を有する深鉢（A1・A2類）や口縁部に橋状把手をもつ深鉢（B類）がみられず、突起状山形口縁を数個配する深鉢（C類）や口縁部と胴部が屈曲する深鉢（A3類）などを含んでいることなどから〔泉1985〕、北白川C式のフレームの中では新しい段階、また、日本海沿岸部から播磨にかけて分布する平CⅢ式などとも触れ合う地域性をもっているようだ。（森岡）

6. 平成7年度の震災復興調査（初年度）を終えて

阪神・淡路大震災を契機に方針が打ち出され、実施されたいわゆる「震災復興調査」は、これまで培われてきた日本の埋蔵文化財保護行政史上、全く前例のないものであり、末端自治体の一つであるとともに最も被害率の著しかった本市では、被災当初、何もかもが暗く模索の動きとなった。

震災前、本市の埋蔵文化財保護行政のあり方は、住宅都市という性格もあって、住宅建設に伴う事前調査に主眼が置かれたものであった。調査動機の大半が個人住宅・共同住宅の計画に伴うものであり、零細なものも多く、震災後はそれにさらなる拍車をかけた。確認調査を週に3本前後入れて、復興・再建を急ぐ住宅の工事直前の事前発掘を次々に実施した年度になったが、今こうして1年間を振り返ってみると、小規模な調査ながらかなり成果や意義がもたらされたものが多かった。試掘は発掘工事委託によらなかったため、その多くが担当者と補助員の手掘りにたよった。知見の多くがその結果によるものであり、遺跡のもつよりデリケートな部分が看取できたと思う。

重機による被災家屋の解体で砂埃舞う震災後の悲愴感漂う芦屋の街中で、なんとか遺跡保護のための埋蔵文化財調査をスタートさせたわけであるが、いつピークとなるかわからぬ不安感にぬぐいきれず、次年度以降の本格的な震災復興調査に向けてかなり緊張した日々を送りつつある昨今である。

（森岡）

引用・参考文献目録

- 浅岡俊夫・姫路真保・古川久雄 1993 『芦屋市月岩遺跡—第10地点・第13地点—』六甲山麓遺跡調査会
- 芦屋市教育委員会 1987 『久保遺跡発掘調査現地説明会ノート』
- 芦屋市教育委員会・金津山古墳周縁発掘調査会 1989 『〈現地説明会ノート〉金津山古墳周縁の発掘調査—第2地点における前方部の存在確認成果—』
- 芦屋南寺発掘調査団・芦屋市教育委員会 1987 『芦屋南寺B地点遺跡発掘調査現地説明会ノート』
- 網千善教・米田文孝・山口卓也 1985 「芦屋遺跡(S4地点)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会
- 泉 拓良 1982 「西日本の縄文土器再考—近畿地方縄文時代中期後半を中心に—」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社
- 泉 拓良 1985 「第三部考察篇 第1章北白川遺分町遺跡出土の縄文土器・1 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅲ—北白川遺分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 大場秀章・藤田和夫・鶴西清高 編 1995 『近畿』〈日本の自然地域編 5 Nature in Japan〉岩波書店
- 大橋康二 1988 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 大橋康二・西田宏子 監 1986 「古伊万里」『別冊太陽』平凡社
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 関西大学考古学研究室 編 1983 『兵庫県芦屋市山戸屋遺跡S4地点現地説明会資料』芦屋市教育委員会・関西大学山戸屋遺跡調査団
- 喜谷美宜 1989 「第八章 古墳時代」『新修神戸市史』歴史編1 神戸市
- 紅野芳雄 1940 『考古小録』西宮史談会
- 神戸市教育委員会文化財課 他 1989 「第九章 神戸の遺跡」『新修神戸市史』歴史編1 神戸市
- 古代の土器研究会 編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成Ⅰ』
- 古代の土器研究会 編 1993 『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 古代の土器研究会 編 1994 『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
- 後藤博幸 1988 「六甲山の地質と岩石」『六甲山の地理—その自然と暮らし—』(田中眞吾 編著) 神戸新聞出版センター
- 下條信行・定森秀夫 編 1984 『神戸市南区篠原A遺跡』財団法人 古代学協会
- 高橋竹彦 1988 「六甲山地の地質と土壌」『六甲山の地理—その自然と暮らし—』(田中眞吾 編著) 神戸新聞出版センター
- 田辺真人・位原康太・渡部永子・岩本昌三・森岡秀人 1979 『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』芦屋市教育委員会
- 多田敏樹 1981 『山戸屋遺跡S2地点発掘調査現地説明会資料』神戸大学工学部山戸屋遺跡調査会
- 玉田芳美 1989 「中津・福田Ⅱ式土器様式」『縄文土器大観』4 後期・晩期・統縄文(小林達雄編集, 小川忠博撮影) 小学館
- 千葉 豊・高井 眞 1993 「Ⅲ遺物 1 縄文土器」『浜崎遺跡発掘調査概要』〈京都府岡野町文化財調査報告書第8集〉岡野町教育委員会
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真福社
- 寺沢薫・森岡秀人 編 1989 『弥生土器の様式と編年』近畿編1 木耳社

- 寺沢重・森岡秀人 編 1990
長崎高業試験場 編 1985
中村 浩 1981
橋本久和 1992
畑美樹徳・西原雄大 1989
- 藤井祐介 1974
藤井祐介 1976
藤岡 弘・勇 正広 1976
藤岡 弘・森岡秀人 1980
- 細川道幸 編著 1963
前田 昇 1971
間壁忠彦・間壁霞子 1967
- 松井敬代 編 1997
南 博史 他 1985
武藤 誠 1959
武藤 誠・村川行弘 1959
- 村川行弘 1966
村川行弘 1970
村川行弘 1971
村川行弘 1976
村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985
村川行弘・北野善平・森岡秀人・神戸大学考古学研究会 1981
- 村川行弘・森岡秀人 1976
村川行弘・森岡秀人 1983
- 森岡秀人 1974
森岡秀人 1980
森岡秀人 1982
森岡秀人 1983 a
森岡秀人 1983 b
- 『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
『酸化見古陶磁文様集』肥前佐佐見焼振興会
『和泉陶器の研究』柏書房
『中世土器研究序論』真跡社
『三条九ノ坪遺跡第一次発掘調査報告』三条九ノ坪遺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会
『朝日ヶ丘縄文遺跡発掘報告』『朝日ヶ丘縄文遺跡・会下山弥生遺跡』＜芦屋市文化財調査報告第8集＞ 芦屋市教育委員会
『旧石器・縄文時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
『古墳時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
『城山古墳群緊急発掘調査概報一山芦屋町19所在 城山4・10号墳。山芦屋遺跡 確認調査一』＜芦屋市文化財調査報告第8集＞ 芦屋市教育委員会
『芦屋縄土誌』 芦屋史談会
『芦屋の自然環境』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
『岡山県昭和町日羽ケンダウ田（隠行田）遺跡』『倉敷考古館研究集報』第3号 倉敷考古館
『見取遺跡（其の二）』兵庫県城崎郡竹野町教育委員会
『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告』財団法人古代学協会
『考古学よりみた古代の西宮地方』『西宮市史』第1巻 西宮市役所
『第一章 京阪神のあけぼの 京阪神の考古学遺跡』『京阪神史話』（武藤誠・木村武夫・横田健一編）魚燈先生古稀記念会
『朝日ヶ丘縄文遺跡・八十塚古墳群』＜芦屋市文化財調査報告第4集＞ 芦屋市教育委員会
『芦屋廃寺址』＜芦屋市文化財調査報告第7集＞ 芦屋市教育委員会
『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
『歴史時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
『増補 会下山遺跡』芦屋市教育委員会・明新社
『＜現地説明会資料＞山芦屋遺跡緊急発掘調査の成果-N・S両地点の縄文・弥生遺跡を中心に』 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査会
『第1篇考古篇 第2章弥生時代』『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
『山芦屋遺跡S3地点の発掘調査概覧』＜現地説明会資料＞ 山芦屋遺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会
『会下山弥生遺跡緊急発掘調査報告』＜芦屋市文化財調査報告第8集＞ 芦屋市教育委員会
『土器からみた高地性集落会下山の生活様式』『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』刊行会
『阪神地方その通説時代一『西摂の縄文文化』展に寄せて一』『芦の芽』35 芦の芽グループ
『山芦屋遺跡下地点緊急発掘調査』『昭和55年度兵庫県歴史文化財調査年報』兵庫県教育委員会
『山芦屋遺跡S1地点緊急発掘調査』『昭和55年度兵庫県歴史文化財調査年報』兵庫県教育委員会

- 森岡秀人 1983 c 『城山南麓遺跡B地点緊急発掘調査の概要—城山17号墳の発掘と中世雑物群の部分確認』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1985 a 「山芦屋遺跡〈S 3 地点〉」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985 b 『芦屋鹿寺跡南部隣接地A地点遺跡発掘調査結果の概要』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1985 c 『芦屋鹿寺A地点遺跡発掘調査の結果略報—昭和40年代芦屋鹿寺調査地点南部隣接地複合遺跡の調査—』 芦屋市埋蔵文化財調査概要60年度—1 芦屋市
- 森岡秀人 1985 d 『月若遺跡の発掘調査結果の概要』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1985 e 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986 a 「山芦屋遺跡N地点〈山芦屋町19番地1・7・8〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 b 「山芦屋遺跡S 1 地点〈山芦屋町20番地3・4・5〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 c 「山芦屋遺跡S 2 地点〈山芦屋町20番地〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 d 「山芦屋遺跡S 3 地点〈山芦屋町58番地〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 e 「寺田遺跡〈三条南町57番地、58番地2〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 f 「芦屋鹿寺南A地点遺跡〈西芦屋町13番地、14番地2・3〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 g 「打出小竈古墳〈打出小竈町32番地〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 h 「金津山古墳〈打出春日町155番地〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 i 「月若遺跡第1地点〈月若町38番地3〉」『埋蔵文化財調査メモリアル'80〜'85』〈芦屋市文化財調査報告第14集〉 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 j 「摂津・打出小竈古墳周辺の発掘調査」『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』（財）大阪文化財センター
- 森岡秀人 1986 k 『月若遺跡第2地点発掘調査の結果』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986 l 『芦屋鹿寺B地点遺跡試掘調査概要報告書—昭和60年5月23日、昭和61年6月27日実施のトレンチ3本の調査記録について—』 芦屋市埋蔵文化財調査61年度概要—2 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987 a 『芦屋鹿寺H地点試掘調査記録』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987 b 『芦屋鹿寺I地点遺跡試掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987 c 「古墳時代の芦屋地方〈上〉—近年の遺跡調査をふりかえって—」『兵庫県史』23 兵庫県史編集専門委員会 編 兵庫県史編さん室
- 森岡秀人 1988 a 「芦屋鹿寺C地点遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988 b 「月若遺跡〈第1地点試掘〉」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会

森岡秀人 1988 c	『芦屋庵寺C'地点遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 d	『月若遺跡(第2地点試掘)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 e	『打出小橋古墳(確認)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 f	『打出岸遺り遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 g	『寺田遺跡(第4次)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 h	『芦屋庵寺E'地点遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 i	『芦屋庵寺B'地点遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 j	『金津山古墳(再確認)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 k	『芦屋庵寺A'地点遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 l	『月若遺跡(第1地点)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 m	『月若遺跡(第2地点)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
森岡秀人 1988 n	『古墳時代の芦屋地方(下) - 近年の遺跡調査をふりかえって - 』『兵庫県の歴史』24 兵庫県史編さん室
森岡秀人 1988 o	『朝日ヶ丘遺跡第4次調査予定地試掘調査記録』<昭和62年度埋蔵文化財調査記録(36)> 芦屋市教育委員会
森岡秀人 1989	『芦屋市埋蔵文化財展 - 新出土の遺物を中心として - に因んで』『芦屋』41 芦屋の芽グループ
森岡秀人 1990	『前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方』『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
森岡秀人 1992 a	『芦屋考古学の先覚者 - 吉岡昭考古資料の寄贈によせて - 』『なりひら』第7号 芦屋市立美術館よりVol.7 芦屋市立美術館
森岡秀人 1992 b	『山芦屋遺跡』『兵庫県史考古資料編(兵庫県史編纂専門委員会編)』兵庫県
森岡秀人 1992 c	『打出小橋古墳』『兵庫県史考古資料編(兵庫県史編纂専門委員会編)』兵庫県
森岡秀人 1992 d	『阿保親王塚古墳』『兵庫県史考古資料編(兵庫県史編纂専門委員会編)』兵庫県
森岡秀人 1993	『伝芦屋庵寺の塔心礎(1)』『なりひら』第13号 芦屋市立美術館
森岡秀人 1994 a	『伝芦屋庵寺の塔心礎(2)』『なりひら』第14号 芦屋市立美術館
森岡秀人 1994 b	『月若町の先住者 - 古墳時代の大集落の発掘調査を終えて - 』『なりひら』第15号 芦屋市立美術館
森岡秀人 1995 a	『海辺の古墳』『古墳文化とその伝統』勉誠社
森岡秀人 1995 b	『阪神大震災と直面して - 被災地・芦屋の現状 - 』『考古学研究』第41巻第4号(通巻第164号) 考古学研究会

- 森岡秀人 1995 c 「阪神・淡路大震災と災害史の考古学」『なりひら』第18号 芦屋市立美術館
- 森岡秀人 1995 d 「埋蔵文化財の保護意識と阪神大震災―被災地芦屋の現状と展望―」『月刊文化財発掘出土情報<緊急特集 阪神大震災と文化財>』4月号(通巻149号) ジャパン通信社
- 森岡秀人 1995 e 「<文化財トピックス>大震災下でも救いたい阪神地方の遺跡」『れきし』No.51 <日本史講座機関誌'95秋号> NIKK学園
- 森岡秀人 1995 f 「兵庫県芦屋市芦屋市立美術館―人と文化財と―」『地震から文化財をまもる―阪神・淡路大震災による考古学資料の被災と防衛―』奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室
- 森岡秀人 1996 a 「兵庫県南部地震と六甲の土石流」(高浜信行らと共著)『大震災―そのとき地質家は何をしたか』東海大学出版会
- 森岡秀人 1996 b 「震災の復興と遺跡保存のはざま」『別冊歴史読本』(日本古代史 神話・伝説の最前線) 新人物往来社
- 森岡秀人 1996 c 「震災復興調査の700日―被災地・芦屋の現状と課題―」『古代学研究』第136号 古代学研究会
- 森岡秀人 編 1979 「三条岡山遺跡」<芦屋市文化財調査報告第10集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1988 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1993 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第24集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 編 1996 「平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月石遺跡(第19地点)」<芦屋市文化財調査報告第26集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 編 1996 a 「月石遺跡(第18地点)発掘調査情報」 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 編 1996 b 「平成7年度国庫補助事業阪神淡路大震災復興・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」<芦屋市文化財調査報告第28集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・河野克人 1987 「久保遺跡試掘調査記録」<昭和62年度埋蔵文化財調査概要2> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・田中晋作 1990 「摂津の円墳」『古代学研究』123 古代学研究会
- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996 「庄内式併行窯の土器生産とその動き―摂津地域」『庄内式土器研究』Ⅲ 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・白谷明世 編 1992 「平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書」<芦屋市文化財調査報告第22集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷明世 編 1993 「平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書」<芦屋市文化財調査報告第23集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷明世 編 1994 「平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書」<芦屋市文化財調査報告第25集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷明世・西原雄大・土井和幸 1988 「芦屋廃寺」地点遺跡試掘調査概要報告書―南トレンチ―昭和62年度埋蔵文化財調査概要23 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 1980 「芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)」<芦屋市文化財調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・松村明世・後神 泉 編 1991 「平成2年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書」<芦屋市文

- 森岡秀人・村川行弘 1996 化財調査報告第21集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・吉村 健 1992 『第6章 摂津国』『兵庫県の考古学』(村川行弘編) 吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿 1987 『摂津』『前方後円墳集成』第3巻 近畿(近藤義郎編) 山川出版社
- 森岡秀人・和田秀寿 1991 『芦屋麻寺G地点試掘調査報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿 1991 『表六甲の持人たち-旧石蓋・縄文時代の人びとと暮らし-』(特別展図録) 芦屋市立美術館
- 森岡秀人・和田秀寿 1992 『弥生争乱-山のムラの謎-』(特別展図録) 芦屋市立美術館
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋麻寺K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 1990 『三条九ノ坪遺跡-第2地点発掘調査情報-』<芦屋市文化財調査報告第18集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点・金津山古墳後円部範囲・構造確認調査、三条九ノ坪遺跡第4地点概要報告書』<芦屋市文化財調査報告第19集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988 『昭和62年度国庫補助事業 芦屋麻寺遺跡G、I地点発掘調査概要報告書』<芦屋市文化財調査報告第15集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・田口泰久 1991 『芦屋の歴史と文化財-歴史資料展示室常設展示図録-』 芦屋市立美術館
- 矢野健一 1993 『附載2 縄文時代中期後葉の瀬戸内地方』『江口貝塚I-縄文前中期編-』<愛媛大学法文学部考古学研究所報告第2冊> 愛媛大学法文学部考古学研究室
- 矢野健一 1994 a 『第Ⅲ部第2章 縄文後期における土器の器種構成の変化』『江口貝塚II-縄文後期編-』<愛媛大学法文学部考古学研究所報告第3冊> 愛媛大学法文学部考古学研究室
- 矢野健一 1994 b 『北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器』『古代古窯』第16集 古代古窯研究会
- 山中一郎 1984 『2朝日ヶ丘遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会
- 山中一郎・森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 1988 『朝日ヶ丘遺跡第4次発掘調査の概要』<昭和63年度埋蔵文化財調査報告> 芦屋市教育委員会
- 渡辺邦雄 編 1992 『神戸市東灘区生駒古墳調査報告-六甲東南麓地域の終末期古墳の測量調査と後期古墳研究動向-』<神戸大学考古学研究会調査報告第2集> 神戸大学考古学研究会

報告書抄録

ふりがな	へいせい7ねんどこっこほじょじぎょう あしやしないいせきはくつちょうさがいようほうこうしょ
書名	平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認調査
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	森岡秀人・木南アツ子
編集機関	芦屋市教育委員会
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL 0797-31-9066 FAX 0797-38-2089
発行年月日	西暦1996年(平成8年)3月31日

所収遺跡名	寺田遺跡（第40地点）		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市西芦屋町28番地、48番地				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	TD-40	34° 43' 49.6"	135° 18' 4.2"	19960124～19960125	17.64㎡ 共同住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺田遺跡	官衙跡（確認）	弥生・古墳・中世	流路・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器	弥生時代末～古墳時代前期の集落跡を確認
所収遺跡名	寺田遺跡（第41地点）		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市三条南町78番地				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	TD-41	34° 43' 46.4"	135° 17' 52.6"	19950411～19950413	4㎡ 個人住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺田遺跡	官衙跡（確認）	奈良・平安・江戸	遺物包含層のみ	有溝土甕・土師器・播磨	特になし。

所収遺跡名		寺田遺跡 (第47地点)		発掘担当者		森岡秀人・木南アツ子	
所在地		兵庫県芦屋市三条南町63番地					
コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 43' 45.1°	135° 17' 55.0°	19950807 19950927～19951005		54㎡	個人住宅建設工事
28206	TD-47						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺田遺跡	官衙跡 (確認・全面)	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	溝・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・磁器・瓦		重層する包含層には、時間的推移が認められる。	
所収遺跡名		寺田遺跡 (第52地点)		発掘担当者		森岡秀人・木南アツ子	
所在地		兵庫県芦屋市三条南町61番地2					
コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 43' 44.9°	135° 17' 57.4°	19950926 19951012～19951019		10.22㎡	個人住宅建設工事
28206	TD-52						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺田遺跡	官衙跡 (確認・全面)	弥生・古墳・奈良・平安・中世	掘立柱建物・土坑・段差	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・有孔土器		官衙的建物の一部	
所収遺跡名		寺田遺跡 (第55地点)		発掘担当者		森岡秀人・木南アツ子	
所在地		兵庫県芦屋市三条南町23番地2					
コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 43' 49.1°	135° 17' 58.3°	19951128～19951130		14㎡	集合住宅建設工事
28206	TD-55						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺田遺跡	官衙跡 (確認)	弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町	土坑	弥生土器・土師器・須恵器・土埴・土釜・漆鉢		弥生中期初頭の土器のほか、中世遺物が顕著。	
所収遺跡名		寺田遺跡 (第57地点)		発掘担当者		森岡秀人・木南アツ子	
所在地		兵庫県芦屋市三条南町63番地6					
コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 43' 45.5°	135° 17' 55.7°	19951211～19951213		7㎡	個人住宅建設工事
28206	TD-57						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺田遺跡	官衙跡 (確認)	奈良・平安時代	溝・土坑・落ち込み	弥生土器・須恵器・磁器・棒状有孔土器・鉄釘		古代建物と関連する小溝を検出	

所収遺跡名	打出岸造り遺跡 (第1地点)		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市大原町82番地				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	UK1-1	34° 44' 5.7"	135° 18' 47.1"	19951027~19951109	32㎡ 個人住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打出岸造り遺跡	集落跡 (確認)	弥生時代 (後期) 古墳時代 (前期)	流路・土坑・ピット	弥生土器・古式土師器	同遺跡第9地点と連続する河道を確認
所収遺跡名	打出小椗遺跡 (第17地点)		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市打出小椗町28番地、28番地4				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	UK-17	34° 43' 45.0"	135° 19' 0.5"	19951127~19951214	19.5㎡ 個人住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打出小椗遺跡	水田跡 (確認)	中世	水田面・唐草溝・ウシ・ヒトの足跡	須恵器・土師器・陶器	生産域の連続がとらえられた。
所収遺跡名	金津山古墳 (第9地点)		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市春日町156番地1				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	KN-9	34° 43' 46.8"	135° 19' 7.7"	19951113~19951127	27㎡ 個人住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金津山古墳	古墳 (第2次確認)	古墳時代 (中期)	後円部周濠	埴輪・須恵器・土師器・陶磁器・石包丁	完周する後円部周濠の一部を確認
所収遺跡名	久保遺跡 (第15地点)		発掘担当者 森岡秀人・木南アツ子		
所在地	兵庫県芦屋市親王塚町65番地				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
28206	KH-15	34° 43' 56.1"	135° 18' 50.2"	19951204~19951205	5㎡ 共同住宅建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保遺跡	水田跡 (確認)	中世	水田面・耕作痕	須恵器・土師器	中世水田面を検出

所収遺跡名		山芦屋遺跡（S8地点）		発掘担当者		森岡秀人・木南アツ子							
所在地		兵庫県芦屋市山芦屋町55番地3、4、5											
コード		北緯		東経		調査期間		調査面積		調査原因			
市町村		遺跡番号		34° 44' 11.1"		135° 17' 50.5"		19951218～19951221		51㎡		共同住宅建設工事	
28206		YA-S8											
所収遺跡名		種別		時代		主な遺構		主な遺物		特記事項			
山芦屋遺跡		集落跡（確認）		縄文時代（中・後期）		竪穴住居跡1棟・土坑・ピット		縄文土器（中・後期） 打製石鏃・剥片		市内2例目の縄文時代竪穴住居跡を検出			

圖 版

PLATE

図版1 兵庫県南部地震直後のようす



阪神・淡路大震災による阪神高速道路倒壊状況（平成7年1月17日撮影・アジア航測株式会社提供）



阪神・淡路大震災による阪神高速道路倒壊状況（平成7年1月17日撮影・アジア航測株式会社提供）



震災により住宅が全壊した調査地の現状〔南地区〕(北東から)



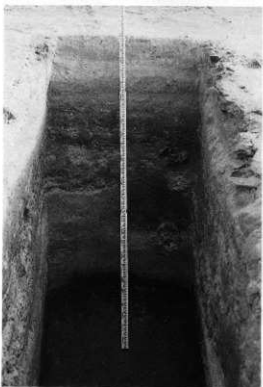
震災により住宅が全壊した調査地の現状〔北地区〕(南東から)



南地区第5トレンチ掘削状況



第5トレンチ西壁土層断面



第6トレンチ南壁SK-1・2確認状況



第6トレンチ南壁SK-1 遺物出土状態



第6トレンチ南壁SK-2 遺物出土状態



南地区第7トレンチ重機掘削状況(南東から)



第7トレンチ東壁土層断面(西から)



震災により住宅が半壊した
調査地の現状(南東から)



A トレンチ調査風景
(東から)



B トレンチ完掘状況(南から)



震災により住宅が全壊した調査地の現状(北から)



確認調査風景(北から)



第2トレンチ試掘作業風景(北東から)



第1トレンチ溝状遺構検出状態(北から)



第2トレンチ完掘状態(北から)



調査地近景(北西から)



試掘調査
T-1 東壁土層断面
(西から)



試掘調査
T-2 西壁土層断面
(東から)



本調査A区遺構確認状況（北西から）



本調査A区遺構検出状態（南から）



本調査B区3層上面遺構検出状態（南から）



本調査B区4層完掘状態（北から）



本調査A区発掘調査風景（北西から）



本調査A区溝SD-1完掘状態(西から)



本調査A区溝SD-1検出状態(西から)



試掘調査T-1 SD-1検出状態(西から)



本調査A区溝SD-1セクション(東から)



本調査A区西壁セクション(東から)



本調査B区東壁セクション(西から)



震災により住宅が全壊した調査地近景(南東から)



調査区完掘伏態(南から)



調査風景(北西から)



西壁土層断面(東から)



西壁土層断面(東から)



遺構検出状態(北から)



遺構検出状態(南から)



遺構検出状態(北から)



遺構完掘状態(東から)



掘立柱SK-1完掘状態(東から)



掘立柱SK-2, SP-1・2完掘状態(東から)



土坑SK-3完掘状態(南から)



調査地近景(南西から)



震災により住宅が全壊した調査地の現状(南から)



第1トレンチ試掘状況(南東から)



第2トレンチ試掘状況(北西から)



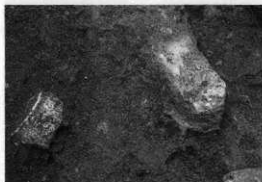
第3トレンチ試掘状況(南東から)



第1～3トレンチ完掘状況(北から)



第1トレンチ調査風景(北西から)



第1トレンチ第6層遺物出土状態(西から)



第2トレンチ東壁土層断面(西から)



第3トレンチ分層発掘状況(南西から)



第3トレンチ北壁土層断面(南から)



各トレンチ埋め戻し状況(北西から)



調査地近景(南から)



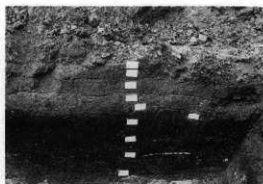
震災により住宅が全壊した
調査地の現状(南から)



確認調査風景(南西から)



重機掘削状況(北東から)



発掘区西壁土層断面(東から)



第4層上面検出遺構(南から)



第4層上面検出遺構(北から)



遺構上面検出状況(東から)



SK-1・2, SD-1完掘状態



SD-1完掘状態(南東から)



SK-2東西土層断面(南から)



調査地近景 (南西から)



調査地近景 (南東から)



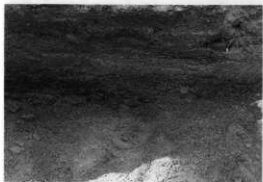
震災により住宅が全壊した調査地の現状 (北東から)



東区トレンチ掘削状況 (北西から)



東区トレンチ掘削状況 (南西から)



東区トレンチ須恵器平瓶出土状態 (南から)



同・平瓶出土状態近景 (西から)



中央区トレンチ北壁土層断面 (西側)



東区トレンチ西壁土層断面 (東から)



東区トレンチ巨石検出状態 (西から)



西区トレンチ南壁土層断面 (北から)



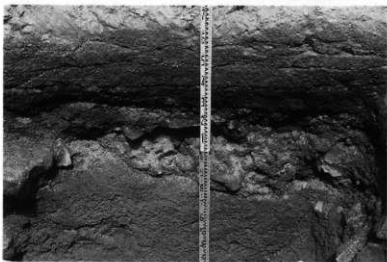
調査地近景【西側駐車場部分】（北西から）



震災により住宅が全壊した調査地東側の現状（北西から）



第1トレンチ完掘状況
（南東から）



第1トレンチ北壁土層断面
（南から）



第2トレンチ完掘状況
（北東から）



震災により寺院本堂が全壊した調査地近景 第1トレンチ掘削状況（南西から）



震災により寺院本堂が全壊した調査地近景 第2トレンチ掘削状況（南東から）



第1トレンチ南壁土層断面（北から）



第1トレンチ第5層上面透視 [SK-1, SP-1・2]（夏から）



第2トレンチ設定状況（北東から）



第2トレンチ掘削状況（南東から）



第2トレンチ東壁土層断面（西から）



震災により住宅が全壊した調査地の現状(南から)



第1トレンチ掘削状況(南東から)



第1トレンチ調査風景(北東から)



第1トレンチ北壁土層断面(南から)



第1トレンチ大溝内土器出土状態(南東から)



調査地および第2トレンチ掘削状況(南東から)



第2トレンチ分層発掘第5層上面検出状況



同・分層第7層上面検出状況〔SP-1~3〕(北から)



第2トレンチ第5層上面土器出土状態(北から)



第2トレンチ調査風景(北西から)



調査地近景(南西から)



震災により住宅が全壊した調査地の現状(南東から)



トレンチ掘削状況
（南西から）



調査風景（南西から）



試掘坑東壁土層断面（西から）



全面調査 A区遺構検出状態全景（北から）



全面調査 B区遺構検出状態（南から）



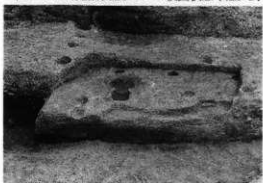
B区竪穴住居跡S B 1完掘状態全景 (東から)



B区ピット群完掘状態, S B 1 検出状態 (北から)



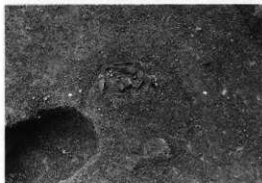
B区ピット群完掘状態, S B 1 検出状態 (西から)



B区竪穴住居跡S B 1完掘状態全景 (西から)



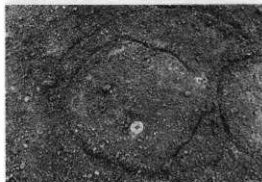
B区S B 1床面SP21~25, S K 1 検出状態 (東から)



B区SB1床面SK1土器出土状態(南から)



B区流路内土器出土状態(南東から)



A区SP31内古銭出土状態(西から)



B区流路完掘状態と土器出土状態(西から)



A区流路完掘状態(北から)



A区竈検出状態(南東から)



A区竈十字セクション設定状態(南東から)



A区竈完掘状態〔手前作業室、奥燃焼室〕(南東から)



震災により住宅が全壊した調査地近景(南東から)



調査地近景(南西から)



第2トレンチ掘削状況
(南西から)



第1トレンチ掘削状況
(南から)



第1トレンチ北壁土層断面
(南から)



調査区設定状況(南西から)



調査地全景(南から)



調査地発掘完了状況(南から)



大溝SD-1断面検出状態(東から)



調査風景(南西から)



大溝SD-1掘削過程(北から)



SD-1南端上面検出状態(西から)



SD-1土器出土状態(北から)



調査区西壁2層中須恵器出土状態(東から)



建物基礎検出状態(北から)



調査地近景(北西から)



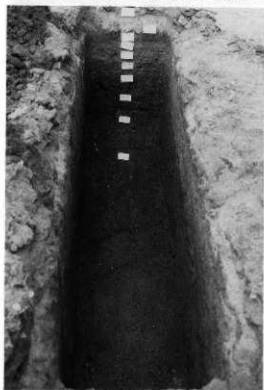
調査地近景(西から)



震災により住宅が全壊した調査地の現状(南東から)



試掘坑掘削状況(北から)



試掘坑完掘状態(南から)



第10層上面遺構検出状態〔SB1, SP1〕(東から)



調査風景(南から)



全面調査第5層 上面遺構検出状態（北から）



全面調査第5層 遺構SP・SK完掘状況（南から）



第5層上面〔北半〕遺構検出状況(南から)



同・竪穴住居跡SB-2・3検出状態(東から)



第5層上面〔北半〕遺構検出状況(西から)



同・竪穴住居跡SB2, SX1検出状態(西から)



西壁南端部土層断面(東から)



SP 5内近世染付磁器碗出土状態(西から)



調査風景(北から)



調査風景(北西から)



震災により住宅が全壊した
調査地近景（南東から）



調査地近景（南西から）



調査風景（南から）



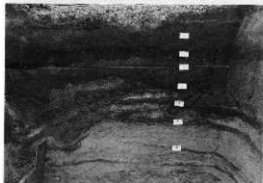
調査区Ⅰ 設定・発掘状況（西から）



調査区Ⅰ 断面精査状況（南東から）



調査区Ⅰ 北壁土層断面（南から）



調査区Ⅰ 西壁土層断面（東から）



調査区Ⅰ 西壁土器出土状態（第8層）



調査区Ⅱ流路NR-2土層断面（北東から）



調査区Ⅱ流路NR-2土層断面（細部拡大）



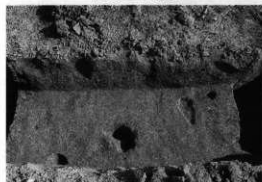
震災により住宅が全壊した調査地近景(北西から)



試掘坑土層断面



調査風景(南から)



第2-3トレンチ間第4層上面足跡検出状態(西から)



同・ヒトの足跡【拡大】(西から)



調査地近景（北から）



震災により住宅が全壊した
調査地の現状（北東から）



トレンチ設定・掘削状況



トレンチ西壁土層断面・周濠上面検出状態(北東から)



トレンチ西壁土層断面・周濠掘削状態(北東から)



周濠内埴輪片・葺石出土状態(東から)



トレンチ西壁土層断面(南東から)



SK1掘削状況(東から)



周濠堆積土内石包丁出土状態(南東から)



周濠内埴輪片出土状態（西から）



周濠内埴輪片出土状態（西から）



震災により住宅が全壊した調査地の現状(東から)



第1トレンチ掘削状況(南東から)



第1トレンチ【ア・イ層】完掘状況



第1トレンチ北壁土層断面（南から）



第2トレンチ北壁土層断面（南から）



第2トレンチ第5層上面遺構検出状態（東上方から）



震災により住宅が全壊した調査地近景（南から）



震災により住宅が全壊した調査地近景（北から）



第3トレンチ内竪穴住居跡調査風景 (北西から)



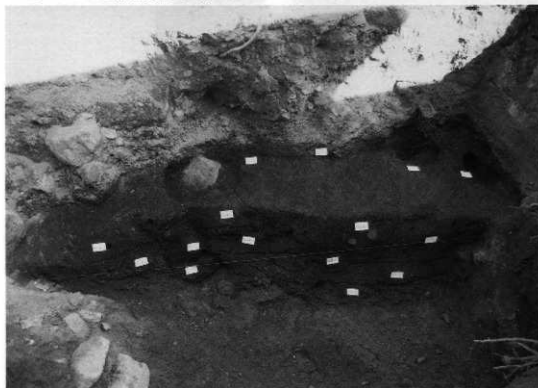
調査風景 (北から)



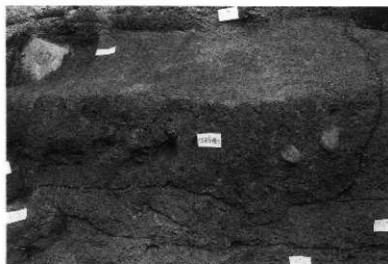
第4トレンチ重機掘削状況 (北西から)



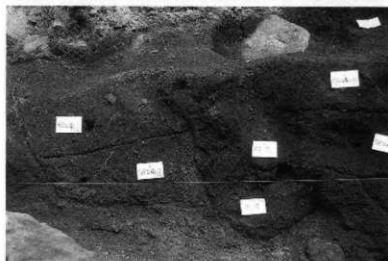
第3トレンチ掘削状況 (北から)



第3トレンチ竪穴住居跡 上面・断面検出状態 (西から)



第3トレンチ壁穴住居跡
覆土土層断面〔南半部分〕
(西から)



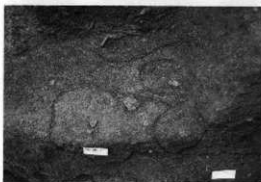
第3トレンチ壁穴住居跡
覆土土層断面〔北半部分〕
(西から)



第3トレンチ壁穴住居跡
床面ビットなど完掘状態
(西から)



第3トレンチ竪穴住居跡覆土C層中の縄文土器出土状態



竪穴住居跡床面ビット群SP2～4検出状態



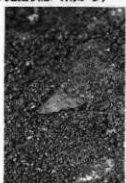
第3トレンチSK-2完掘状態 (南から)



第3トレンチSK-1完掘状態 (南西から)



D層縄文土器出土状態



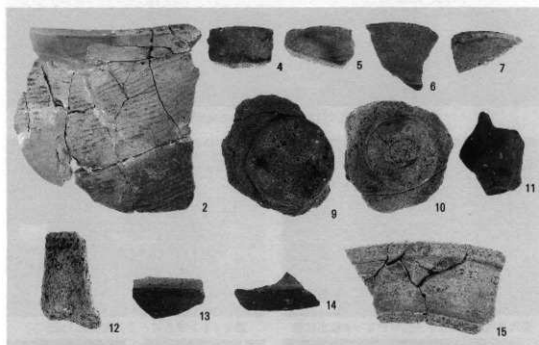
D層中 石礫出土状態



彌生土器(長頸壺)



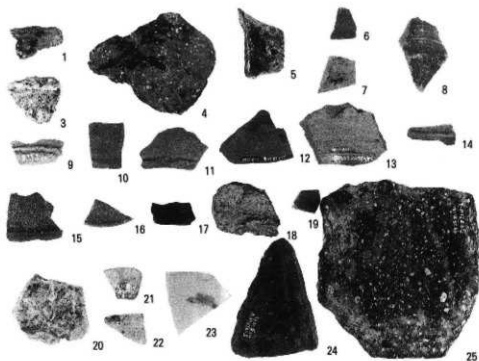
彌生土器(甕)



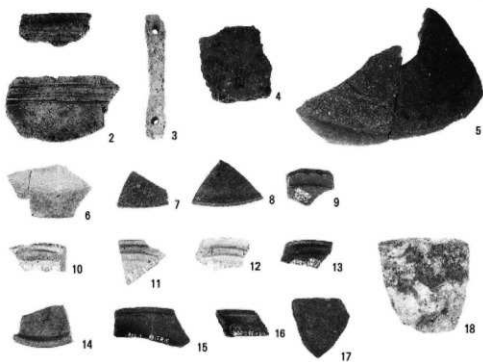
彌生土器(2~12. 壺・甕・鉢・高杯) 須恵器(13~15. 杯身・高杯・甕)



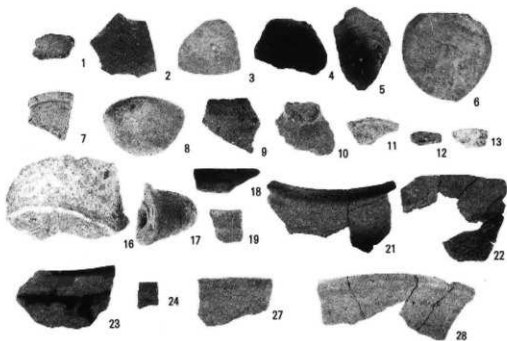
須恵器(高杯)



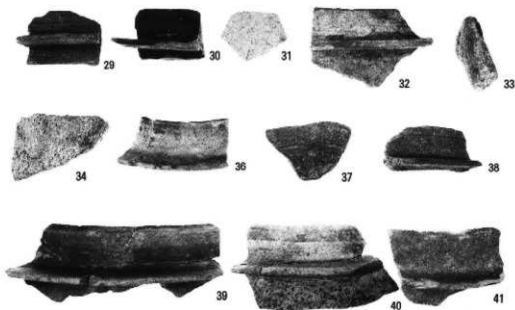
弥生土器(1・3～5, 壺・甕・鉢) 須恵器(6～16, 杯蓋・杯身・壺・高杯・平瓶)
土師器(17・18・21・22, 埴・皿) 瓦器(19・20, 埴) 染付磁器(23, 埴) 瓦(24, 平瓦・25, 丸瓦)



弥生土器(1・2) 土鍾(3) 須恵器(5～14) 土師器(4・15～17) 瓦器(18)



弥生土器・土師器(1・4・5・9・10) 須恵器(2・3・6・8・11・12・15)
緑釉陶器(16) 土師器小皿・瓦器・土塼・羽釜・東播磨こね鉢(13~15・17~28)



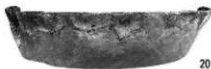
瓦器(碗, 31) 瓦質土器(29・30・32・33・35・36・38・39~41, 羽釜)
須恵質土器(37, こね鉢) 平瓦(34)



土師器(皿)



土師器(皿)



土師質土器(土鍋)



須恵質土器(こね鉢)



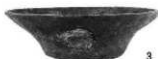
土師質土器(土鍋)



瓦質土器(土釜)



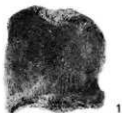
弥生土器(甕)



弥生土器(壺)



須恵器(壺)



1



4



6



7



5



8



9



11

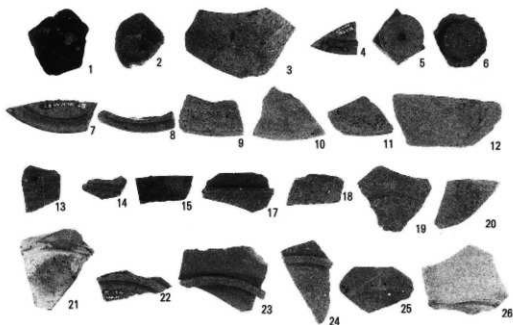


12

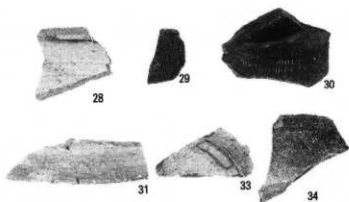


13

弥生土器(1, 甕) 須恵器(4~9, 杯・皿) 染付磁器碗(11) 棒状有孔土鏝(12) 鉄釘(13)



弥生土器 (1・2, 壺底部) 須恵器 (3~26, 杯・高杯)



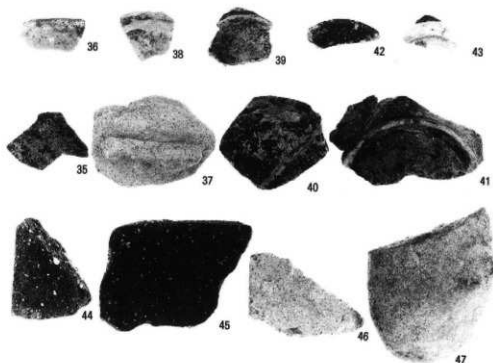
須恵器 (28~34, 壺・甕・鉢・脚台部)



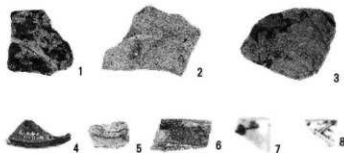
須恵器 (平瓶)



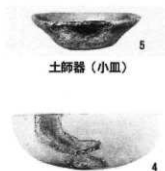
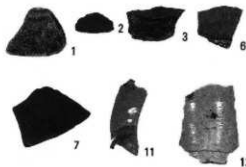
須恵器 (高杯)



土師器 (41・42) 黒色土器 (36・38~40) 瀬戸天目茶碗 (43) 瓦 (44~46) 石器 (47) [以上, W地点]

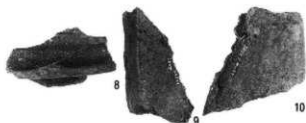


土師器 (1, 壺) 須恵器 (2~4, 杯・高杯) 瓦器 (5, 碗) 須恵質土器 (6) 磁器 (7・8, 碗) [以上, 第29地点]



土師器 (1) 須恵器 (2・3・6, 杯・台付壺・碗) 土師器 (7, 杯) 陶磁器 (11・12)

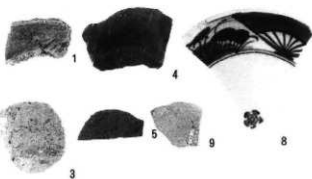
土師器 (杯) [以上, 第38地点]



瓦質羽釜(8) 丸瓦(9・10)〔以上 第38地点〕



弥生土器(甕)



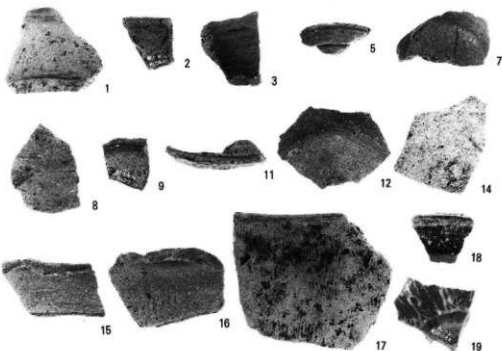
弥生土器(1~4) 須恵器(5) 肥前磁器(8) 土師器(9)



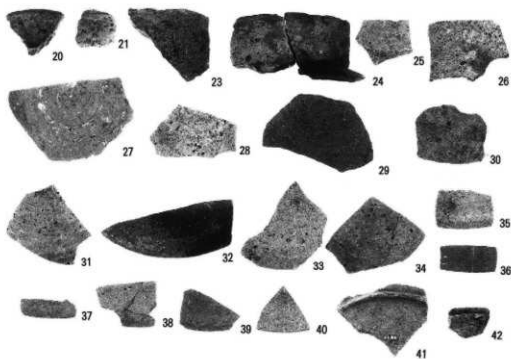
唐津(平碗)



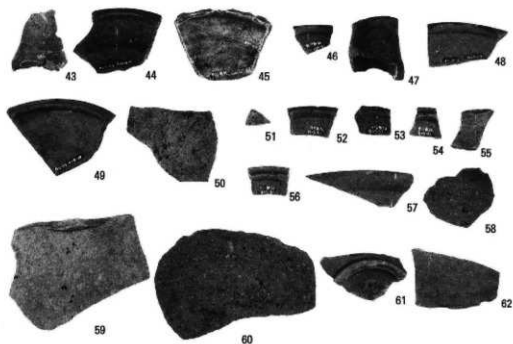
肥前磁器(染付碗)



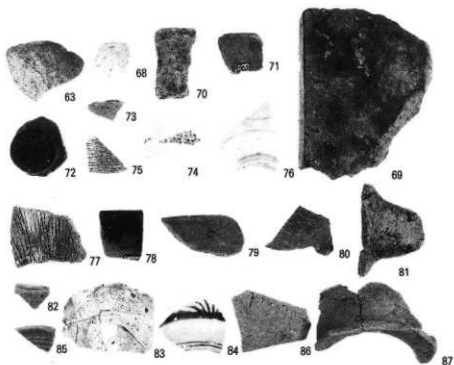
弥生土器・土師器(1~7) 須恵器(8~16) 土師器(17) 丹波焼(18) 唐津焼(19)



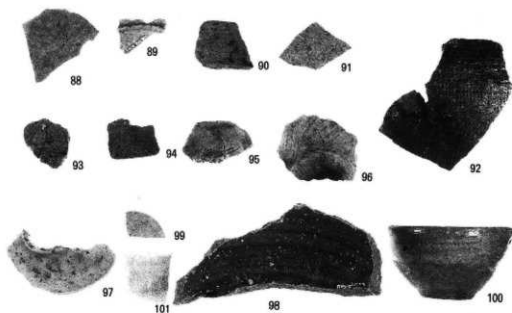
弥生土器・土師器（20～24，壺・甕）須恵器（25～42，杯・高杯）



須恵器（43～62，杯・高杯・壺・甕・鉢）



弥生土器・古式土師器(壺・甕・鉢)土師器(杯・把手)須恵器(杯・甕)陶器(擂鉢)磁器



弥生土器・古式土師器(壺・甕・鉢・高杯)須恵器(杯・甕)灰釉陶器(唐津)



弥生土器(甕)



弥生土器(鉢)



蛸壺形土器



須恵器(杯身)



須恵器(杯身)



古式土師器(直口壺)



須恵器(甕体部片)



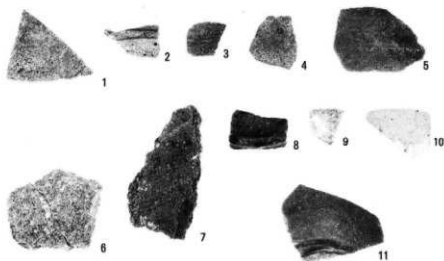
寛永通宝銭(表面)



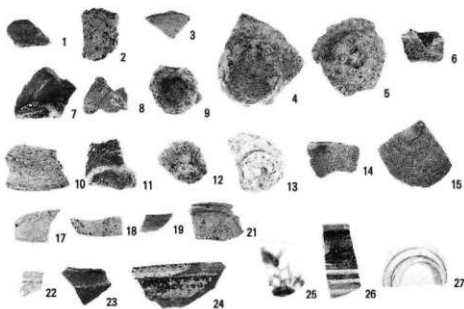
寛永通宝銭(裏面)



須恵器(甕体部片)



須恵器(1~5, 杯・短頸壺) 平瓦(6・7) 土師器(8~10, 碗・小皿・中皿) 青磁碗(11)



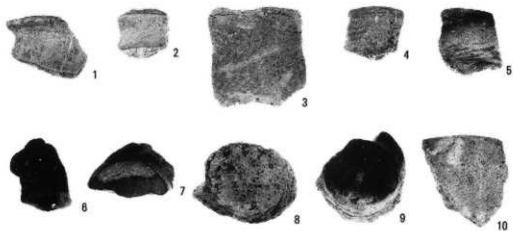
弥生土器・古式土師器(1~14) 須恵器(15~24) 磁器(25・26) 染付磁器碗(27)



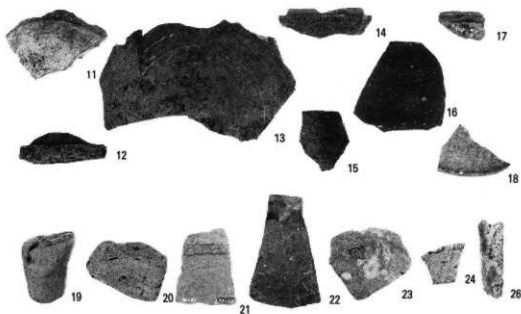
須恵器(杯蓋)



須恵器(杯身)



弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢・製塩土器)



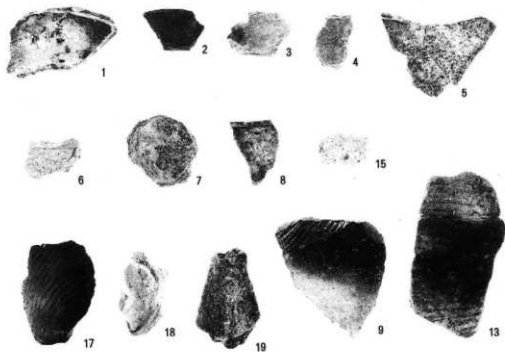
須恵器 (杯・平瓶・高杯) 土師器 (把手) 瓦器 (小皿) 棒状有孔土錘



染付磁器碗



北宋銭「治平元寶」



弥生土器・古式土師器 (壺・甕・鉢・高杯)



壺ないし鉢

甕

壺



鉢



甕



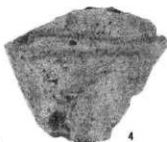
朝顔形円筒埴輪（口縁部・頸部）



同（体部）



円筒埴輪（口縁部）



円筒埴輪（体部）



円筒埴輪（体部）



形象埴輪（基底部）



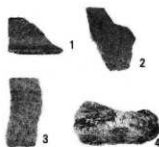
石包丁（A面）



石包丁（B面）

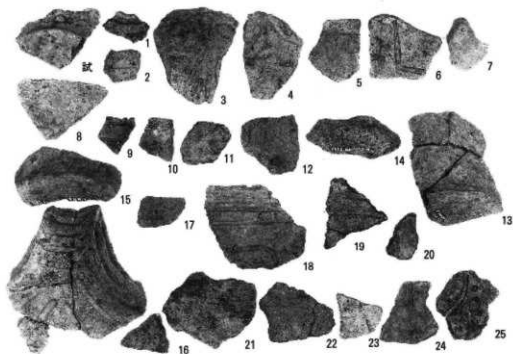


中世土器・陶磁器類（青磁碗・土師器皿・瓦質羽釜）

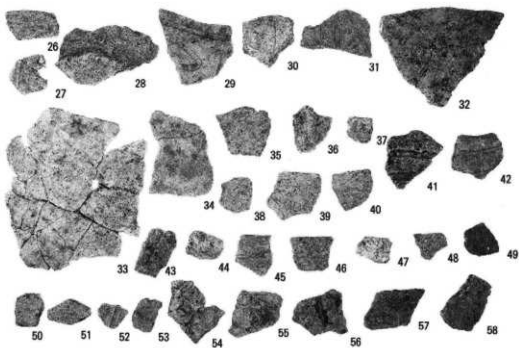


久保遺跡（第15地点）

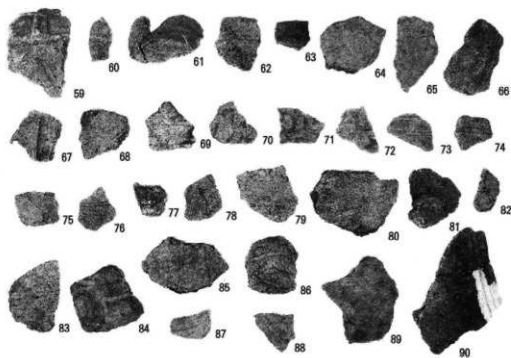




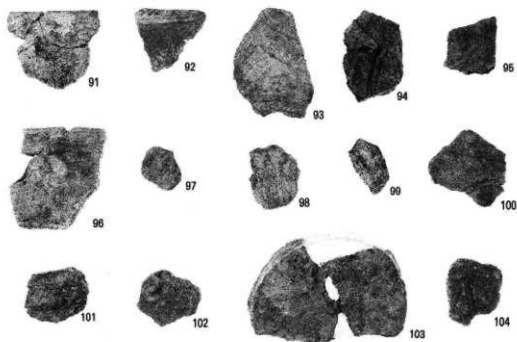
縄文土器 (1)



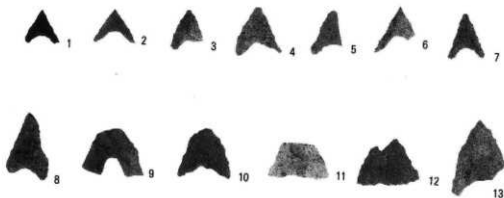
縄文土器 (2)



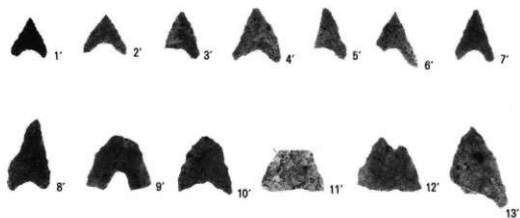
縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



打製石鏃（A面）〔サヌカイト製〕



打製石鏃（B面）〔サヌカイト製〕

あ と が き

平成7年度は、本市の文化財保護行政の長い歴史の上で、かつてない試練の年であった。言うまでもなく、阪神・淡路大震災の発生とその後の経過を指しているわけであるが、住宅都市芦屋の被害は、まさしく日々の市民生活を脅かすこととなり、住まいの再建が焦眉の急を要する問題として長期にわたって浮上してきた。建物の下には、集落跡や水田跡、古墳など数多くの遺跡が眠っている。

この経験のない震災の情勢下、文化庁は急がれる復興区域や住宅建設地に遺存する埋蔵文化財を最低限保護できることを前提に、可能な限り事前の発掘調査を軽減した「基本方針」を打ち出し、本文に記した経過をたどって、その実現への方途を模索した。

本書は、その方針下で定められた適用要領に基づき実施された調査のうち、発掘深度や軽減の方法など遺跡の調査内容を決定する確認調査19件分を収録したものである。遺跡面積に占める割合の乏しい小さな調査の集積であるが、震災復興調査の内容を規定づける重要な調査であり、どのように各現場で判断していったかが逐一記録化されたものともいえる。言わば、震災直後から始まった埋蔵文化財保護の最前線事業の一つといえ、一つ一つの試験調査が様々な困難を克服しつつ行われたことも読みとっていただければ幸いである。

震災後、急増した発掘調査の事業量の圧迫に加え、蓄積された大量の出土品の整理場所確保が緊急課題となったが、本書は、そうした苦難の事態を一步一步打開しつつ執筆・編集された文化財調査報告の第2冊目に当たる。震災下の遺跡保護を証拠づける数々の成果があったと思うが、これらはひとえに芦屋の土地を愛する地権者一人一人のご協力の賜物であり、またこの事業を推進した多くの方々への援助のおかげである。

末筆ながら、発掘調査担当者として真心より感謝申し上げる次第である。

(森岡秀人)

◀ 裏表紙カット ▶

当土器片は、縄文遺跡として阪神地方では知名度の高い山芦屋遺跡の第8地点の試験坑の一つから出土した縄文土器の破片である。突起状の山形口縁の一部であり、土器型式としては、北白川上層C4式に属する。当遺跡で初めてみつかった縄文時代中期末の堅穴住居跡から検出された資料であり、完形品であればさぞ優品であつたろうと想像する。戸塚由美子実測、木南アツ子製図、中井みどり手拓。

芦屋市文化財調査報告 第27集

平成8年3月31日 印刷発行

発行者	芦屋市教育委員会 社会教育部 文化財課 〒659 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-31-9066(直通)
編集者	芦屋市教育委員会 社会教育部 文化財課 〒659 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-31-9066(直通)
印刷所	株式会社 旭成社 〒651 神戸市中央区若菜通5-1-16-280 TEL. 078-222-5800(代表)

Ashiya Archaeological Record 27



1988. 3

Ashiya City Board of Education, Japan